

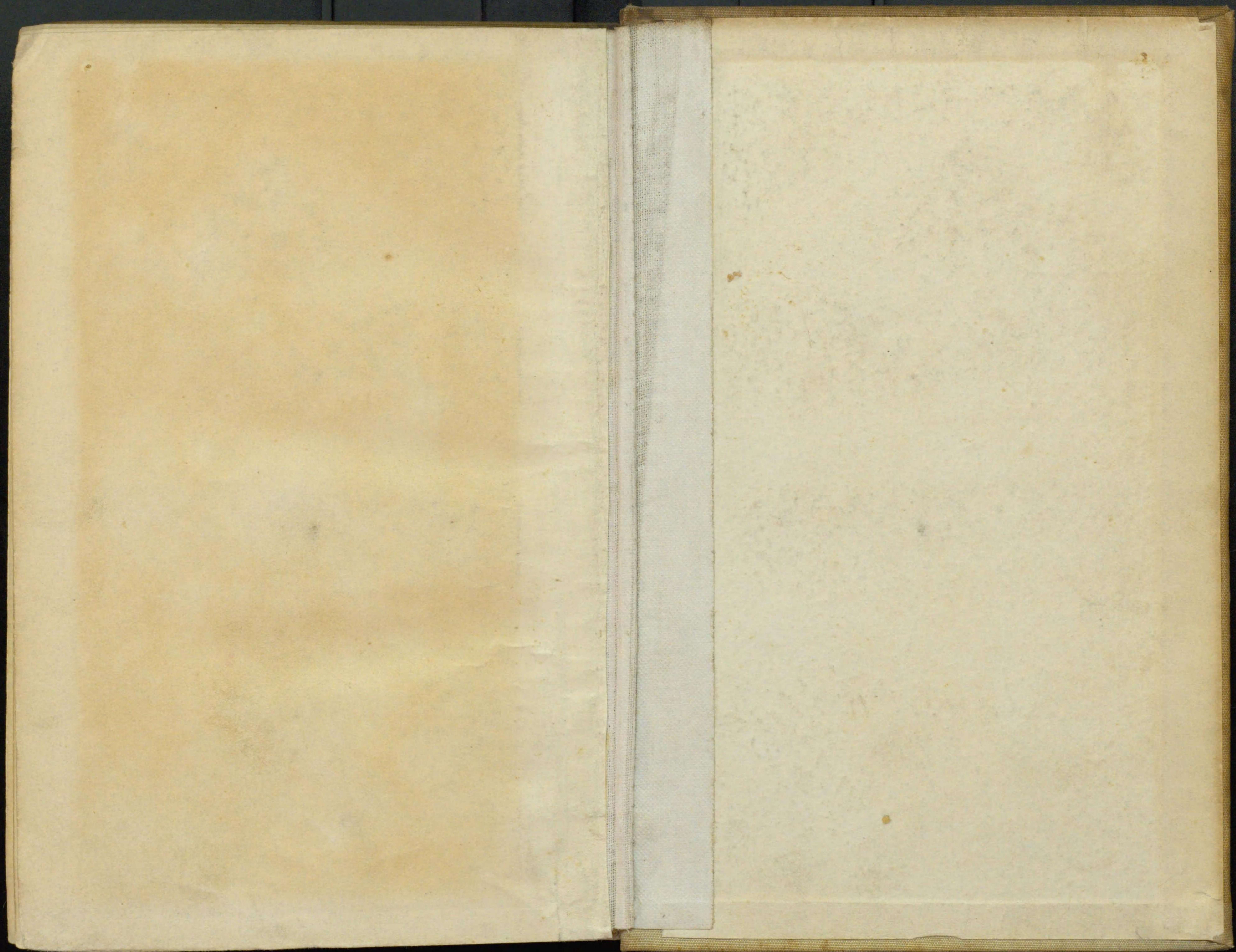
568

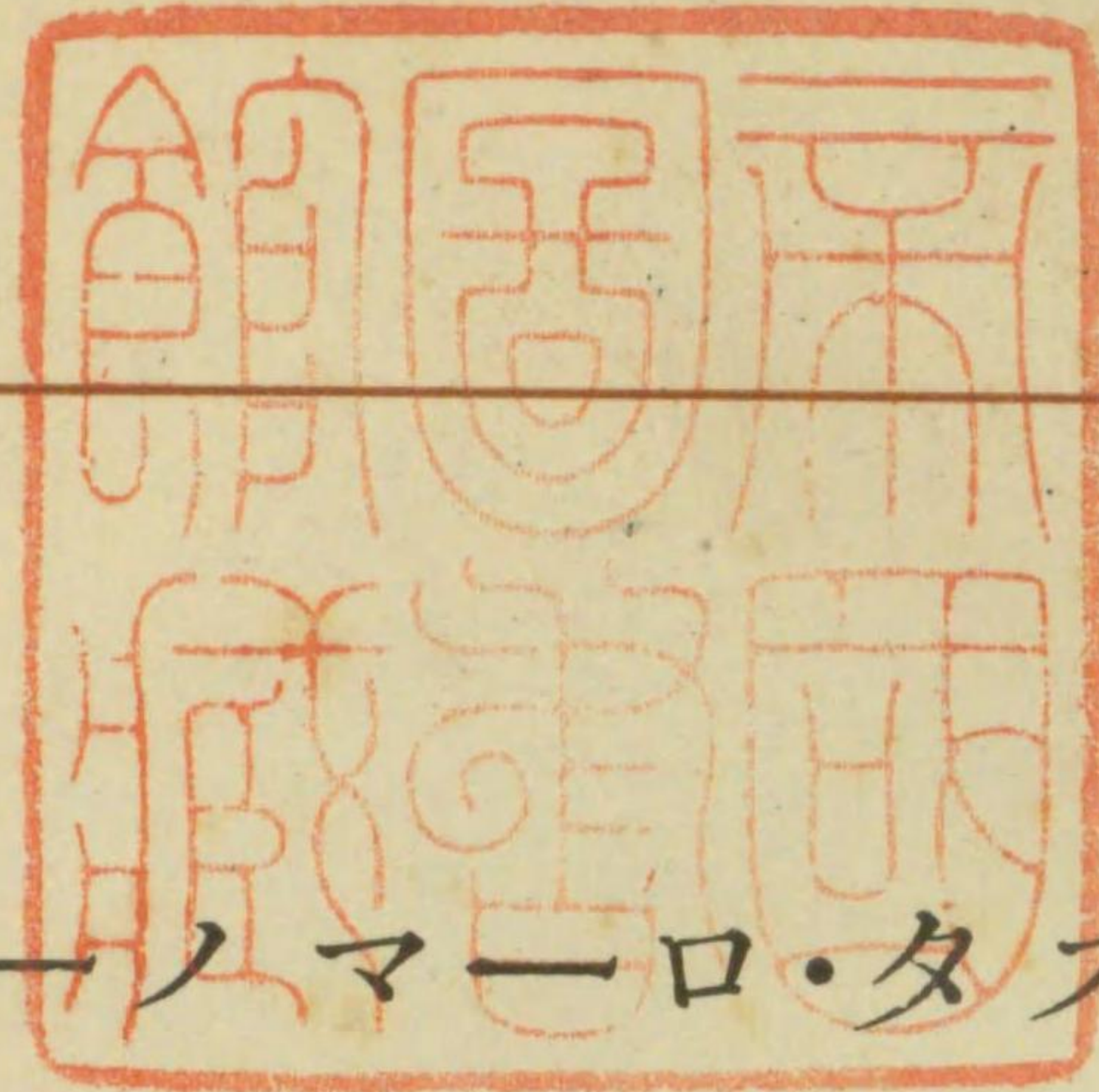
52

568-252



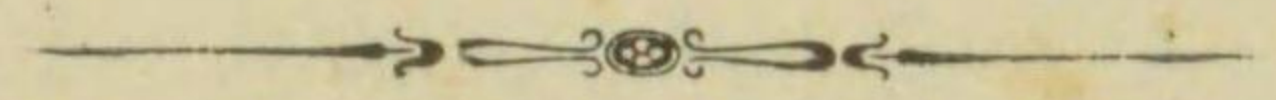
1200501515781





ムラーノマーロ・タスエジ

(語物昔今世中洋西)



文部省督學官  
金子健二譯

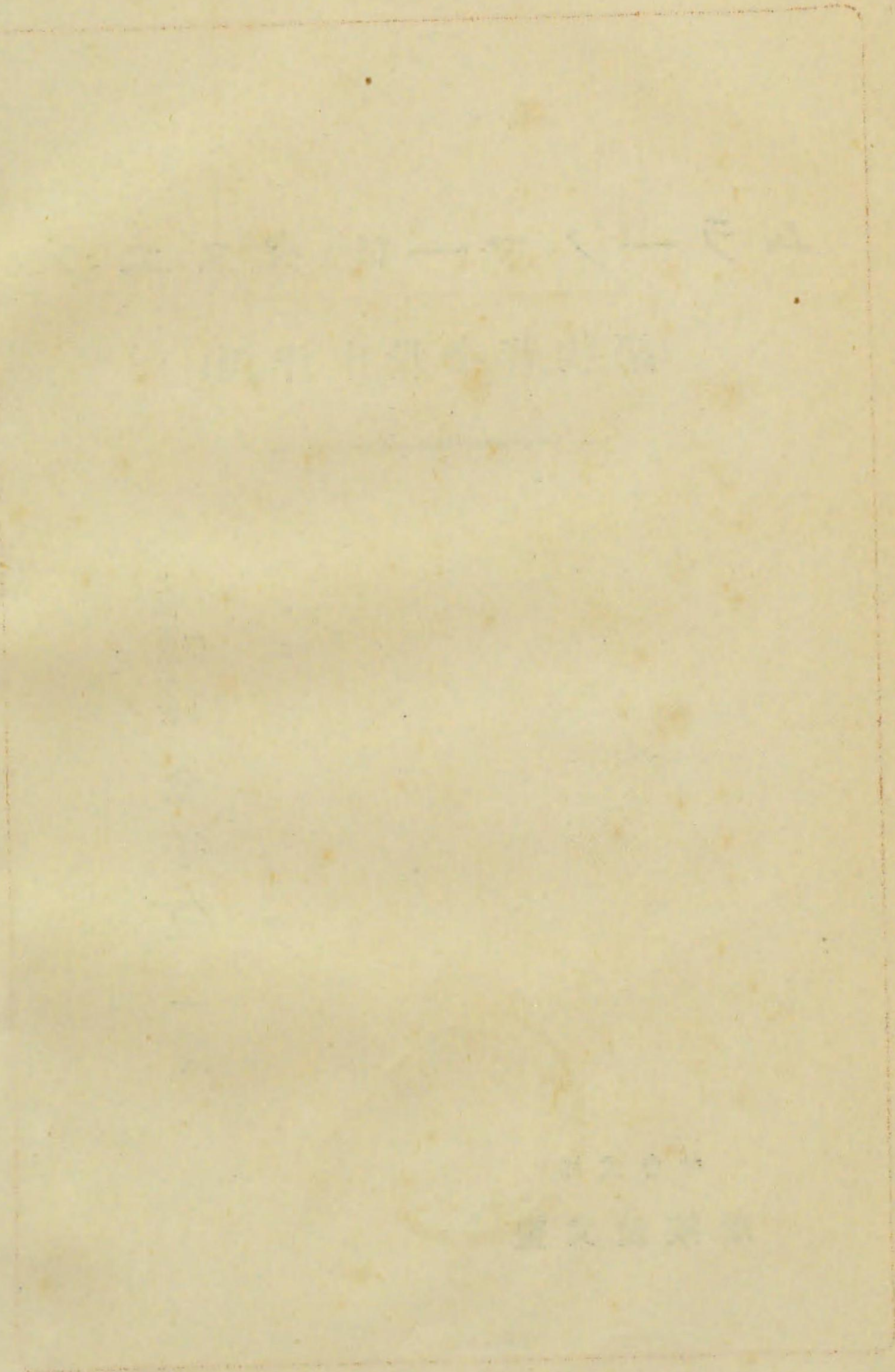


株式會社

實文館藏版



本書出版當時の挿繪一般  
(基督降誕の繪)





本書出版當時の挿繪一般  
(基督降誕の繪)



本書出版當時の英吉利風俗

## はしがき

『イソップ物語』と『アラビヤ夜話』が昔から日本語に翻譯されてゐて、今日では殆ど日本文學のやうに見做されてゐるにも拘らず、それ等にも劣らぬほどの世界的普遍性を有ち、特に西洋に於ける教訓的物語文學の最古の物の一として、その文學的價值と、その甚大な影響力に於て前二者を凌駕したとすらあつたといはれるこの『ジュスタ・ローマノーラム』が、わが國の讀書界に未だ十分なる紹介を得なかつたのは、實に不思議な事柄であつたと思ふ。固より『ジュスタ・ローマノーラム』の書名と、簡單なるその紹介と及びその近代語の概譯とは、既にわが國の多くのその道の學者に依りて試みられたことではあるが、その原文をもと、しての全譯に至りては未だ極めて少ないことは事實である。これは我々が外國文學を理解するといふ點から見て遺憾な事柄であるのみならず、東西文學の比較をなす點から見ても、不利の結果を齎す所以であると思ふ。按ふに『ジュスタ・ローマノーラム』は東洋の傳説をその材料として用ひたものが可成り多いやうであるから、それ等の材料が如何にして外國文學の中に流れこんだかといふ問題をいろいろの方面から討究することは、たゞに興味の多いことであるのみならず、比較研究の上から見て大に有益な仕事の一である。

『ジェスタ・ローマノラム』(Gesta Romanorum)とは拉典名であつて、これを直譯すれば『ローマ人の言行録』とでもいつた意味の名である。ローマ時代の人々の行つた模範的行爲を、後世の人々に教訓的に語つて聞かせようといふ動機から、この書が編まれたものであることが、この書の題名に依りて明示された譯である。しかし、事實は必ずしもローマの人のみの言行録では無い。故に書物の題名とその内容とは全然一致してゐるとは言ひがたいのである。

『ジェスタ・ローマノラム』は中世紀の物語體の文學の部類に入るべきもので、その内容は短篇の物語を雜然と集めてその一つ一つの物語の終りに基督教的解説を加へたものである。中世紀物語は概ね二つの目的をもつて編まれてゐる。

- 一、基督教の僧侶が説教材料として集めしもの、
- 二、僧院の住僧が個人的の讀物に用ひ、又は食堂で一般の信者や弟子等に讀みきかせる爲に作つたもの、

即ち當時の物語文學は概ねかういふ動機から出來あがつたものである。そしてかくの如くにして出來あがつた文學が、後年の平民文學たる所謂物語なるものを生み出した機縁となつたのである。

『ジェスタ・ローマノラム』の編者の名も、亦その初めて編まれた年代も未詳である。今日我等の事柄に關して、最も貴重な研究材料を我々に提供してゐるのは、一八七二年にベルリンで公にされたエステルライ氏(Oesterley)の『ジェスタ・ローマノラム』及びその研究である。英文で譯され、且つ考證的方面の研究が加へられたものとしてはスワン氏(Swan)の『ジェスタ・ローマノラム』がある。(自一八二四年至一九〇六年)この外この書に關する研究は相當に進んで來てゐるが、比較研究の方面ではなほ十分な成績を示してをらぬのは遺憾である。

この物語集は拉典語の斷片的物語を整頓して、これを英語式拉典語に組み立て、出來あがつたものである。現存の寫本だけにても百六十五種の多きに及んでゐて、それが各異つてゐる點が多いので、これだけでも研究上の大きな問題となつてゐる譯である。又この物語は一瀉千里の勢ひで英・佛・獨・和・白等に弘布された結果としてその國々で自由に變改されたり、或は新たに内容を加へられたりした場合が可成り多いのである。特に英獨の場合に於てかゝる事柄が多かつたやうである。これがこの物語集を研究する者にとりて非常な困難を來たす一つの原因となるのである。

『ジェスタ・ローマノラム』の最初の編纂者は何人であつたかといふ問題は、恐らく永久に興味のあつた問題であると共に、それは亦永久の謎であると思ふ。しかし、從來この物語の最初の編纂人をペト



ラス・ベルコリアス (Petrus Berchorius) 即ち Pierre Bercheur (巴里市一三六二年) であつたと唱へる説と、エリマンダス (Elimandus) 即ち Helimandus (Helinand?) といふ説との二つがあるが、しかし、この兩者を二つながら否定してゐる學者もある。但しエリマンダス説はベルコリアス説よりも多少有力なものと認められてゐる。しかし、エリマンダスの國籍と年代に關しては異説多くして今日なほ不詳である。

この物語の最初の編纂國は英吉利であつたに相違ないと思ふ。斷片的の物語を一括してこれを英語式の拉典語で書いたのはこの『ジュスタ・ローマノラム』のそも／＼の起原であつた。その完成の年代は第十三世紀末か或は第十四世紀の初葉であつたと思はれる。そしてこの寫本が直に和・獨・佛等に紹介されてやがて世界的の物となつたのである。しかし、いよく版に付せられて世になつたのは、これより遙に後のことであつた。例へばその印刷物として最も古いのは一四七二年から同一四七五年迄の間に低地國<sup>ネザラント</sup>で出版になつたウトレヒト本である。これは百五十種の物語を集めたもので、その編纂者は低地國人 Ketelaer と De Leempt であつた。次にこれが種本となつて更に一つだけ新しい物語を加へて出版されたのはケルン版である。編者は Arnold Ter Hoernen であつた。次にこの二種の印刷本をもと、して更に新物語を加へて合計百八十一種の大部のものとなしたのは、同じくケル

ン版であつて、その編者は Ulrich Zeller である。以上三種は、『ジュスタ・ローマノラム』の最古の印刷本である。概ね一四七二年から一四七五年迄の間に出版されたものである。この三種が印刷本となつて英吉利國に入るや、これ迄英吉利國に行はれてゐた寫本が、これが爲に壓倒されて仕舞つたのである。即ち逆輸入といふことがこの國で行はれたのである。英吉利國で最初黒文字<sup>ブラック・レターズ</sup>で印刷になつたのは、一五一〇年から一五一五年(?)の間であつた。これは英吉利國に於けるこの物語の最古の印刷本であると共に、それは又最初の國語物語であつた。

英吉利もの、寫本がウトレヒトとケルンで初て印刷になつたことが動機となつて、一四七三年には自耳義國のルーベンで同種の印刷本が公になり、それが一四八〇年に第三版を出だし、同一四八四年から八八年迄の間にダッチ版と號するものを見たのである。これはダッチ語の譯本を出版したものである。一四八九年にはドイツに於てこの物語集の印刷本が現はれ、一五一〇年から一五一五年迄の間に英吉利國で最初の印刷本が現はれた。編者は Wynkynde Worde であつた。

この書載するところの物語數は、各國で出版元の異つてゐるにつれて非常に差がある。例へば拉典語の最古の印刷本は、百五十又は百五十一種の物語を有し、それが久しからずして百八十一種に激増してゐることは既に述べた如くである。然るに一四八九年にドイツのオーグスブルグで出版になつた

物には、僅に九十五種の物語が載せてあるのみで、然かもその中の數種は拉典語の原文に無いものである。この後英吉利其他の國々で出版されたもの、中には百六十七、百八十三、二百十三、といふやうに、いろいろ異つたものが出てくるやうになつた。

『ジュスタ・ローマノーラム』の材料はローマの歴史又は物語書の中から藉りて來たものもあれば、或はプリニーの埃及國旅行記から借用したのものもある。この外新舊聖書、名僧傳等からも材料を取つて來てゐる。特に東洋種のもの多くはペトラス・アルフォンサス (Petrus Alphonsus) の『僧侶の教訓』(De Clericali Disciplina) 或は『佛陀本生譚』(Barlaam et Josaphat) 等から引用したものが多い。

ペトラス・アルフォンサスはスペイン國アラゴンの國王アルフォンサス第一世の教子即ち洗禮子であつて元來は猶太人の子孫である。アルフォンサス第一世は一一〇四年から一一三四年迄アラゴンに王者たりし者であるが故に、ペトラスの前記の著述は恐らく第十二世紀後半のものであつたと思はれる。

ペトラスのこの物語集は東洋的色彩に非常に富んでゐる。蓋しスペイン國在住のアラビア人から直接又は間接に學んだものであると思ふ。アラビア人は第八世紀の初葉にアフリカの北海岸からスペイン國に移住し、その所謂アラビア文化なるものを殆ど全部のスペイン國內の各都市に弘布したのである。特に猶太系統のアラビア族はスペインに於て多くの思想家を生んだ。哲學・文學・美術・鍊金學等に

於て是等の學徒は大に貢獻する所があつた。ペトラス・アルフォンサスの如きもその一人であつた。第九世紀頃シシリー島がアラビア文化の中心地となつたのも、蓋しこれと同一の理由であつたと思ふ。

次に『佛陀本生譚』を見るに、この書は元來、釋迦が生れぬ前の事柄を書いた説話集であつて、輪廻轉生思想即ち三世因果説を説いたものである、錫蘭の現存巴利語の三藏の雜藏には本生經が二十二卷あつて五百五十種の物語が含まれてゐるといふことである。この物語が西洋の文學に混入されるやうになつたのは第八世紀頃であると想像されてゐる。即ちその頃ダマスカスにジョンなる基督教信者が住んでゐて、この物語を基督教弘布の爲に利用する考へから、ギリシア語に書き改めたのである。

ジョンは基督教信者としてその布教事業に關係する以前は回々教主アルマンソールに重用された一人物であつた。ジョンに依りて繙譯され、且つ宣傳された『本生譚』はその後數百年を通じて、歐洲各國の文學に廣く深く浸入したのである。ボッカシヨの『十日物語』(伊太利)、チョーサーの『カンタベリ物語』、ガワラの『コンフェッショ・アマンティス』(英吉利)、シェクスピアの作等は言ふ迄もなく、ロシア語、アイスランド語(一二〇四年頃)、フィリップ語等の譯が既に古い時代に現はれてゐたほどである。故に『ジュスタ・ローマノーラム』の編纂者がこれから材料を獵つたのは決して怪しむに足らぬこと、思ふ。

西洋文學に東洋の材料が多く入つて來た事實は、第四世紀コンスタンティノープル奠都以後に於て最

も著しく認められる。その後十字軍の事變ありてより俄に東洋種が増して來たやうである。アレキサンダー大王傳説、ペルシア大王ダライアスの傳説、シヤレマン大帝の事蹟、ローマ皇帝ダイオニシアスの事蹟等は、何れも是等の東洋傳説と結びついて文學の材料を豊富ならしめた。英吉利中世期の散文學『名僧』傳『マンダギル東洋記』等は東洋傳説を巧みに作中に取り入れたものとして、特にこゝにその名を掲げなくてはならぬ。但し是等の事柄に關しては、今こゝで詳説することは不可能であるが故に、その研究は他日に譲つて、今はたゞその大様だけを述べて置くこととした。

『ジエスタ・ローマノラム』の中に引用されてゐる東洋材料、又は東洋種と想像されうる物語は、既に本書の考證の部で書いて置いた如く、その數約四十有餘の多きに達してゐる。以て如何にこの物語集が東洋的であるかわかると思ふ。

『ジエスタ・ローマノラム』は西洋の今昔物語である。その内容が文學的且つ宗教的教訓に豊富であるばかりでなく、その材料の性質から見て、或は又その行文の平易明快なる點に於て、特に後世の平民文學に大なる感化を及ぼしたる點に於て、この東西兩洋の今昔物語は極めて類似したるものである。

昭和二年晩秋 小石川寓居に於て

譯者 金子健二誌す

目次

一、戀愛……………一  
 二、慈悲……………八  
 三、正しき裁判……………二一  
 四、公平……………三三  
 五、貞節……………四四  
 六、道理に従ふこと……………三三  
 七、善人に對する惡人の妬み……………二六  
 八、嘘偽の申立て……………二九  
 九、柔能く墮落を制す……………三五  
 一〇、眞實の哲學……………四三  
 一一、罪の毒……………四四  
 一二、惡しき手本……………四七

一三、不淨の愛……………五五  
 一四、兩親を尊敬すること……………六二  
 一五、アレキジウス聖者……………六七  
 一六、模範生活……………六三  
 一七、美しい生活……………六四  
 一八、恕すべき罪……………六四  
 一九、驕慢の罪……………六九  
 二〇、苦難と苦悶……………一〇三  
 二一、反逆を防ぎしこと……………一〇八  
 二二、世俗的の心配……………一〇〇  
 二三、心の藥……………一二三  
 二四、惡魔の入れ智慧……………一二三  
 二五、忘恩……………一二五  
 二六、謙遜……………一二七

二七、因果應報……………二一九

二八、老婆の惡むべき奸計……………二二三

二九、判官の墮落……………二二九

三〇、罪と裁判……………二三〇

三一、死の嚴峻……………二三三

三二、格言……………二三五

三三、縊死……………二三八

三四、人生を慎重に思ふこと……………二三八

三五、平和・改善その他……………二四〇

三六、人生路……………二四一

三七、心を天に高めしこと……………二四七

三八、誤を防ぐに必要な用心……………二四八

三九、神と人との仲直り……………二四九

四〇、誘惑と貞節の診断……………二五一

四一、我等の主基督の勝利とその慈悲……………二五三

四二、慈悲の缺乏……………二五五

四三、基督の慈悲にて地獄から救はる……………二五六

四四、嫉妬……………二五八

四五、天國に入るべき善人……………二五九

四六、大罪惡……………二六三

四七、三人の王者……………二六五

四八、罪人の末路……………二六七

四九、惡魔の誘惑……………二六八

五〇、公平な判事の譽……………二七〇

五一、強奪……………二七三

五二、誠實……………二七四

五三、轉任せざる君主……………二七五

五四、天國……………二七六

五五、罪ある者の罪を許す……………二七七

五六、死を忘れぬこと……………二八六

五七、完全な生活……………二九一

五八、告白……………二九七

五九、高慢者の損害……………三〇一

六〇、慾心と機智……………三〇八

六一、反省……………三三三

六二、誠實の美……………三三六

六三、現世の快樂……………三三九

六四、基督の權化……………三三五

六五、魂の治療……………三三七

六六、貞節……………三三九

六七、辯解の餘地なきこと……………三四二

六八、最後まで眞實で……………三四九

六九、貞節……………三五二

七〇、正直者の悔恨……………三五五

七一、永久の報酬……………二五八

七二、恩を知らざる者の破滅……………二六〇

七三、衆人を盲目とする貪慾……………二六四

七四、用心深きこと……………二六七

七五、俗界の心配事……………二七〇

七六、仲直り……………二七三

七七、嫌はれたる富貴……………二七八

七八、愛の永續……………二八〇

七九、勸違……………二八一

八〇、惡魔の奸智、神の祕密の判断……………二八三

八一、宿緣……………二八九

八二、姦淫者に對する裁判……………三二二

- 八三、魂の臆病な番人……………三三三
- 八四、神の賜物……………三三六
- 八五、お祈りの妙音……………三三八
- 八六、罪ある者神の恵みに浴す……………三三一
- 八七、人類救済の爲に死したる基督……………三三三
- 八八、悪魔の奸計……………三三五
- 八九、遺産三分……………三三六
- 九〇、思ふまゝ……………三三八
- 九一、懶惰……………三三〇
- 九二、我等を救はんが爲に死せし基督……………三三三
- 九三、修業より歸りたる二人の兄弟……………三三三
- 九四、汚された魂の清められる道……………三三四
- 九五、天國の遺産を恢復した基督……………三三七
- 九六、現世は赦免と恩典の場所……………三三六

- 九七、死……………三三九
- 九八、機會のある間に神意を和けよ……………三四〇
- 九九、蛇と墓との争ひ……………三四一
- 一〇〇、孝行息子……………三四四
- 一〇一、現世の災厄……………三四六
- 一〇二、姦婦の罪惡悉く靈鏡に映す……………三五〇
- 一〇三、事を行ふ時の注意……………三五八
- 一〇四、報恩……………三六六
- 一〇五、蛇の恩返へし……………三六九
- 一〇六、悪魔の詐欺……………三七三
- 一〇七、無常觀……………三七六
- 一〇八、約束履行……………三八〇
- 一〇九、貪慾者の末路……………三八五
- 一一〇、神の試練……………三九〇

- 一一一、仕事の用心……………四〇九
- 一一二、繼母の病氣は魂の病氣……………四一三
- 一一三、仕合……………四一七
- 一一四、地獄を出でしこと……………四一九
- 一一五、象の心和らぐ……………四二二
- 一一六、神の愛……………四二三
- 一一七、不貞の妻……………四二六
- 一一八、詐欺……………四三三
- 一一九、忘恩……………四三七
- 一二〇、女性の機巧……………四四五
- 一二一、俗界の名譽と奢侈……………四五四
- 一二二、盲目……………四五七
- 一二三、娘に甘き母親……………四五九
- 一二四、婦人は信頼し得べき者に非ず……………四六一

- 一二五、祕密をもらし偽を言ふ女……………四六六
- 一二六、信用することの出來ぬ婦人……………四七〇
- 一二七、公平無私……………四七二
- 一二八、不正義……………四七五
- 一二九、眞實の友情……………四八〇
- 一三〇、智能く暴を制す……………四八四
- 一三一、富貴……………四八六
- 一三二、善者に對する羨望……………四八九
- 一三三、心の交友……………四九〇
- 一三四、罪無くして死せし基督……………四九二
- 一三五、良心……………四九五
- 一三六、盜人の失敗……………四九七
- 一三七、基督の慈悲……………五〇一
- 一三八、親切なるものは利多し……………五〇三

一三九、心の負傷……………五〇四  
 一四〇、公平……………五〇五  
 一四一、有益な助言……………五〇六  
 一四二、悪魔の良……………五二二  
 一四三、不安……………五二四  
 一四四、現世の實狀……………五二八  
 一四五、救世……………五二〇  
 一四六、王者に對する非難の聲……………五二二  
 一四七、罪の有毒性……………五二三  
 一四八、罪の刑罰……………五二四  
 一四九、虚榮……………五二五  
 一五〇、天來の甘露……………五二五  
 一五一、罪深く且癩病にかゝれる心……………五二六  
 一五二、永久の破滅……………五三〇

一五三、現世の苦惱……………五三一  
 一五四、一種の天國……………六二八  
 一五五、悪魔の敗北……………六二九  
 一五六、トロイの滅亡……………六三三  
 一五七、罪人の罰……………六三四  
 一五八、魂の不滅性……………六三六  
 一五九、酒の起原……………六三七  
 一六〇、悪魔の誘引……………六三八  
 一六一、神への感謝……………六三九  
 一六二、呪詛を避くること……………六三一  
 一六三、極端な恐怖……………六三六  
 一六四、邪惡強情……………六四二  
 一六五、同題……………六四四  
 一六六、將棋……………六四六

一八一、姦淫の罪……………七三三  
 〔補遺〕物語四種……………七三三

(以上)

一七〇、忠言を聽くこと……………六五〇  
 一六一、無間地獄……………六五三  
 一六二、世渡りの道……………六五五  
 一六三、後悔……………六五九  
 一六四、友情……………六六〇  
 一六五、終始一貫……………六六九  
 一六六、人生の重荷……………六九〇  
 一六七、忘恩の報……………六九八  
 一六八、世界の奇異……………七〇二  
 一六九、香の高き花と實……………七〇七  
 一七〇、迫害……………七〇八  
 一七一、用意周到……………七一一  
 一七二、貪食と泥酔……………七二四  
 一七三、忠節……………七二八

## ジエスタ・ローマノーラム

### 一、戀 愛

ポンペイといふ王様は賢くて且つ権力のある仁おかたであつた。王様にたつた一人のお姫様があつた。このお姫様は天性非常に美しくあつたので王様は目に入れ度いほど可愛がつてをられた。王様は彼女を五人の軍人に警固させて置かれた。そして凡ての災害から彼女を保護するやうにと是等の軍人に厳命されたのみならず、萬一彼女に禍が起つたならば、彼等を重き罪科に處するといふことをいうてをられた。五人の軍人はこの命令を堅く守つて日夜王女の守護の任にあたつてゐた。彼等は王女の寢室の扉の前に明煌々たる燈火ランソウを吊し、誰でもこの部屋に入らうとすれば容易に目につくやうにして置いた。亦何一つとして手落のないやうにといふ意味からその部屋の入口に一頭の番犬を置いた。この犬は一生懸命に番を勤める奴であつて、怪しい者を見ればけたましく吠えるのである。かういつた警戒振りで何一つとして手落のあらう筈はなかつたのである。然るに不運なことには王女は現世の快樂

を求め、心が強く、これが爲に日夜快々として楽しむところが無いといふ有様であつた。彼女は忙しい人生の舞臺に立つて、そのさまざまの光景を世間の人々と一緒に観察したかつたのである。或日のこと、彼女が戸外を眺めてゐると某の貴族が偶、其處を通過して不純な心をもつて彼女を見た。彼れは彼女の美貌を見、且つこれが有名な王位の後継者であることを知つたので直に戀慕の心を起したのである。そして彼れはさまざまの策略を用ひてその謀叛心を満足させようと試たのである。彼れは彼女の爲に如何なることでもなして満足させてやると約束した。そして結局彼女を説きつけて前記の燈火をひつくりかへし、又彼女を保護してくれた番犬を殺して、夜陰に乗じて二人で駈落して了つた。

併し翌朝直にこの事件が追究せられ、王女の後を追うて使者が派遣された。當時宮廷に武勇絶倫の一勇士があつて、この男にかつては如何なる事件も猶豫なしに正邪曲直が明かにされるといふ有様であつた。彼れは王女がかくも無禮な、又かくも不義理な行爲をその生みの父親に對して犯したその真相を明かにするや、時を移さず武器を手にしてこの駈落者の後を追うたのである。程なく彼れと駈落者との間に格闘が起つた。だが彼れはその誘拐者を倒して直に頸を刎た。王女は宮廷へ護送された。併し彼女は父王の面前に出ることを許されなかつたから前非を後悔して日夜愁嘆にかきくれてゐた。偶、宮廷の一賢者が彼女の後悔してゐる有様を傳聞した。彼れは彼れの勤務の機會ある毎に王様と罪

人の間に立つてこれ迄いろいろと仲裁の勞をとつたことがあつた。さういつた關係から今この出來事を傳へ聞くや王女の爲に甚く同情心を起して彼女の爲に王様の怒を和け、剩へ彼女を權力の有る一貴族に婚約せしめた。彼れはその後さまざまの貴き贈物を彼女に呈した。先づ彼れは踵迄とゞく丈の長い外衣を彼女に贈つた。この外衣は善美をつくした織物で造つたもので、それには次のやうな文字が織りこんであつた。「我は爾を引起した、再び倒れるな、次に王様から拜領したのは黄金の冠であつて、それには「爾の威光は我より來たる」といふ銘が刻んであつた。次に彼女の爲に誘拐者を殺してくれた勇士は「我は爾を愛してゐた、故にその愛に報いよ」といふ句を刻んだところの一つの指環を彼女に呈した。仲裁者も同様に指環を贈つた。それには「私の行つたことは何？ どれだけ？ 何故？」といふ句が刻んであつた。王子も亦指環を贈物とした。それには「爾は高貴の生れなり、自重せよ」と刻んであつた。彼女自身の實弟も同じやうな指環を贈つた。それには「接近せよ、遠慮する必要はない……私は爾の兄弟ではないか」といふ句が刻んであつた。同様に彼女の夫は黄金の印形を彼女に與へた。これは彼れの妻女の遺産を保證するものであつた。印形には「今や爾は我が妻となりし者なり。貞節を守れよ」といふ句が刻んであつた。

懺悔の念に満ちてゐた姫は是等の種々の贈物を感謝の心をもつて受取つた。そして一生涯是等の品



々を大切に保存した。彼女は最初不謹慎な行爲に多くの人々の心を失つてゐたが、今やその愛を恢復することに成功したのである。そして一生を平和に終つた。

〔解説〕

我が可憐なる者よ、この物語中の王者とは我等の上帝のことである。上帝は現世の人々を悪魔の口から救はんがために、彼れの祝福された神子基督をして、代つて苦しみにあたらしめた。聖書の「申命記」第三十二章に「征服に依りて爾を得、爾を造り、又爾を安住せしめた者は、汝の上帝にあらずや」とある。次にたゞ一人の王女とあるは人間の魂を指差したものである。そしてこの王女が五人の軍人に護衛されてゐるといふことは五感の守護を指差したものであつて、洗禮に依りて與へられた力の武器を表してゐる。五感とは視覚・聴覚其他のものであつて、是等の物が人間の魂を、悪魔・塵世・肉體等の汚濁から救ふべき責任があるのである。煌々としてかゝやける燈火とは意志を指差したものである。意志は萬事に於て上帝の支配を受けるものである。善事を行へばその光明が燿々としてかゝやき、罪惡の闇を追ひ拂ふものである。又吠える犬とは人間の良心のことである。良心は過誤を犯すことを防ぐ力である。併し遺憾なことには魂(即ち王女)はこの世界の事物の上へのみ目をそゞぐことを

欲するために、外界に心を奪はれて、神意に背く行爲を冒し、終に貴族、即ち地獄から來た強淫者のために甘んじて誘惑された。かくの如くにして善行の燈火は消され、良心の犬は殺された。そして此の如くにして魂は悪魔の後を追うて罪惡の闇に迷ひ入つた。我等の闘士たる神は是等の事柄を聽くや否や、「我々のために奮闘する者は爾、我等の神以外に何者もなし」といふ諺にもれず、時を移さずこの腹黒き、人を邪道に導く悪魔に挑戦して、これを征服し、終に魂を導いて上帝の宮殿に誘つた。賢明なる仲裁とは基督のことである。聖書の「テモス書」第一篇第二章に「神と人との間に一人の仲裁者あり、基督と呼べる人これなり」とその使徒はいうてゐる。王子とは基督のことである。聖詩作者(デヴィッド)もこれを證明してゐる、曰く「爾は我が子なり、今日我は爾を生めり」と。基督は亦我等の兄弟である。聖書の「創世記」第三十七章に「彼れは我等の兄弟なり」とある。又聖書のホ「ウゼイア」第二章の句によると「我は眞面目に爾と結婚する」とあるから、彼れは我等の配偶者である。又曰く「爾は我が血族の配偶者たるべし」と。彼れの力に依りて我等は我等の上帝の怒を和らけ、平和の世界を恢復したのである。「エフィジアンズ」第二章に「彼れは二者を一體となしたが故に彼れこそは我等のための平和の神なり」とある。前記の贈物を我等に與へた者は彼れである。先づ踝に達する外衣、これは彼れの最も貴重な皮膚である。この外衣は答痕や、血や、打撲傷や、或はさまざまの殘虐の痕をとゞ

めてゐる織物であるが故に、繊弱な織物であると言はれてゐる。この織物に對しては次の事柄以上の如何なるものも意味されてをらぬ、即ち「我は爾の罪を贖つた者であるが故に爾を救ひ上げたことになる。故に再び罪を犯すことなかれ」と。我等の主は申された、「よし、再び罪を犯す勿れ」と。これは「ジョセフ」の胴着である……山羊の血で染めた衣である。「創世記」第三十七章。我等の君主たる基督は我等に光榮の冠を與へられた。この王冠こそは彼が我々の爲に截くことを許されたものである。實際「爾の威光は我より生ず」……その王冠から來るのである。「ジョン」第十九章。「基督は刺の冠を戴いて出でぬ」とある。基督は我等に指環を與へたところの我等の闘士である……彼れの右手の孔こそはその指環である。我等は我等自身で次の句を其所で讀むことが出来る……「我は爾を愛してゐた。故に爾も亦愛せよ」と。「黙示録」第一章。「基督は我等の爲の仲裁者にして我等を愛した。そして我等の罪を彼れの血で洗つてくれた」。彼は我等に他の指環を授けた。この指環は彼れの左手の刺傷である。其所には次の如き句が書いてある。曰く、「我は何をなしたか？ 如何ほどに？ 又何故に？」と。「我は何をしたか？ 我は無一物の身となつて奴僕の姿になつた。「如何ほどに？」。我は神と人とを造つた。「何故に？」。沈淪した者の罪を贖はんが爲に。是等の三種に關しては「ゼカライア」第十三章を見よ。「爾の手の中央にある傷は何であるか。彼れは答へて曰く、我は我を愛した人々の家に於て

この傷を受けたりと」。基督は我等の兄弟である。そして又永遠の王者の子である。彼れは我等に第三番目の指環を授けた……それは彼れの右脚の傷痕の孔である。その意味は「爾は高貴の生れである。自重せよ」といふとに外ならぬ。同様に基督は我等の同父母兄弟である。彼れは我等に第四番目の指環を與へた……左脚の刺傷の孔がそれである。それには「接近せよ、遠慮するには及ばぬ……私は爾の兄弟ではないか」と書いてある。基督は又我等の配偶者である。彼は我等に印形を授けて我等の遺産を保證してくれた。彼れが我等を愛する心からその腹部に受けた槍傷こそは實にこの印形である。この意味は「爾は今慈悲の力に依りて我と結びつきたり、再び罪を犯す勿れ」といふことに外ならぬ。可憐なる者よ、我等はかの「マセウ傳」の中に「主よ、爾は我に五タレントを與へぬ」とあるやうに、我等も亦かく叫び得る爲に、世の中の贈物を保存することを學ばうではないか。かくの如くにして我は疑ひもなく幸福の極致を享樂することになる。上帝、神子及び其他の者に接し得る資格はかくの如くにしてこそ……

〔考 證〕

ポンペイ王とあるはローマのポンペイ大帝のことたるや明かであるが、この作者はこれを混同してゐるやう

である。但しこの種の誤謬はこの作に非常に多しと知るべし。

この物語の後半は著しく教訓的となつてゐる。特に最後の部分は全然教訓本意のものである。これはウォルトンも既に暗示してゐる如く極めて東洋的の文學趣味である。

解説の部分は本書の特色を最も善く發揮してゐるものである。これは當時の物語文學に最も普通の事柄であつて、就中、説教の材料として用ひられた文學にはかういつた種類のくどくどしき解説の加へられるのは寧ろ普通のことである。これも印度やアラビヤやヘルシヤ等の古い物語文學の影響と見られぬこともない。

## 二、慈悲

皇帝タイタスは一つの法律を制定していふには今後若し誰でもその父母の扶養を怠る者があれば、死刑に處せらるべしと宣言した。當時會々二人の兄弟があつた。但しこの二人は父親が一つであつたが母親を異にしてゐる者であつた。彼等の一人は息子を一人有つてゐた。ところがこの息子は彼れの叔父さんが非常に貧乏してゐるのを見たので、直に叔父さんのために何くれとなく生活上の救助を與へ

た。併しこれは法規に一致してゐることではあるが、彼れの父の意志に背いてゐる行爲であつたのだ。そこで彼れの父親は彼れを勘當して仕舞つた。併し彼れは勘當の身になつたにも拘らず依然として彼れの叔父さんは富裕の身分となつた。そして彼れの父親はその反對に貧窮の境遇に陥つた。今やこの孝子は彼れの父親が昔と異つた境涯を見て非常に憐れに思つたので、何不自由の無いやうに父親に生活の資を貢いだ。彼れの叔父さんはこれを見て非常に憤つて彼れを勘當して仕舞つた。そして次のやうなことを申渡した。「最初私が貧乏してゐた時、お前は父親の意志に背いて私を救つてくれた。私はその思に感じてお前を私の息子どころか相續人にすらした。親に對して恩義を忘れるやうな息子は親の遺産を貰ふべき権利は無い筈だ。そのやうな不幸の息子を持つ位なら寧ろ見識らぬ他人を養子にした方がましだ。お前はお前の父親の命に背いて私を扶養してくれたのは、實に生みの親に對する大きな不孝の罪を犯したものである。だから私は私の財産をお前に與へることは出来ぬ」。息子はこれを聽いた後叔父さんに次の如く答へた。「法律の命令し且つ強制してゐることを行つて、それが爲に罰せられる者は一人もありません。子供がその生みの親の貧困してゐるのを見て、これを救助するのは自然の法に一致してゐるものであります。特に生みの親を尊敬するのは當然のことです。故に私は遺産を奪はれるべき理由が一つもなからうと思ひます云々」。

## 〔解説〕

可憐なる者よ、本文中二人の兄弟とあるは神の子と人の子である。兩人ともに上帝から生れた者であることは勿論である。前者は生れた者であるが、後者は創造された者である。この兩者の間には最初から争闘が起つてゐた。そしてその争闘が今日に及んでゐる。故に前者の友は後者の敵となる。『ジームズ篇』第四章に「現世に對して友誼を寄せてゐる者は神に對しては敵となる」とある。基督の子孫は皆基督の信仰を繼いだ者であるが故に結局彼れの獨子である。故に我等は若し上帝の子供たらんことを欲するならば、驕慢・貪慾・及びその外の惡徳を以て現世を飽滿させてはならぬ。又若し我等の願望が神の子たることにその目的を有つてをらぬならば、我等は明かに基督の家族に入ること拒まれ、且つ我等の天國の財産を失ふことになる。若し我々が基督を信じ且つ基督を懐慕するに愛と敬虔の事業をもつてするならば、現世は明かに我等を嫌ふであらう。併し天國の富を放棄するよりも、現世と不和になるのが却つてまさつてゐることである。

## 三、正しき裁判

或帝王は若し如何なる婦人でも姦淫の罪を犯したならば、高い絶壁からまつかささまに突落して殺すといふ命令を發布した。會々一人の女が姦淫の罪を犯したことが明かになつたので、直ちに刑場に送られて高い絶壁から投げられた。併し彼女は下に落ちて多少も害を受けなかつた。そこで彼女は再び裁判の席に引出された。判官は彼女の少しも負傷してをらぬのを見て、もう一度絶壁の所へつれて行つて有效的に處刑しなくてはならぬと宣告した。彼女は判官に對して次の如く申し立てた、「閣下、若し貴殿がそのやうなことをご命令になるならば、それは法令に反したことになります。何故と申してこの法律に依れば同じ罪科に對して二度所罰せよとは書いてありませんでせう。私は姦淫の罪を犯した罪人として既に絶壁から投げ落されたものでありますが、それが不思議にも神様から助けられたのであります。だから私は二度迄もこの所罰を受ける必要はない譯なんです」と。判官は答へた「成程お前の申立てはもつとものことである。それなら許してやるぞ」。かういふ譯でこの婦人の一命は助かつた。

## 〔解説〕

可憐なる者よ、若し誰にてもあれ大罪を犯して基督の配偶者ともいふべき魂其者を冒瀆するならば、其人は高い山、即ち天國から、恰も我等の祖先アダムが落ちたやうに下界に落とされるといふ掟を定めた前記の皇帝は、實は上帝その人を差したものである。併し神はその神子の苦しみに依りて我等の生命を救つてくれた。人間が罪を犯して然かも直ちに神罰を受けぬのは、神の御慈悲が無量無窮であるからである。「我等は神の御慈悲に依りて救はれてゐる」のである。地獄に投げられぬのもこれが爲である。

## 四、公平

シーザーの治世であるが一つの法令が公にせられた。それに依ると若し男子が女子を虐待したり、或は暴行を加へたりしたならば、當局者はその被害者の意見に従つて犯人を死刑に處するか、又は被害者と結婚せしめるか、何れかに決定することになつてゐた。ところが或る日のこと、或男が一夜の

間に二人の婦人に對して暴行を加へた。そこでその中の一人の婦人は彼れに對して死刑を要求し、他の一人は彼れに對して結婚を要求した。暴行者は捕へられて判官の前に引出された。そして二人の婦人の意見に従つて法規上から處分されることになつた。甲の婦人は彼女の權利を主張して、どうしても彼れを死刑に處して貰はなければならぬと言ひ張つた。然るに之の婦人は彼れを夫として迎へることを主張して止まなかつた。彼女は甲の婦人にかう言つた：「貴女は法律上から貴女の權利を御主張になることを許されてゐるのは今更申上げる迄もなく明かなことではありますが、私とても同様にそれを認められてゐる譯です。併し私の要求してゐる條件は貴女の御主張になる事柄よりも遙に軽く、且つもつとも慈悲深いことでもありますから、先づ十中八九迄は私の申すことが裁判官からお許しになること、思ひます」。甲と乙とはお互に一步も譲らなかつた。そしてこの法令の適用を判官に求めたのである。判事は兩者の陳述を聞いた後、乙の婦人に對してこの暴行者をお前の夫として迎へよと宣告した。判決の如く行はれた。

## 〔解説〕

可憐なる者よ、この法令を定めた皇帝は我等の主なる基督である。二人の婦人に暴行を加へた罪人

は、神の二女公平と慈悲を冒瀆した者の謂である。魂が肉體から分離すれば、暴行者は判官の前に引出される。甲の婦人は公平を象徴してゐる者であるが故に、この暴行者に對して永劫の死を要求してゐる。然るにこの婦人は神の慈悲を象徴してゐる者であるが故に、この暴行者に悔恨と懺悔をやらせて一命を助けることを主張してゐる。我等はこの事柄を深く考へてみて神の御意に従ふやうに致し度いものである。

## 五、貞節

或王の臣下が海賊に捕へられて監禁の身となつた。そこで彼れは彼れの父に書面を送つて贖償金を贈るやうにと嘆願した。然るに彼れの父はこれを承知してくれなかつた爲に若者は捕虜となつたまゝ、で便々として月日を送つてゐた。この頃彼れを監禁してゐた海賊に一人の娘があつた。彼女は絶世の美人であつたのみならず、道德堅固の女であつた。當時彼女は二十歳であつた。彼女はこの若者の悲しみを慰めてやうといふ心から屢々彼れを訪づれてゐた。併し若者はこの乙女の慰めの言葉を聴くとが出来ぬほどに心が怏々たる氣分にとざされてゐた。併し彼れはかういふ有様で永い間送つてゐるう

ちに終に、彼女が彼れの爲に心をくだいてゐるを知り、且つ彼れを救はうと思つてゐるとが明かに解つたので、どうか私を救ひ出してくれと言ひ出したのである。それを聽いて彼女は次のやうに答へた。

「それは承知致しました。併しどうすればそのことが首尾よくやれませうか。貴郎の父上……貴郎御自身の父上すら貴郎を贖はうとはなさらぬではありませんか。それであるのに私はどういふ口實で貴郎を贖ふことが出来るにせうか、私は貴郎とは全くの他人でありますのに、又若し私が假りに貴郎を贖ふことが出来るにしても、それが爲に私はどんなに私の父から怒られるか解りません……貴郎の父上すら貴郎の爲に贖償金を拂はうとなさらぬのに……併し私はたゞ一つの條件つきで貴郎をお助け申してもよろしいのですが……」

若者は言つた。

「やさしい御仁よ、何なりと私に申出して下さい。私の力で出来ることさへあれば、何事でも致しますから……」

女は答へた。

「機會が來たら私と結婚するといふことを約束してほしいのです」。

若者は悦んで言つた。

「堅く約束致しますよ。弓矢八幡、誓つて、これを反古に致しません」。

娘は直にこの仕事にとりかゝつた。そして彼女の父の居らぬ時を見計つて首尾よく若者を救ひ出して、二人手に手を取つて若者の本國へ出奔した。兩人が無事にその國へ着くとその父は息子の恙無い顔を見て非常に悦んだ。そして彼れかう訊ねたのである。

「私はお前の歸つてくれたのを見てうれしくてたまらぬ。併しそれにしてもお前のお伴れのこの御婦人はどういふお方です？」

若者は答へた。

「これは王者のお姫様であります。私はこのお方と夫婦の約束を致してをります」。

父はこれに對して、

「これは又とんでもないことだ、お前がそのやうなことをするならば財産は一文も與へられぬぞ結婚などは夢にも……」

若者は叫んだ。

「父上、何んですつて？ 私がこの御婦人から受けた御恩は父上の御恩よりも大きいのです。父上、貴殿は私が私の敵の爲に監禁され、縛められてゐた時に、私がどんなに貴殿あなたに願ひ申しても私を贖つて下さらなかつたではありませんか……残酷にも……。然るにこの御婦人は私を牢獄から救ひ出して下さつたのみならず、死刑の恐怖からすら私を救つて下さつたのであります。だから私はその恩義に感じてこの御婦人と結婚することにしたのです」

父は答へた。

「悴よ、その御婦人を信用しきつてはいけませんぞ、況して結婚などとは思ひもよらぬこと。彼女は彼女の生みの父を欺いて私ひそかにお前の贖償金を取出して、お前を牢獄から救ひ出したのである。だ

から、さういつた性質の女を信用したり、又その信用から終に結婚までするといふことになつたらそれこそ大事件になる譯だ。それになほ私には他の反對の理由もあるのだ。成程彼女がお前を助けたのは事實であるが、それは彼女自身の慾情を満足させ、且つ無理にもお前と結婚しようといふ爲なのである。かういふ譯で彼女が不純な心からお前を助けたのであるから、さういふ女をお前の妻にすることは出来まいと思ふが：：」

彼女はかういふ理由が陳述されるのを聽いて次のやうに答へた。

「貴殿の第一の反對理由、即ち私が私自身の父親を欺いたといふ事柄に對しては、それが事實でないといふことを、で答へして置きます。他人を欺く者は何か財貨を取るか減少する者にかぎります。然るに私の父は金が十分にありますが少しでも財貨を増加する必要がないのです。だから私がこの事柄を深く考へました後このお若い仁をお助け申した譯であります。私の父はこの御仁の贖金を貰つたからというて、それが爲に懷中が更に温になるといふ譯でもなく、それかというてその贖金を貰はぬからというて、それが爲に彼れの懷中が更に冷たくなるといふ譯でもありません。つまり、私がこれを行つたといふことは、その贖金を拂ふことをお拒みになつたところの

貴殿の爲に大に奉仕した結果を生んだ譯で、亦それが爲に私は私の父親に對して如何なる害をも與へたことにはならぬのであります。次に貴殿の最後の反對理由、即ち私がかゝる行爲を敢てしたのは或不純の心からであつたといはれるのは、實に過も甚しいものであります。かゝる不純の感情の起きて來るのは、さういつた劣情を惹き起させるところの人物が、非常に美しい容貌の持主であるとか、或はその人が金満家であるとか、或は身分の貴い人物であるとかいつた場合に限ります。特にそれは健康な容貌の持主を見た場合に限ります。然るに貴殿の息子は是等の資格を一つとして持つてをられぬではありませんか。例へば容貌も美しくありません：：永い間入牢の結果で：：、亦己れ自身の生命を贖ふに足るだけの財産すら持合せてをらなかつたではありませんか。亦その元氣もいろいろの心配の爲に衰へて仕舞つて、如何にも瘦せ衰へて病人らしくなつてゐたではありませんか。さういふ譯で私は同情の念に動かされて彼れを救ふやうになつた次第であります」。

父はこれを聽くや最早やこれ以上に反對することが出来なかつたのである。かくの如くにして彼れの息子はこの乙女と盛大な結婚式をあけるやうになつた。そして一生を幸福に送つた。



## 〔解説〕

可憐なる者よ、海賊に捕虜となつた息子といふたのは人類全體のことを指差したのである。何故といへば人類は我等の最初の父祖の爲に悪魔の牢獄即ちその掌中に誘引されたからである。又この息子の爲に購償金を拂ふことを拒んだといふ父親はこの現世を指差したものである。この世界は人類が悪魔の世界から脱出しようとしてもそれを後援することなく、却つてその人間を奴隷の有様にとゞめようとするものである。次に監禁された子息を訪つたといふ女は神の御意を受けた基督のことである。即ち基督は魂と合一してこの子息を慰めたのである。彼れは人類に同情し、又自らすゝんで地獄に入つて来て我等を悪魔の束縛から解放した。併し上帝は元來非常に富み且つ善良であるが故に、富といふものに對しては、如何なる機會も持つてをらぬのである。故に基督は同情の念に動かされて、天國から降りて来て、我等を訪づれ、且つ我等と全く同様の姿に身をやつし、我等と最も親しき關係を結ぶことをもつて満足したのである。故に「ホウゼリア」第二章に「我は彼女を眞面目に我が許に嫁せしめん」とある。然るに我等の父たるこの世界は、多くの人々がそれに従ふにも拘らず、常にこのことを恨み且つ反對してゐる。「マセウ傳」に「爾若し爾自ら神に合するならば、我が遺産を失ふべし……遺産とは現世の富のことである……そは上帝と黄金の神に同時に奉仕することが難ければなり」とある。「我が爲に父、或は母、或は妻、或は國を棄てる者は百倍したるものを與へられ、且つ永遠の生命を授けらるべし」(「マセウ傳」第十九章、第二十九節)ともある。かくの如き賜物は活神の御子基督の我等に授けんとしてゐるものである、基督こそは父、聖靈と共に永久に生活し、永久に治むる者！アーメン。

## 〔考證〕

この物語の大體の筋は『アラビヤ夜話』の第二百三十六の物語に類例を見出すことが出来る。但し細末の點に於てはこの兩者が必ずしも一致してをらぬのは固よりである。偶然の一致か、それとも『アラビヤ夜話』中に本書の著者が材料を得たのか不明である。文豪シェイクスピアはその傑作『オセロ』の第一幕目の第三場面に於て

「ムーア殿、彼女オスデモナに御油斷あるな、活眼をもつて御注意あれ、  
彼女は彼女の父をすら欺いたではありませんか、してみれば汝をも……」

の如き句の見出されるのは蓋し本物語の精神を取入れたものであらうか。

## 六、道理に従ふこと

或皇帝は或王様の非常に美しい姫と結婚した。この皇帝といふのは權力もあつたが横暴な振舞ひもなかなか少くはなかつた。結婚の式がいよいよ終つて仕舞ふと新夫婦は交々厳格な態度で堅い誓約を立てた。それに依ると夫婦の中の何れか一方が先んじて死亡したならば、後に残つた者は自發的にその後を追うて自殺するといふ約束であつた。このことがあつてから久しからずして皇帝は遠國へ旅行した。そして其所で永らく滞在することになつた。この時彼れはその妃の貞節のほどを試みようと思つたので、使者を以て我が死を報じた。皇妃は夫の死去の報知を耳にするや、直に結婚當時の誓約を思ひ出して、自殺する目的から高い山に登つて絶壁から身を投げた。併し殆んど負傷もしないで助つたのみならず、短日月の間に再び健康體となつた。彼女の父はこのことを知るや彼女が彼女の夫にたてた誓ひを破ることを嚴命した。併し彼女はどうしてもこの誓を守らうとしてゐるので父は次のやうなことを言つた。

「お前がどうしても私の命令することを承知せぬなら、今直ぐにこの宮殿から立退いてくれ」

姫は答へた。

「いや私は決して是所を立退きません。私が是所に踏みとゞまつてゐても差支が無いといふ理由を申上げてみませう。凡そ誓約といふものは一旦これを承諾した以上は、忠實にこれを守るべきものだと思ひますが如何に？ 私は私の夫を先きだて、失つたならば悦んで自殺しますと誓つたのです。だから今この約束を果すことは決して怠慢の罪とはなりません。随て私がそれが爲に父上の宮殿から追放されるべき理由はなからうと考へます。加之、總じて誰れでも褒められるべき行ひをした、めに罰を受けるといふやうな話はありません。神様のお定めになつた掟に依れば、夫婦は一つの肉體であります。故に妻たる者が夫と一緒に死ぬのは當然のことであつて、寧ろそれが褒むべき行爲であります。さういふ譯で印度に一つの法律が設けてありまして、妻たる者は夫の死後、夫に對する悲しみの念と愛着の心を證據だてる爲に、熱火の中に身を投げるか、然らざれば活ながらにして夫の墓に埋められるか、何れか一つを選ぶことになつてをります。かういふ理由の下で私は私の夫を思ふ心から自殺するのは決して悪事でないと思ひます」

父はこの言葉に對して次のやうに答へた。

「お前は約束の爲に束縛されてゐると言つたが、併しさういつた意味の約束は必ずしもこれを守らなくてはならぬといふ理由が無い。何故といへばこの約束に依れば生命を失ふことになるのだから、凡そ誓約といふものは常に道理に合致するものでなくてはならぬ。然るにお前の約束したことは全く道理に合はぬことである。故にさういつた風の約束は何等の力も無いものだ。次に妻たる者がその夫と一緒に死ぬのは褒むべき行爲であるといふ理由は、お前にとりて何等の役目をもしない理由である。その理由を今教へてやらう。即ち夫婦は肉體の愛に依りて一つの體であるとしても、靈魂は二つである。然かもこの意味に於て夫婦は實質的に全然異つた者である。故にお前の言ふやうな理由は一文の價値もないことになる」

姫は是等の言葉を聽いてからもそれ以上に議論を闘はせることが出来なかつた。そして彼女の父の要求するまゝに黙從した。彼女は自殺する氣を抑制した。但しこのことありて後間も無く彼女は夫の存命してゐることを知つたが、併し再び夫の許へも還へらず、亦夫の罪を寛恕するといふこともなかつたのである。

〔解説〕

可憐なる者よ、この物語の中にある皇帝とは惡魔のことである。又王女とは外形が神に似て造られてゐるが、實は罪の爲に促されて惡魔と結婚するやうになつたところの魂そのものである。故にこの兩者の間に罪惡委託の契約が成立してゐる。即ち男の方が若し罪深き死を遂げ、然かもその死が遠方の國、換言すれば地獄で起るならば、その妻たる者、即ち罪を犯してゐるところの魂が高い山、換言すれば天國から地獄へ我れと我が身を投ぐべきものであるといふことが、前以てその男の驕慢な心から認承されるのである。この有様は我等の救世の主がこの世に降臨された前迄明かに實在してゐた事柄である。然るによいよ救世の主が現出されるや、この事を自らの意志によりて健全なものと改められたのである。併しそれにも拘らず、魂は依然として我れと我が身を投げて自殺することをのみ希望するのである……そしてそれは恰も神聖な神の命令に屢々違背して行動すると同様である。併し我等の父であるところの神は我等がかくの如くにして身を投げて自殺することを欲するものではない、神の欲するところは寧ろ我等をして悔恨せしめ、又懺悔せしめた後、我等をしかとその胸に抱き我等と神との結びつきを固くして、常に我等をして神と共に永久の生命を享樂せしめんとするところにある。

## 〔考證〕

この物語は印度起源の貞節物語の一種たるや疑ひなし。本書所載の他の物語にも類例がある。チョーサーの『カンタベリー物語』の中にも貞節物語のいろいろの型があるが、その根本精神に於て大同小異である。是等のことに關しては後段で説明する機会があると思ふ。

## 七、善人に對する悪人の妬み

ダイオクレシャンが皇帝であつた頃貴族の一軍人があつた。この軍人に二人の男の子があつて、二人共に父親から非常に愛されてゐた。然るにその二人の中の弟の方が、父親に秘密で下賤な一娼婦と結婚した。父はこの不名譽な行爲を見て氣も狂はんばかりに悲しんだ。終に彼れは斷乎としてこの子を勘當して仕舞つた。そして彼れの良心の苛責と、やがて來るべき貧苦の責に彼を放棄したのである。かゝる間に次男の家族は増した。そして新たに生れた兒：美しい兒ではあるが病身者であつた爲に次男夫婦の困窮と失望は増すばかりであつた。彼れはこの苦しみに到底耐へることが出来なくなつたので父親に使者を遣して救助を歎願した。父親はこの悲惨な有様を知つて非常に氣の毒に思つたので一切を許すことにして仕舞つた。この仲直りが出來た後次男は娼婦の生んだ兒を父親の保護の下に委ね、且その家に引取つて貰つて父親自身の生みの兒として教育して貰ふこととした。然るにこの顛末を長男が聽いて非常に憤つた。そして父に對つて次のやうなことを言ひ出した。

「父上は狂人だ、私はその狂人であるといふ理由を十分に説明してみませう。一體親たる者が最初その子に對して非常に憤つてをりながら、再びその不孝者を保護するなどは、全く狂人の沙汰でなくて何んでありませう。あの兒の父たる私の弟は、父上の御意に背いて娼婦と結婚した時に父上は非常に御迷惑をお受けになつた譯でせう。然るに父上は今あの兒を保護したり、あの不孝者と仲直りをやらうとなさいませう。これが狂人の沙汰でなくて何でありますか」

父は答へた。

「これこれ、そのやうに怒るなよ、私が次男の罪を許したのは彼れが衷心から前非を悔悟したのと彼れの友人達が熱心に仲裁の勞をとつたからだ。私はこの一度私の掌中から失つた子を再び取戻して、それをお前以上に愛してやるのは、當然の行爲であると思つてゐる。何故ならお前は私を屢々怒らせたにも拘らず未だ嘗て私にお詫を言つたことはない。お前はお前の罪を謙遜な態度をもつて

認めたことは無い。故にお前はお前の弟よりはもつと親不孝である。それにも拘らずお前は弟をこの家から追出さうとしてゐる。寧ろお前は私と次男の仲直りを見て悦ぶべき筈のものではないか、然るにこのやうな不孝の態度を私に見せつけるとは何といふ不心得のことである。私はお前に與へようと思つてゐた財産はお前には遣らぬことにする。お前の弟に全部それを與へる」

そしてこの事がその言葉の如く行はれた。

〔解説〕

可憐なる者よ、この物語中の父とは我等の天國の父を指差するものである。又その二子は天使の性と人間の性を示したものである。人間性を表示してゐるものは娼婦即ち人性と結合した。それは神の命令に違背して禍ひの林檎を食べた時に始つたことである。そしてその罪が天の父から追放された、娼婦の子とは人類のことである。人類は父の保護が無つたならばその邪惡の念で滅亡して仕舞つたのである。故にこれは病的の者として書録されてをる。それは罪の結果として涙の谷に置かれてあるが故である。「創世記」第三章に「爾は爾の額の汗に依りて食を得べし」とある。併し彼れは基督の慈悲に依りて神たる天父に仲直りが出來た。彼れが十分に衣食住の途が定つたのは、僧侶達が全世界の人

人の爲に毎日毎日天に彼等の祈願をさ、けてくれるその厚意と、その熱心なお祈りに依るものである。故にデヴィッドは「彼等は彼等の欲するものを求む」と言うてゐる。然るに他の兄弟即ち惡魔……恩義を知らぬ者の祖……は不斷に我等を攻撃し且我等の仲直りをするのを見て不平を鳴らしてゐる。そして我等は我等の舊惡の報いで我等の天來の遺産を繼承すべき資格が無いことを論じたてゝゐる。併し我は若しこの世界に於て神聖な又清淨な生涯を送るならば、彼れが如何にこのやうなことを言ひたてても效果の無いことは明かである。否、我々は却つて彼れの財産即ち彼れが天國に於て失つたところの位地を獲得するやうになるであらう。

〔考證〕

この物語の部分的材料は聖書『ルーク傳』第十五章中の遊蕩兒說話にその類例を見出すことが出来る。

## 八、嘘偽の申立

皇帝レオの位に即くや美人の容貌を見ることをもつてその唯一の娯樂としてゐた。彼れは美人の像を三つ造つてこれを大きな殿堂に寄進し、朝夕彼れの臣下の全部に命じてその前に禮拜せしめた。第一の美人像は民衆に手を差出してゐる像であつて、その一つの指に黄金の指環がはめてあつて、それには「我が指は寛大なり」といふ銘が刻んであつた。次に第二の像は黄金の髭があつて、その額上には「我に髭あり、髭無き者は我に來れ、我れその者に髭を與へん」と刻んであつた。第三の像は黄金の衣と紫色の羽織を身に纏ひ、その胸部に大きな黄金の文字で「我は何人をも恐るゝことなし」といふ言葉が刻んであつた。そして是等の像は皆石で造つたものであつた。

さていよいよ以上三種の石像が殿堂に祭られるやうになつたので、皇帝は更に命を下して、若し今日以後、この像の指環なり、髭なり、或は衣なり、その何れにても盗み取る者があれば、最もはづき死刑に處せらるべしといふことを天下に知らせた。然るに偶然にも何人とも知れず、私に殿堂に忍びこんで、第一の像の指からその黄金の指環を抜き取り、第二の像から黄金の髭を奪取り、最後に第三の像を襲つてその衣を盗取つて殿堂から逃去つたのである。人々はこの竊盜事件を見出すや時を移さずこれを皇帝に言上した。盗人は直に捕へられて、皇帝の面前に引出された。そして勅令に違背して立像から盗み出したその竊盜罪について糺明された。しかし、盗人は次のやうに答へたのである。

「皇帝よ、願くは一言私に述べさせて下さい。私が殿堂に入つた時、第一の像はその黄金の指環のはまつてゐる指を私のうちに差し向けて、恰もさあこの指環をお取りよというてゐるやうでありました。指環の持主が、このやうにして私にそれを與へんばかりにしてゐたのみならず、私の目に殆どそれと同時に次の文字が映じたのであります：「我が指は寛大なりと」。私はこれを讀んで、それではこの像は私にこの指環を與へるつもりであると考へましたので、その厚意を拒むのは却つて無禮であると思ひ、止む無くその指環を我がものとなりました。それから私は黄金の髭の有る第二の像に近寄りました。私は私に考へました。そして次のやうなことを獨語したのです：「私は善く承知してゐるが、この像の作者はこのやうな髭を有つてをらぬ。製作品は創造主に比較して劣つてゐるのは當然だと」。それで私はこの髭を取去るのは必要なことでもあり、かつは當然の義務でもあると考へました。髭をもぎ取る時にこの美人像は何等の反抗も致しませんでした。しかし、私はこれを取去るのが何となしに好まなかつたのであります。ところが偶然に次の銘を發見しました：「私に髭あり、髭無き者は我に來れ、我れその者に髭を與へんと」。私は陛下の御覽の通り髭の無い者であります。それで私は次の二つの特別の理由にもとづいてその黄金の髭を取去つたのであります。第一の理由はこの美人像がその作者にもつと似通ふやうになつて、黄金の髭を餘りに自

慢せぬやうにならせ度いと、第二の理由は私が是等の方法に依りて私自身の禿頭を保護したいからでありました。次に私は黄金の衣を纏うてゐる第三の美人像に近寄りました。私はその衣を脱がせました。それは冬の寒い日に金屬製の衣を着けてゐるのが如何にも寒さうに見えたからであります。……像そのものが石で造つてありましたから……石は元來冷いものであります。だから石の像が黄金の衣を身につけてゐるならば、それは明らかに寒さに加へる寒さをもつてするものであります。像のためには衛生上悪いことでもあります。若し亦夏になつてこれを身に纏うてゐるならば、餘りに重苦しく且つ暑すぎることもなります。しかし私はたゞこれだけの理由ではこの衣を取去ることが出来なかつたのであります。私にこれを敢てせしめたのはその胸に刻んであつた文字……我は何人をも恐るゝことなし……でありました。私はこの驕慢な態度を見て大に憤慨致しました。そしてそれを打こらして謙遜な態度に導き度いばかりに私はその衣を奪取つたのであります。」

「皇帝は答へた……成程一通りは理由のあるやうにも聞える。しかし、如何なる口實の下でもこの美人像と、その飾物は盜取つたり、或は毀損してはならぬものだと言ふ法律で命令してあることではないか。然るに汝は圖々しくも己が所有物でないものを取去つてゐる。故に汝は時を移さず斷頭臺にかゝるべき者である」云々

皇帝の言葉の如く盜人は直に死刑に處せられた。

〔解説〕

可憐なる者よ、この物語に於て皇帝とあるは我等の救世主基督のことである。三つの美人像とは神の愛したまふ三種類の人間のことである……「爾の樂は人の子にあり」と。若し我々が神を崇め且正しき心をもつて生を送るならば神は常に我等と一緒にゐられるのである。手をひろげてゐる第一の像はこの世の貧しき者と愚直な者とを説明してゐるものである。貧しき者と愚なる者は如何にその身が王侯貴族の大邸宅の廣間に居つても、彼等のために贈物を與へてくれる手が差出されなければ、この機會を利用することを知らぬのである。贈物は判事の目を盲にするものである。しかし、若しかゝる人又はその人の僕に對して「何が故に爾は羊の毛を剪るか……假令貧なりとはいへ……」と問ふならば、次のやうに言葉を返へされる。曰く「自ら好んで提供された物を私が安んじて受取ることが出来ぬのですか。私はその提供された物を受取らぬならば、人々は私を指差して愚者と申します。だから私は

人々の悪口を止めるためにその贈物を受取ります」と。次に第二の美人像は世界の大きな富みの力を説いたものである。テヅィドの言葉に「爾は泥の中から貧しき者を救ひ起してゐる。彼等は彼等の競争者の前にて呪はれてゐる」と。憐れなる者は生れながらにして黄金の髭を有つてゐるものである：黄の髭とは父祖より譲りうけた大きな財産のことである。我等はかくの如き憐れむべき者を直に壓迫する：合法的な理由で、或は又何等の理由無しに。正しき人は壓迫を受け、財寶を掠奪される。掠奪を恣にする者は言ふ：「我勞は禿けてゐる」と。禿けてゐるとは貧しいといふことである。故に彼れはその財寶を我等と共に分つのが當然である。然らざればその財産のために虐殺されることがあるのを忘れてはならぬ。ポール聖者はティモシーに次の如くいはれた：「貪慾は一切の禍根なり」と。最後に第三の黄金衣の美人像は高貴の位にありついた人のことを指差したものである。例へば國法を支持し、道徳を高め、悪事を艾除する重任を帯びさせられた人々：現世の王者又は監督牧師等はそれである。故に悪人は國家の掟てに従ふことを欲せずして、勝手に獨立して、是等の宗教上の高官者に對して謀反を企て、「我等は我等を支配しようとするところの彼れを我等の上に戴くことを欲せず」と放言する。(ルユーク傳)。猶太人は基督が奇蹟を行ひ、且つ猶太人等の行つてゐることは法に背いてゐることであると證明したのを見て、直に彼れを捕へて死刑に處せんとした。しかし、是等の反逆者等、及び彼等に類似してゐる人々は却つて死滅する。故に我等は現世に於て我等の過つてゐる事柄を正すことに一心不亂となり、以つて正しい人間となることを終始心につけてはならぬものである。

〔考 證〕

この物語は小亞細亞傳來の物ではなからうか、英吉利文豪ガラーの傑作『コンフエシヨ・アマンティス』(Gower: Confessio Amantis) (一三八六年頃の作)の中にも同一の話が出てゐるほどである。『シラキユースの暴君ダイオニシアス傳説』(紀元前四〇〇年頃)もこの話に加味されてゐる。教訓的物語として上乘のものである。

九、柔能く墮落を制す

アレキサンダーは名高い、そして又用意周到な皇帝であつた。彼れはシリア王の女を妻とし、二人の間に一人の美しい王子をももうけた。この王子は成長して一人前の男子となるや、父王に對して腹黒き考を抱き、常に機會を狙つて彼れを殺害しようとして企て、ゐた。皇帝はこれを知つて非常に驚いた。



そして皇后に私に語つていふには「妃よ、何事も腹藏無しに語つてくれ、お前は嘗て私を棄て、他の男と契りを結んだことがあるだらう」と。皇后は「これは又何といふお訊ねでありますか、何故そのやうなことをお訊ねになるのでありますか」と問うた。そこで皇帝はその理由を説明していふには「お前の生んだ子が私を殺さうとしてゐる。私にはその理由が分らぬ。若しこの子が私の實際の子であるならば、そのやうな考を起す譯は無いと思ふが」。妃は答へて「神様も御照覽あれ、私は決して決して不義をしたことはありません。彼れは私の眞の子であります。しかし、何が故に貴郎の御生命を奪はうとするのであるか、私にはその理由は推量することも出来ませぬ」。

皇帝はこの點で満足することが出来たので、今度は彼れの王子を呼び出して、非常に温和の態度で次のやうに話しかけた。

「可愛い我が子よ、私はお前の父であるぞ、お前は私の生みの子である。そしてやがては私の後を受けて王位に即くべき身分だ。それであるのにお前は何のために私を殺害しようとするのか。私はお前を愛し、お前のことばかり思つてゐる。私の財産は私の物であるといはんよりは寧ろお前の物である。私からお前にお願ひするが、今日以後はそのやうな道ならぬ企を全く棄て、くれ。そしてお前を生んでやつたこの私に對して、恩を返へすといふつもりで、私の老先き短き命を縮めるや



うなことをしてくれな」

然るに王子は、父王の懇願を馬耳東風と聞き流して、日一日とその墮落してゆく冷酷な心を新にするばかりであつた。彼れは或時は公然と父王を殺害しようとした。又或時は暗殺の手段をとらうしたこともあつた。父王はこのことを知つたので、警戒のために王子を伴つて淋しい別室に行つた。そして刀を抜いて王子の前にこれを置き、「さあ、これを取上げて今こゝで私を殺してくれ、私は私自身の生みの子の手にかゝつて、徐ろに且つ私に殺される方が恥辱が少いと思つてゐる。世間の人々から殺害の場面を見られて大騒動を惹起すことにでもなれば私の恥辱はどんなだらう」……かう彼れは言うたのである。

王子はこの時自己の野心の餘りに非道であつたことを思ひ出して、我れながら後悔の念抑へ難く、その劍を投出して、跪いて泣いた。彼れは言つた、「父上よ、私は父上に對して道ならぬことを致してをりました……公然と然かも誰れ知らぬ者無き大罪を企て、をりました……私は父上の生みの子であると呼ばれる資格はありません。しかし、慕しき父上よ、私の罪を許して下さい。そしてもう一度その失つた愛を私に授けて下さい。今日以後は私は心の底から父上の子となります。そして萬事にか

けて父上の御意に背くことは致しませぬ」

父王はこれを聽いて歡喜の情抑へ難く、王子の頸を抱きしめて接吻した。そして涙を流して「あ、可憐なる我が子よ、どうぞ私を心から愛しててくれ、私はお前に對して親切な父となつてやる……」と言つた。

皇帝はそれより美衣をまとうて饗宴の席に出た。國內の貴族は悉く彼れを迎へた。大きな宴會が其所で催された。この事ありて後暫時彼れは生存してゐた。そして平和にその生を送つた。

〔解説〕

可憐なる者よ、この物語に皇帝とあるは神の御子、我等の主なる基督のことである。又己が父を殺害しようとしてゐる者は基督教徒中の惡人を指差すものである。是等の惡人は洗禮の徳に依りて神の嫡子となつた者である。次にこの王子の母は神聖なる教會を指差したものであつて、我等が洗禮の時に誓言する事柄は、この教會に依りて了承されるのである。亦邪道に踏みこんだ罪人がさまざまの罪惡を犯した爲に神の御意から離れ、父なる基督の死を求むるのも教會の力である……基督が神と同様に父であることは「申命記」第三十二に「彼れは爾の父にあらずや」とある句で證據だてることが出来る。

來る。故に基督教信者は神の掟を破るが如く、基督殺害の企を起すことは決して珍しいことではない。又基督は神殿の奥に退隠して決して俗人に顔を見せぬことにしてをられる。そして其所で拔身の刃に己が御胸を捧げられるのみならず：實際、我等の罪の爲に死なれたのである。故に我等は基督の愛と我等自身の安穩な理由とを考へてみて、基督の大恩報謝の爲に、罪惡に打克ち、基督に誠心をさ、けて奉仕すべきである。この物語に於て父王はその子に殺害の武器を與へてゐるが、神も亦諸君に劍を與へてをられる。劍とは諸君が神の恵みと愛を受入れるか、或はこれを拒むかといふことに對する諸君の自由意志そのものを指差す語である。故に諸君はこの王子の如く行つて、不正邪惡の劍を諸君の掌中から放棄するがよろしい。福音書の中に「子は遠き國に去りぬ」とある。肉體の快樂を愛する罪人は、我等の救世主から離れて遠くの國に放浪の旅をつゞける者である。罪を犯した爲に神と全く似もつかぬ者となると同様に、神との距離も大きくなるものである。生命と思想が悪い行爲に依りて妨げられ、墮落してゆくと共に、彼れの實體は消滅する。故に福音書の中にも「彼れは欲望の念を起した。そしてその國の市民と交つて農園で豚飼となつた」とある。罪惡の爲に徳操が覆へされる時、欲望の心が生じて來る。デヴィッドの言葉に「富める者は缺乏し且飢ゆ」とある。市民と交つたといふことは惡魔の群に入つたことである。その理由は惡魔はこの世界の闇黒の市民であり。且はその

支配者であるからである。使徒の言葉に依れば「我等は肉と血に反抗してゐる者ではない」。豚は汚物を愛するが故に不潔の動物である。故に悪魔を豚に譬へることが出来る。何故といへば悪魔は自身で犯した罪惡の汚物で飽満されてゐるからである。罪惡の常食物は廢殘物である。故に私通、泥酔、貪食は悪魔の食物となる。罪を犯した者は何人からも十分な食物を與へてもらふことも出來ず、亦淫慾の心を常に飽満させることが出來ぬから、止むを得ずしてかくの如き廢殘物をもつてその腹を満たさうとするのである。悪魔は人間に對して食欲飽満の力を拒むことが屢々ある。これは彼れの不義の盃が既に満たされてゐること、又彼れが罪惡の中に死滅してゐることを知つてゐるからである。然るに神は慈悲深くも邪惡の劍を彼れに棄てしめるやうに力を與へて下さる。その時罪人は「あ、神よ、神が我等の罪惡をお正し下さる間は私を憐れんで下さい、私は私の罪過を十分認めてをります」と叫ぶ。萬能の神はこの罪ある者の悲しみを氣の毒と思ひ、恰もその頸を抱いて接吻するばかりの慈悲を垂れたまふのである。そして神は「最も美しき衣を持つて來て彼れに與へよ、彼れの指には指環を、彼れの脚には靴を。又我等父子が食べる爲に肥へた犢を屠れよ。死んでゐた我が子は再び蘇生して來たのだから……彼れは失はれてゐたのが今や再び見出されたから……」と宣ふのである。かくの如く我等の天上の父は、罪ある者が懺悔してその前に恐る々々立つ時に、彼れの頸を抱いて彼れに接吻し、

且多くの言葉をもつて彼れを慰めて下さる。即ち「彼れは唇をつけて私を接吻して下さい」といふことが實際見られるのである。惡人といへども心から後悔するならば、基督はその人に對して愛を捧げて下さるのみならず、美しき衣が彼れに與へられるのである。彼れの指に置かれる指環は善事に示めされる基督自身の封緘である。故に基督の「愛の仕事」に類似した行爲を爲す者はその指環をはめるのである。脚に穿く靴は死したる名僧たちの活きたお手本である。その理由は靴は脚を保護する如く、聖者たちのお手本に魂を安全にするからである。肥へた犢とは十字架の祭壇上で我等の爲に屠たられところの基督その人を指差したことに外ならぬ。肥へたといふ意味は、聖靈で心が飽満したといふことである。故に諸君の心の都市をして、その城壁の上に我等の祝福されたる君主基督の旗を翻へして、この都市こそは基督の最善最勇の兵士に依りて保護されてゐるものであることを證據だてしめよ。「若し我等が神を愛するならば凡ての物は許されん」……即ち若し我等が後悔するならば、我等の過誤は消へ去るべしといふ言葉もある。若し我等が我等と共に、神の愛と恐れとを抱くことを忘れないでゐるならば、我等は永遠の生命を得ること、なるであらう。そして我等は神の無限の御慈悲に浴して、その久遠不滅の生命に誘引されることであらう。

## 〔考證〕

聖書の中に見えてゐる「不孝の子」、「放浪の子」號の話に似通つた點がある。これにアレキサンダーの話を加へたものである。しかし、こゝでいふアレキサンダーは固有名詞といはんよりは寧ろ普通名詞として用ひられたものと見るが適當であらう。それは恰もシーザーといふ名の如く大皇帝の普通名詞となつた場合が多いからである。

## 一〇、眞實の誓約

皇帝ヴェスパシヤンは永年王子が無つたので、賢者達の忠言を容れて美しき乙女と結婚すること、し、遠い國からこの婦人を迎へた。結婚後彼れは彼女を伴つて外國に旅行し、其地で王子を生ませた。かゝる間に彼れは本國を訪づれてみたくなつたので、そのことを妃に相談したところが、彼女は頑固にこれに反對した。そして「若し貴郎が私を棄て、本國に行かれるならば、私は自殺します」とさへ言ひ出した。皇帝はこの迷路に立つて大に煩悶した結果、二つの指環を造り、これに高價な寶石を鑲めて、その上に不可思議な效驗の顯れる像を刻んだ。その一は記憶の像で、他は忘却の像であつた。二つの像は各の指環の頂上に置かれた、皇帝は忘却の像の刻んである物を妃に與へ、記憶の像の刻んであるのを我が物となした。彼等兩人の愛情そのものが指環の效驗と一致したのである。即ち妻は直に彼女の夫を忘れ、夫は彼れの妻のことを忘れたのである。彼れは彼れの自的が達せられたのを見て満足して彼れ自身の本國に出發した。そして其後決して王妃の許に還へらなかつた。かくの如くにして彼れは平和に一生を送つた。

## 〔解説〕

可憐なる者よ、この物語に書いてある皇帝は人間の魂を指差したものであることを知らなくてはならぬ。人間の魂はそれ自身の本國、即ち天國に戻るべき筈のものである。この道を踏んでこそ初めて人間の魂は安全にその行くべき所に到達することが出来るものである。故に讚美歌作者「デヴィッド」は「神よ、我を救濟せよ」と言うてゐる。次に皇帝の妃とは、我等人類の肉體を指差したものである。我等の肉體は我等の精靈を肉慾の快樂で捕へて仕舞ふのみならず、精靈の領土にして且希望の標的であるところの久遠の生命の通路をすら塞いで仕舞ふものである。然らば何が故にかくの如き邪魔だてをなすのであるか。それは肉が魂に反抗し、魂が肉に對して反抗するからである。故に諸君はこの皇

帝の行つたことを學んで、二つの指環を造るべきである。即ち一は記憶の指環、他は忘却の指環である。前者は祈念、後者は斷食、二者ともに有效的の物である。大概の國では婦人の指環はその婦人が既婚者であることを示してゐる。男子が祈念と斷食に没頭するやうになれば、それはその男子が基督の花嫁であることを證據だて、ゐるものである。祈念は記憶の指導である。それは使徒が我等に命じて「不斷に祈念せよ」と宣うたからである。故に人類は神をして我が願望のほどを追憶せしめんが爲に、周紀的に祈念を活用する。然るに天使自身は、恰も我々が「トービット篇」で讀んでゐる如く、哀願を呈出し且その願ひを後援してゐる。斷食は忘却の指環とも稱し得る。その理由は斷食をすれば肉體の誘惑から免れ、且つその害を忘れ、神に接近するに如何なる妨碍物もなきことを知つてゐるからである。故に我等は是等の指環を保存し、永遠の生命に價値あらしむることを學び度いものである。

## 一一、罪の毒

アレキサンダーは權力の大きな、しかし、アリストートルについて禮儀の道を一通り教へられた王者であつた。北方の國の皇后はアレキサンダーの令名の高いのを傳へ聞いて、彼女の娘をその搖籃時代から、或種の劇毒で養育した。彼女の娘が成長するや餘りに美しくなつて、それがために何人でも彼女を一見したが最後で、忽にして狂人となつて仕舞ふとさへ噂されてゐた。皇后はこの美しい姫をアレキサンダーに嫁せしめようとした。アレキサンダーは彼女を見るや否や蕩然として仕舞つた。そして非常な執心で彼女を我物にしようとした。しかし、アリストートルは王の弱き心を知つて次のやうに忠告したのである。

「王よ、彼女に決して接してはいけません。萬一少しでも彼女に觸れるなら生命が危いです。彼女は幼い時から非常に怖い毒の食物で養はれて來てをります。私はそれを直に證據だて、御覽に入れます。只今は所に既に死刑の宣告まで與へられた罪人がをります。私は今この罪人を彼女に接觸させてみます。接觸させた結果が私の申した如くなりますからそれを御覽下さい。」

そこでその罪人が時を移さず王女の傍につれて來られた。彼れが彼女の唇に觸れるや否や、その全身は毒をもつて漲つた。そして彼れは非常に苦んだ後終に死んで仕舞つた。アレキサンダーはこのやうな怖い死から免れたのを悦んで、彼れの恩師に心からの御禮をつくした。そしてこの美しき姫を

彼女の母の許に戻した。

〔解説〕

可憐なる者よ、洗禮の時に道德を強く吹きこまれた善良な基督教信者は、悉くアレキサンダーと呼ぶことが出来るのである。彼れは悪魔、俗世間、肉慾等の誘惑を免れて、その本然の純潔さを支持してゐる限りは、強く且有力な者である。次に北方の國の皇后とあるのは現在世の物質に餘りに富んでゐるもの、謂である。かゝる富は精神を殺し、亦一般に肉體をも破滅するものである。次に毒を宿してゐる美姫とあるは、奢侈と暴食の謂である。かくの如きものは食物の美味なもので人間を養つてくれるが、實はその食物が却つて魂を毒することになるのである。次にアリストールとあるは人間の良心即ち理性を指差したものである。理性は魂を墮落させるやうな結婚に對して非難もすれば反對もする。次に罪人とある神に背き、彼れ自身の肉慾の快樂に耽つて神の掟を破らんとする頑迷な人を指差したものである。そしてこの罪人は彼れの罪惡を強き抱擁の中に取り入れて、その恐るべき接觸の祟りを受けて精神的に死んで仕舞つたのである。故に「知惠の書」に「瀝青ちやんに觸れる者は瀝青ちやんで汚される」とある。我等は永遠の生命を得るために先づ我等の生活を正直に且正しくすることを學ばなくてはならぬ。

〔考證〕

この物語の骨子は東洋傳説をもとにしたものである。アリストールの、Secretum Secretorum、第二十八章にこの物語が見えてゐる。それに依ると印度の皇后がアレキサンダー大王の權勢を怖れ、如何にしてもその壓迫から免れんと企てた結果、大王を欺くに如くはなしと考へて、多くの高價な贈物を大王の許に捧げたのみならず、大王に對して二心無きことを證據立てる手段として、美人の噂高き姫を大王に遣したのである。姫は幼時より蛇を食物として養はれて來た關係上、蛇の性質を受けてゐた。故にこの姫の性質を利用して大王を欺かうと企てたと傳へられてゐる。プリニーも毒を食物としてゐる人種のあることを書いてゐる。何れも東洋から傳來した話であると思ふ。

一一、悪しき手本

47  
オトー帝の治下に一人ののらくら僧侶があつた。彼れの寺領区内の人々はこれが爲に多くの迷惑を受け、頗る感情を害してゐた。特にその中の一人の如きはこの僧侶が聖餐會の式を擧げる時には必ず

參會することを中止してゐた。さて、聖餐會期間の或お祭り日のことであるが、この男は例の如く式に缺席して牧場をたゞ一人歩いてゐると、俄に咽が渴いてきて、泅もこのまゝでは死ぬより外が無いといふ有様であつた。かういふ窮地に陥つて、それでも辛うじて歩いてゐると偶然に清浄な水の流れてゐる小川を見出した。彼れは腹一つばい飲んだ。しかし、不思議なことにはその水を呑めば呑むほど渴が猛烈にやつて來た。彼れはこんな不思議なこともあるものかなと獨り呆れてゐた。彼れは獨語した。

「この小川の水源を見出して其所で私の渴を満さう」

かういうて歩いてゆくと途中で威儀堂々たる一人の老人に會つた。老人は彼れに訊ねた。

「貴殿はこれから何處へ？」

渴してゐる男は答へた。

「私は自分ながら不思議なほど咽が渴いて閉口してゐる者であります。只今小さな流れを見出しましたので腹一つばい呑んでみましたが、どういふものか、呑めば呑むほど咽が渴いてきました。それで、私は今度はこの川の源をさぐつて、其所で思ふまゝに呑んで、この渴の苦痛から何とかして免れようと力めてゐるところであります」

老人は指を上げて示めしながら次のやうなことを言つた。

「其所にその川の水源があるよ、しかし、それはそれと致して、私のお訊ね致し度いのは、何故貴公はお寺へ來らぬのですか、他の信者達と一緒にお寺へ參つて聖餐會のお説教を聽くべき筋だと思ふが……」

彼れは答へた。

「實は御老人、私達の僧侶は泅も聖餐會の式を擧げる資格の無い男です。それはそれは實にお話にならぬやうなだらしの無い生活をしてゐる人間であります。あのやうな人物がどうして神様の御心を慰めることが出來ませうぞ」

老人は答へた。

「先づ貴公のお言葉が正しいものとしてお聽き致して置かう。時にこの泉を御覽じろ。これは素



晴しく善い水を吐き出してゐる泉です。貴公が今しがた呑んだのはこの水だよ」

彼れは老人の指差した方を見た。驚いたことには其所に一頭の犬の腐敗つた死骸が横つてゐた。そしてその犬は口を大きく開け、黒いそしてぼろぼろになつた齒をむき出してゐた。泉のどんどん湧き出て来るのはこの犬の口からであつた。彼れはこの流れを見て非常に怖れを抱いたが、しかし渴を醫するため非常に呑み度くもあつたので大に煩悶した、それにしてもこのやうな悪臭を放つてゐる汚い犬の死骸から出て来る水を……今日の前でその實況を見せつけられてゐて……呑んだなら必ず體に善くならうと考へたのである。

老人は彼れの厭惡の有様を見てとつて次の如く言つた。

「何も怖れることは無からう。貴公は既にこの小川の水を呑んだではないか。もう一度呑んだからというて貴公の體に毒になるといふこともなからう」

彼れはこの保證に勵まれ、かつは猛烈に渴がやつて來たので、止を得ずもう一度小川の水を呑んだ。直に渴が消えて仕舞つた。

彼れは叫んだ。

「御老人、かういふ美味い水は到底人間の呑めるものではありません」

老人は答へた。

さてそこだよ、この水は犬の腐つた死骸の口から流れて來たものではあるが、決して汚れた水でもなく亦水の本來の味も色も失はれてゐるものでもない。それと同様に如何に人格のつまらぬ僧侶が聖餐式を擧げたからといつて、それが爲にお説教が汚されるといふ理由は無い譯だ。だから貴公は僧侶の惡徳に對して不快な感を抱いても、それが爲に大切なお勤めを怠る譯には參らぬ。僧侶といふ者はこのお勤を果す爲の道具に過ぎぬのだよ」

かう言つたかと思ふと老人の姿はかき消すやうに失せて仕舞つた。

彼れは目撃したまゝの事柄を彼れの隣人達に話してきかせた。そして彼れは其後必ず聖餐の式に列席した。彼れはこの不安定の假りの世を美しく送つた。そしてこの迷ひの多い世界から、迷ひの無

き世界へと移つた。マリアの御子たる我等の主基督は凡ての人類にこれをお許しになるのである。

〔解説〕

可憐なる者よ、この物語に出てゐる皇帝とは神のことである。神の王國即ち現世には惡徳の僧侶が住んでゐる。惡僧とは邪惡の基督教信者のことに外ならぬ。僧侶が己が寺領區域の信者の爲に心の幸福を祈念してゐると同様に、基督教信者は己が洗禮の時に授けられたところの精神的贈物を大切にし且これを保存する責任がある。邪惡な僧は惡い範を示して多くの人々を宗團の中から誘惑し去るのである。故にグレゴリー聖書は「彼れは惡い行を爲すが如く精靈を失ふこと多し」と言つたのは、極めて正しいことである。惡い基督教信者はこれと同様に邪惡な行と、誘惑的な言葉によりて人々を墮落に導くものである。私から今この話を聽いてゐる諸君の中の誰れでもが、このやうにして誘惑されたならば、この物語の中にあつた信者のやうに行ふがよい。即ち諸君が基督の化身であるところの老人：それは慈悲と恩惠のこもつた行爲で直に基督であることが明かになるが：を知つて、これを心の奥底から尊敬し、且愛慕するやうになる迄、牧場換言すればこの現世を横切つて歩くべきである。しかし、先づ第一に小川の水を呑まなくてはならぬ：假令、その水が諸君の渴を直に消すことが無

いにしても。小川とは洗禮のことである。洗禮の小川のみが罪の源に依りて生じて來る渴を消すことが出来るのである。しかし、その場合に於てなほその古い罪が強い力をもつてゐて、それが爲に諸君が再び過を犯すことがあるならば、その流れの源を尋ね出して、其所へ出掛けて行つて水を呑まなくてはならぬ。何故といへばその泉こそは、我等の主なる基督であつて、基督自身が既に「我は永遠の生命となつて流るゝ流水の源なり」と明言してをられるからである。(ジョン傳第四)。その泉の流れは聖書の言葉であつて、これは犬の腐つた死骸の口から出て來ることが非常に多いのである。腐つた犬とは惡徳の僧侶のことである。然らば何が故に清淨な水の泉が他の動物の口から流れ出ることがなくして、却つて犬の汚い口から出て來るかと問はんに、これは聖書が僧侶を譬へるに、犬をもつてする場合が非常に多い事實を以て答へ得るのである、例へば次の句に犬の四つの美點が掲げてある。曰く、

「犬には四つの長所がある。舌が藥となり、鼻が物の區別を明かにし、その上に忠義の心が固く、用心深きことこの上なし」

故に苟も己が職責を有效的に果さうと思ふ僧侶は、是等の四つの性質を一生懸命に修養するのが當

然である。先づ第一に僧侶の舌は病める心を治療することにかけては、醫師の力をもつてゐる。且つそれは罪惡の傷を探り、然かも又、これと同時に、餘り亂暴な治療をやりすぎて、その病氣なり負傷なりを直すよりは寧ろ悪くするやうなことが無いことを力めてゐる。蓋し肉體の負傷を舐めるのは犬の性質である。次に第二に、犬は鼻が鋭敏であつて、狐と野兎をその臭で區別して仕舞ふものであるが、それと同様に僧侶は聽覺で物事を認識することが迅速であるが故に、音を聽いて何れが狐の奸智、即ち邪道的又詭辯的部分であるかを發見し、又何れが神の御許しに對する絶望と、或は又惡に對する憎惡の念から生じ來る内心のものがき、乃至、戰慄的畏懼の念であるかを發見し、又何れが狼と獅子の無慈悲なる兇惡性……一切の結果を敖然と無視する心より生ずるもの……であるかを發見する筈である……同様の性質をいろいろに變じてみて……第三に犬は凡ての動物の中で主人と家族を護るに最も忠實な動物である。それと同様に僧侶も亦宗教の爲に終始信仰の強いところを見せて、永久の救濟事業に没頭すべきものである……たゞに己が寺領地内の信者のみの爲ならず、所謂我等の主なる基督の言葉を奉じて、眞の基督教徒の一切の人々に對しても、そのやうでなければならぬ「ジョン傳」第十に「善良なる牧人は彼れの羊の爲に彼れの生命を賭す」とある。又同様に「ジョン傳」第一に「基督は我等の爲に彼れの生命を賭し給へぬ」とある。故に我等は我等の神聖なる主を心から學んで、我等の同胞の爲に我等の生命をさ、ぐべきものである。第四に犬は盜人の近寄つて來るのを吠えて知らせるものであるが……そして又主人の財産を盜人の爲に奪はれぬやうに警戒してくれるものであるが、それと同様に忠實な僧侶は偉大なる王者の番犬である。かくの如き僧侶にして初めてその天職を忠實に奉じて、惡魔の奸計を實行せしめず、又貴き基督の血が造くられた高き寶庫の中から靈を奪へ出さんとする惡魔を妨ぐことが出来るのである。そしてこの寶庫には驚くべき我等の贖罪の代價のみが永劫に置かれるのである。

### 一三、不淨の愛

或皇帝は美しい皇后に深く愛着してゐた。結婚の一年目に皇后は王子を生んだ。そして非常にこの兒を愛してゐた。然るに王子三歳の折に皇帝は崩じた。國民は悉くその死を悲しんだ。特に皇后の悲しみは實に甚しかつた。彼女は彼れの遺骸を皇室の廟に葬つた後、その王子を伴つて國內の他の部分に居を移した。皇后は王子を愛すること殆ど極端に走るほどであつて、如何なることがあつても彼れ

を手放すことをしなかつた。剩へ彼女は王子が十八歳の少年に達した時迄も、絶えず彼れを傍に置いて、夜分は同じ臥床で眠るといふ有様であつた。悪魔はこの不自然な母の愛情と、又王子の孝子としての報恩的行動を見て、親子の心に道ならぬ、又自然の理に背いた考へを吹き込んだ。そして不斷にこの厭ふべき誘惑を繰返へした後、終に母と子の良心を覆へして仕舞つた。皇后は妊娠した。王子は非常に怖れを抱いた。そして良心の苦痛に耐へきれずして終に國內を逃げ出して、その踪跡を晦して仕舞つた。皇后は時満ちて可愛い女兒を生んだ。しかし、彼女はこの生れたばかりの女兒の顔を見るや、自分の犯した恐しい罪惡を思ひ出して自暴自棄の心を起し、且罪惡の發覺することを恐れた結果、彼女の傍に横つてをつた短刀を取上げ、これを赤兒の胸に刺し通したのである……(惡事は一つだけで無事に終るものだと夢想する者は、このことを能く考へてみなくてはならぬ)。皇后は母としてかく迄無慈悲な罪惡を犯したのであるが、これだけでは満足が出来なくなつて、更にその短刀をもつて赤兒の咽を貫いた。鮮血は咽笛から泉の如く迸つた。そしてそれが彼女の左手の掌に滴つて四つの圓い形をくつきりと後に残したのである。これは如何なる人間の力をもつてしても到底消し去ることの出来ぬものであつた。皇后は彼女の罪の不可思議な痕跡を見て恐怖の念を抱くことが、罪そのものを見て恐れる心にも劣らぬほどであつた。そこで彼女はこの掌上の恐しい且不思議な血痕を隠すために非常に苦心したのみならず、聖母マリアのために一生を捧げることにした。しかし、彼女は假令その犯した罪に對して後悔したにせよ、又十五日目毎に必ず懺悔をしたにしても、この戦慄すべき罪惡に對しては、如何なる告白もなさなかつたのである。否、彼女はこれを用意深く隠してゐたのである。彼女は極めて寛大な施物を寄進した。だから人々は彼女の親切と仁恵とに浴して、その最善の敬意と愛情とを彼女に捧げた。

或夜のことであるが、彼女の懺悔聽聞僧は跪いて例の如くそのお祈禱の時に、「聖マリア、御降臨！」と、五回までも聲高らかに繰返へしてゐたが、その時偶然にも聖母マリアは彼れに現れて來た。そして「我はマリアである、今爾に告ぐべき大切のことありて來りたりと」宣うた。僧は悦びの心に溢れて答へた……

「お、マリア姫、姫の僕たる拙僧が、如何にせばその御心にそうことが出来得ませうか」

マリアは答へた。

「この國の皇后は爾に懺悔するが、しかし、彼女が恥辱と恐怖の念に動かされて、到底告白することを敢しない一つの大きな罪がある。明朝彼女は爾の許に來るから、その折、爾は私からの言葉で

あるというてかう傳へてくれ……それは彼女の施物と彼女の祈禱は、かの悔ひ悲しめる者の清き供物を喜ばる、神によりて納受されてゐるといふこと、又私がさういつた譯から、彼女が彼女の部屋の中で私に犯した罪惡……彼女が彼女の生みの女を殺害したその怖い罪を懺悔するやうにと命令してゐるといふこと……私は彼女の爲に今迄懇願してゐた者である。だから、彼女さへそれを懺悔するならば、彼女の罪は悉く許されるのである。しかし、彼女は爾の言葉に對して少しも注意せぬならば、その左手の掩物を取去らせるがよい。さうすれば爾は彼女の掌上に罪惡の名残を讀むことが出来るであらう……この罪惡こそは彼女が告白することを拒んでゐたものであるのだ。若し彼女はこれを拒んだならば腕力に訴へてもその掩物を取去るがよい」

「マリアはかく言つた後その姿を隠して仕舞つた。」

翌朝皇后は極めて謙遜な様子で、彼女の犯した一切の罪を懺悔した。しかしたゞ一つだけ懺悔を敢しなかつたものがあつた。懺悔聽聞僧は彼女に思ふまゝ、に言はせた後で、改めてかう言ひ出した。

「御夫人、又親愛なる娘よ、世間の人々は皆物數寄であつて、貴女が何が故にその左手に掩物を常につけてをられるのであるか、訊ねたがつてをります。何卒、私にその下に隠されてゐるものを見

せて下さい。それが果して神様の御心にさうものであるかどうかを調べてみませう」

皇后は答へた……

「手に病氣がありますから、貴僧にお目にかけることは出来ぬのです」

僧はこれを聽くや否や彼女の手を捉へた。そして彼女の抵抗するのも意とせず、終にその掩物を取去つて仕舞つた。

彼れは言つた……

「御心配は御無用です、聖母マリアは辱くも貴女を愛してをられます。このやうなことを私に命じてさせられたのも實はマリア姫であります」

59

皇后の手から掩物が取去られて仕舞ふと、そこには血に染つた四つの環が現れた。第一の環はCの形をした四つの文字であつた。第二はDの四つの文字、第三はMの四つの文字、第四はRの四つの文字であつた。血で書いてある文字はその四つの環の外縁そとべりの上に、恰も印銘の如く明かに現はれてゐる

た。そしてその下に銘が記してあつた。

先づ第一のCの文字は次の如く解釋された。

‘*Osu cecidisti carne caecata*’ (爾は肉體の爲に盲目となりて墮落せしもの)

次に第二のDの文字は、

‘*Daemoni dedisti dona donata*’ (爾は贈物を得たさに惡魔に爾自身を與へしもの)

第三のMの文字は、

‘*Monstrat manifeste manus maculata*’ (爾の手の上の汚點は爾をあばいてゐる)

第四のRの文字は、

‘*Recedet rubigo*’ ‘*regina rogoat*’ (皇后が訊ねらるゝならば彼女の恥辱は消滅す)

彼女はこの文字を見てその意味が漸く理解されたので、僧の膝下に泣き伏した。そしてさめざめと泣いて、徐ろにその犯した大罪を物語つた。彼女は今や心から後悔して仕舞つたので、その罪は赦された。

この事ありて後數日にして彼女は神の御國に眠つた。國內の人々は永く彼女の死を哀悼した。

〔解説〕

可憐なる者よ、この物語の中にあはれて來る皇帝とは基督のことである。又その皇帝の結婚した美人とは、肉體を帯びた人類性そのものである。神父が父と聖靈に對して「我等をして我等の形に似たる人間を造らしめよ」と言つた時に、彼女は先づ彼女と結婚したのである。我等の主は一人の美しき子をもうけられた……それは基督の苦難と洗禮の功德とに依りて、一切の汚點から免れ得た清き靈魂のことである。然るにその靈魂は罪惡の爲に我等に於て殺されてゐる。如何にしてそのやうになるかと問ひますか？ 私は教へてあげませう。肉慾の快樂に一身を捧げるからであります。肉體の快樂はその結果として死を齎します。手についてゐる血は我等に頑強につきまたうてゐる罪惡そのものであります。「私は靈魂は常に私自身の手の中にある」といふ言葉もある。その意味は心が正しいか、又は正しくないかといふことは、恰もそれが最高の裁判官のお檢べと宣告を受ける爲に、掌上に置かれ

であるが如しといふに同じい。

(私はこの教訓の大部分は省略して仕舞ひました。その譯はこの教訓は幾部分その性質上微妙の點があり、亦その形の上に於て餘りに、複雑してゐるからである。第二のものは同じ題目についてあるが、それも私は同一の理由で省略した)

〔考證〕

この物語は中世末頃相當に普及されたものと見え、*Vincent of Beauvais* の '*Speculum Historiale*' (1250年の作) にも出てゐる。

一四、兩親を尊敬すること

皇帝ドロテアスの治世に、國內の子供達は皆、その兩親を扶養すべき義務があるといふ法令が制定された。當時國內に或一人の軍人があつて、その人が世にも稀なる有徳の一美婦を妻として迎へ、程

なく男の子を生ませた。偶々この軍人は旅行に赴き、敵國の人々に捕へられて、嚴重に禁錮されて仕舞つた。彼れは直にその妻子に書面を認めて賠償金を送るやうにと申傳へた。この通知を得て最も不安に感じたのは彼れの妻であつた。そして彼女はこの不安の念にかられて餘りに泣いた爲に終に盲目となつて仕舞つた。そこで彼女の息子は母親にかう言ひ出した……

「私はこれから直ぐ父上の許へ來つて、牢獄から父上の御身を救ひ出さうと思ひます」

母は答へて、

「お前は行つてはこまる。お前は私のたゞ獨り子である。私の魂の半分である。加<sup>のみならず</sup>之、お前が其所へ行つたなら、又もや父上と同じ運命になつて仕舞ふかも知れぬ。お前は現在お前と一緒にゐて、お前をこのやうに抱きか、へてゐるこの愛情の深い母親を棄て、も、留守の父親を救ひ出さうとするのか。二つの物を得ようとするよりも、既に掌中にある一つの物だけを自分の物とする方が却つて良いことではないか。お前はお前の父親の子であると同様に、母親の子であるのだ。しかしお前の父親は今是所に居らぬが、お前の母親たる私が現在是所に居るのだ。だから假令お前がお前の父親を救ふにしても、それが爲に私を決して棄て、仕舞ふべき譯のものではなからう。」

これに對する息子の答は極めて道理のとほつた言葉であつた……

「私は貴女あなたの子ではありませんが、しかし、彼れは私の父親であります。彼れは今外國に在つて、無慈悲な者の爲に圍まれてをります。然るに貴女は家に在つて、親切なお友達から保護され、愛護されてをります。又彼れは捕虜となつてをりますが、貴女は自由の體であります……成程貴女は盲目であります。しかし、彼れは貴女よりはもつと氣の毒な盲目であつて、天の光を見ることが出来ず、鐵鎖と傷も薄運とに苦しめられて、呪ふべき牢獄の暗黒の中で、たゞ獨り甲斐なき呻吟をもらしてゐるに過ぎません。ですから、私は彼れの許へ集つて是非とも賠償金を拂つて救ひ出さなくてはならぬと思ひます。

息子はそのやうに斷行した。人々は彼れが不撓不屈の精神をもつて、終にその父を救ひ出したところの、その雄々しい心に感動されて、何れも彼れをほめて、且尊敬した。

〔解説〕

可憐なる者よ、皇帝とは我等の天の父のことである。天の父は子はその兩親を扶養し且その命令に

従ふべき義務があると言つてゐられる。然らば我等の父と母とは果して何人であるか。基督は我等の父である。それは「申命記」第三十二に記載してある事柄である。父の愛は母の愛よりももつと役にたつものである。例へば子が過を犯すならば、父は多少殘忍と思はれるほど子供を矯正することに力める。そして場合によりては子供を答をもつて打つことすら敢てする。然るにとかく愛撫に流れがちな母親は、愛兒を餘りにあまやかして有頂天にさせて仕舞ふ。基督は我等が我等の犯した多くの缺點非行の爲に答打たれることを當然の罰として認めてをられる。然るに我等の母親、即ちこの世界は我等に許すに無限の快樂と淫逸的娛樂を以てしてゐる。基督は既に我等を棄て、遠國に入つてをられる。丁度それは「讚美歌」の中に書いてあるが如くである……「我れは我が同胞に依りて外來人の如く見做されてゐる」と。

基督は不斷に縛められて牢獄に監禁されてをる。但しそれは彼れ自身に依りてはなくて、彼れの教會の會員達に依りてゐる。使徒がヒブリユウの人々に言はれた如く、「大罪の中に生活する者は皆惡魔の牢獄に投げ込まれてゐる」と。しかし、我等の父は、我等が彼れの爲にその罪を賠償しようとして苦心するのを見て満足せられるのである。「ルーク傳」第十二に、「死者をして彼等の死したる物を葬らしめよ」、「しかし、爾は行き、そして、神の御國を告げよ」と我等の主は宣つたとある。これは



基督を賠償することに外ならぬ。神の御言葉を力強く説き得る者は皆、彼れの同胞を利益し、それに依りて基督をお救ひ申す者である。「マセウ傳」第二十に、「爾は是等の我が僕等しもべたちの中の、その最も賤しき者に對して爲した事柄を、我に對しても爲した」とある。しかし、母親即ち現世なるものは、人間をして基督の後を追うて、追放の地と貧困の境涯にまでも行くことを許さぬものである。現世の母親はさきざまに彼れを説きつけて現狀に置かうとする。即ち彼女はかう言ふのである：「若しお前が後悔して、基督の後を追うてゆくやうになるならば、私が義理合ひ上、是非とも忍ばなくてはならぬところの、あの禁慾と貧困の生活は、到底私の耐へ切れることではない」。これは母親が何人からも承認して貰はうとする常用手段である。しかし、かういつた望に對して決して承認を與へるものではない。成程彼女は盲目である：「次のやうなことをすら言つてゐるのだから：「面白い事をして人生を送り度い。そして青春の時代に於てのやうに、肉體の快樂を速に費してゆくものだ」。しかし、我が可憐なる者よ、若し諸君は善良な、そして又報恩の念に篤い子であるならば、諸君の俗的な母親に對して次の如く答へよ：「私の父親は私の生命、即ち私の魂の源であります。私の所有してゐる一切の物は、彼れの自由の賜物であります」と。さういつた譯から私は諸君に決して長命を希望するものではないと忠告する、諸君が長命を貧つてゐるとその間に苦と貧と盲目の災厄に近寄ることにな

る。そして其間に世界そのもの、方から諸君に對してお別れを求めて來る：「諸君が如何にその世界に對して執着を持つにしても、それは駄目な注文である。諸君が世間の人から重く見られるのは、諸君が世間に對して何かの役目を爲し得る間にのみ限られてゐる。

この理由を忘れぬやうに心掛けてくれ。そして一心不亂に諸君の生活の改善を工夫せよ。かくしてこそ諸君は結局永劫の生命に近寄ることが出来るのである：「神様が我等を誘引しようとしてをられる其の天國の生活：「神様の住んでをられるその天國の……」

## 一五、アレキジウス聖者

或ローマ皇帝の御代にアレキジウスと呼ぶ一青年が住んでゐた。彼れはその當時、宮廷第一の花形と呼ばれた一貴族ユウフイミアンの息子であつた。ユウフイミアンは常に黄金の帶と絹の衣を身にまとうてゐる三千の若者の一團を従者として引具してゐた。彼れの生活振りは實に王様の如くであつた。彼れは毎日三つの食卓を用意し、夫に死別した妻や、父母を失つた孤兒等をその食卓に於て攝待した。又是等の不運の者に對して彼れ自身が屢々接待の役目をなした。亦九時になると他の信者を

伴つて來て食事を共にすることもあつた。彼れの妻アベールも亦夫と同様に信仰に堅い、そして慈悲深い婦人であつた。しかし、好事魔が多いといふ言葉にもれず、このやうな歡樂の酒に多少の苦味が混じてゐた。即ちこのやうな榮華のたゞ中に於て、後繼者の無いといふことが、彼等にとりて長い間の醫し難き若痛の種であつた。しかし、彼等夫婦の者の祈願が終に神様の御意を動した。天はその御慈悲をもつて彼等に男兒を授けられた。夫婦の者は非常に難有く思つて、この男兒を大切に育て、その當時の禮儀作法を丹念に教へ込んだ。息子は成人すると實に鋭敏なそして又堅固な道念を具へた學者となつた。しかし、如何に學者であつても戀ひに脆いのは人間の常である。この息子は終に王族の一婦人と戀仲となつて仕舞つた。そして二人は彼等の友人の同意を得て芽出度く結婚した。然るに結婚の夜、然かもお祝ひの宴會の騒ぎが終つた時、彼れはその信仰に燃えた心をもつて神學上の議論を花嫁に聽かせた。そして、非常な熱と力をもつて、彼女に神に對する畏れの念と愛敬の念を與へようと力めたのである。彼女は以前から謙遜な振舞ひをすることの評判になつてゐた婦人であるから夫の言を重んじて今後も亦その貞節を固く守ることを誓つた。そこで彼れはいよいよ安心して言葉を終つた。そしてそれを言ひ終つてから、彼れが日頃より腰に帶びてゐたところの劍帶の釦と、黄金の指環を取外づして、これを僕に渡して言ふには、「このやうな虛榮の品は私に用事がないからお前に

渡して置く、何卒、これを私の形見と思つて保存してくれ。神様が私達を導いて下さることをお祈りする」。彼れはそれから金の用意をして、その夜直にローデシア行きの船に乗つて故郷の地を出帆して仕舞つた。其所から彼れは更にシリアの一都市エデッサに向つて進んだ。エデッサには異常な者の手に依りてリンネルの上に描き出された我等の主基督の肖像が保存されてあつた。彼れはこの場所に到着するや否や、是所迄携へて來た一切の物品を悉く貧しき人々に分配して仕舞つた。そして自身はぼろぼろになつた貧しい衣を身にまとうて、托鉢僧の間に伍し、マリヤ聖母に寄進して建てられたお寺の入口に坐つてゐた。彼れは今に不斷に施物を求むる身分となつた。しかし彼れは自身自身が貰つた施物の中から僅に小部分だけを自分の物となし、その他の物は悉くこれをもつと、缺乏してゐる、又もつと欲してゐる同胞に分配したのである。これは結局彼れの限り無き慈悲心の致すところであつた。

アレキジウスの父は我が子の不可解な逃亡を見て非常に嘆き悲んだ。彼れは我が子の行衛をさぐる爲に世界各國に彼れの從者を派遣した。是等の從者達は熱心に彼れの行衛を尋ね歩いた。會、彼等の或者はエデッサのその都市に來て、アレキジウスの目についたが、しかし、その使者の方ではアレキジウスを認めることが出来なかつたのである。アレキジウスは貧しき者の風を裝うて、終始一貫、頑強

にその主義を守つてゐたので、終に是等の使者の目につかずして無事にその場を通過した。是等の使者は彼等の慈悲を受けてゐる者が、彼等の尋ねてゐる主人であることに心付かずして、一般の乞食と同様に大きな施物を與へたのである。そしてアレキジウス自身は、その施物を黙々として、しかし衷心から、感謝して受取つたのである。彼れは心の奥で叫んだ：「あゝ、私は神様に御禮を申上げなくてはならぬ、神様は御親切にもその施物を、私自身の僕達しもべの手から授けて下さるのだ：」

使者はかういふ譯で、彼等の搜索の使命を果たすことが出来ずして空しく主人の許に戻つた。アレキジウスの母は使者の不成功であつたことを聴くや、淋しい部屋に閉ぢこもつて、聲たて、泣いたのである。彼女は地上に眠つた。そして體を掩ふ物としては僅に粗末な麻布一枚であつた。然かも彼女は我が子の行衛がわかる迄はこの生活振りを決して改めぬと誓ふのであつた。彼女の夫は又夫でたゞ獨りになつて仕舞つたので終に彼れ自身の住所を棄て、彼れの舅の家に移つて、其所に同居するといふ有様であつた。このやうな事件の起つてゐる間に十七年は通過した。アレキジウスはこの長い歲月の間、聖母マリヤ教會堂の入口で、一介の乞食としてその日その日を過したのである。然るに十七年目でとうとうマリヤの肖像は……この肖像は御堂の内部に在つたものであるが……次のやうなことを監督人に御託宣になつた……

あの神の人……信心の篤いあの男をお堂の中へ入れてやれ、あの男は天國に入る資格がある。神様の魂があの男の上に宿つてゐる、あの男のお祈りの聲は香の如く神の御座に昇つてくる」

しかし、監督人は聖母が何人のことを言うてをられるのか不明であつたから、試みにお訊ねしてみました：「玄關の入口に居るあの男のことではありませんか？」

聖母はそれに相違ないとお答へになつたから、監督人は直にその男を内へ入れた。

この破天荒な出来事は直に衆目の驚異を招いた。アレキジウスを尊敬してゐた心が、今や更に向上して殆んど彼れを崇拜する心となつて來た。しかし、アレキジウスは人類の光榮を塵埃の如く排斥してゐたから、かゝる崇敬を人々から受けるのが寧ろ苦痛であつたので、直に船に便乗してシリアの首府タルサスへと逃げた。然るに天の配劑とでも言はうか、途中で暴風に遭遇してローマの或港へ吹きあけられて仕舞つた。

アレキジウスはこの出来事から心にさとるところがあつて獨語するやう……「これから私は私の父上の家に急がうと思ふ。誰れも私を知つてゐる者は無からうと思ふ。他人に迷惑をかけるよりも生み

の父に迷惑をかける方が寧ろよからうと思ふ。

彼れが歩いてをる途中で、父が宮殿から戻つて來るのに遇つた。多くの従者は彼れの周圍を護つてゐた。アレキジウスは時を移さず父に呼びかけて言ふには、「お願ひですから、どうぞ、憐れな宿無し者を貴殿のお家に伴つて下さい、そして残り物を與へて下さい、さまようてる者を救つて下さる我等の主は、貴殿に對して何百倍の報いを下さるかわかりませんぞ」

しかし、彼れの父は見知らぬ者に愛情を寄せることも無いので、彼れのことは萬事従者に委ねた。従者は彼れを主人の家に伴つてかへり、その一室を彼れの爲に與へた。父は彼れ自身の食卓の肉を彼れに與へ、又彼れ自身に日頃から侍てる一人の従者に命じて、彼れの爲に事へるやうにさせた。併しアレキジウスは彼れの熱心なお祈りは決して斷つことが無つた。彼れは斷食やその外の禁慾主義の修行で彼れ自身の肉體を瘦せさせるばかりであつた。腹一ぱい美食した僕等は彼れを嘲笑し、甚しきは彼等の家事用の器具類を彼れの頭上で空にするといふことすら屢あつたが、しかし、彼れはこの屈辱を受けながら、その操志は何等變ずることは無つた。彼れはこのやうにして十七年間彼れ自身の父の家に住んでゐたのである。しかし、十七年目にいよいよ彼れの末期の時が到來したことを自覺したので、彼れはインクと紙を取寄せて、彼れ自身の傳記を委しく書いた。次の日曜日になると例

の如く聖餐會の式があつたが、その式の終つた後、山々の間から雷の如き聲がひびいて來て、それがこの都市の中まで聞こえて來たのである。それは「苦役する爾達凡ての者よ、皆我が許に來れ、我は爾達に休息を授けん」といふ叫びであつた。人々は怖れの念に打たれて皆顔を下に懼れ伏した。第二回目の叫びが來た：「ローマの不正を謝罪するために神の人：信心の堅い人物を見出せよ」。直に搜索が始つた。しかしそのやうな人物は見出されなかつた。同じ叫びが倍々聲高くなつて來た。恰も幾千萬億の喇叭の音が一時に混じたかの如く、その叫びは時又時と強くなつて來た。そして「ユウフイミアンの家を搜索せよ」といふ叫びがあつた。皇帝アーケデーアスとホノーリアスの二人は法王インノセントと一緒に、この形無き者の叫びに導かれて、ユウフイミアンの邸へと進んだ。彼等はその家に近寄つた時、アレキジウスに侍つてゐた僕は、彼れの主人なるユウフイミアンの所へ走つて來て「御主人、貴殿は如何にお考へになりますか、この見知らぬ托鉢僧は世の人のお手本になる人物だと見受けませんが」と叫ぶのであつた。ユウフイミアンはこの暗示に従つて直に彼れの部屋に入つてみた。この時僧は臥床の上に手足を伸したまゝで横つてゐた。彼れは既に死んで仕舞つたのであつた。しかし、それにしても彼れの顔には光榮の名残りが人目を眩惑するばかりにたゞよつてゐて、恰もそれが天使の顔に本然の清き美しき光明が宿つてゐるのと同様であつた。彼れの右手に一枚の紙が握られて

るた。ユウフイミアンはこれを取らうとしたが、死人が固く握りしめてゐるので、それを取ることは出来なかつた。止む無く彼れは死人をそのまゝにして、ともかく、二人の皇帝と法王の前に出た。そして彼れが見て来たことを悉く話した。彼等は驚いた。そしてその死人の部屋に直に入つて叫んで言ふには……「我等は假令罪深き悪人であるとは言ふもの、國家の舵を握つてゐる者で、宗教政治の隆昌を常に圖つてゐるものである。だから、我等にこの紙を渡して貰ひ度い……何がそれに書いてあるか知り度いから……」

法王は直にその巻物に近寄つて彼れの手を觸れた。死人は今迄固くこれを握つてゐたが、法王の手が觸れると忽然としてその握りを弛めた。遺書は人々に讀まれた。父ユウフイミアンがこれを讀み聞かせられるや、悲しみのために全身が麻痺して仕舞つた。彼れは力を失つてなよなよとして終に倒れて仕舞つた。聽て少しく我れにかへるや、今度は、彼れの衣を引裂き、銀髪をかきむしり、又胸を拂つてゐる美しい髻を引抜くといふ有様であつた。加之、彼れは己れ自身の體に大きな傷を加へ、死人の體にすがりついて狂氣の如く叫んだ……「私の息子、私の息子、嗚呼可哀相なことをしてくれた、何故お前は私にこのやうな苦しい思ひをさせるのか、何故お前はこのやうに永い歲月の間、苦しみを耐へてゐたのだ、お前の辛棒して来た苦しみは、それはそれは逆も死ぬほどの思ひがあつたこと、

思ふ。嗚呼私は不運な人間だ、私のだんだん弱つてくるこの老先き短い體を護つてくれるべき筈の息子が、この私の年老いた身が望みをかけ、又誇りにもしてゐたお前が、このやうな淺間しい藁蒲團の上に横つて、そして今は私に對して物言ふことも出来ぬとは……嗚呼何んといふ情の無いことだらう……私は何所で慰めを求むべきであらうか……」

その刹那のことである、恰も獵師から係蹄で苦しめられた手負ひの牝獅子が、その係蹄を破つて狂ひ出した時のやうに、心を破られた憐れむべきアールは狂人の如く現れ出た。彼女は今迄倉皇として後を追うて来たものである。彼女の衣は引裂かれて、ぼろぼろになつて彼女の體にか、つてゐた。彼女の頭髮は亂れて飛んでゐた。眼は感情の激した爲に、ものすごくかややいてゐた。そして見るからに憐れに、彼女はその物狂しき眼光を天に注いでゐた。彼女は人々のとゞめるのを意に介することもなく、狂人にありがちな恐しい力で人々を押分けて進んだ。聽て彼女は彼女の息絶えた息子の傍に寄つて、恰も心臓を刺しとほすやうな金切り聲で次のやうに叫んだ……「私は行くよ、行くよ、そして私は私の心のたつた一つの慰めになる者に會ふのだ。この乾ききつた泉は彼れに吸はせたものではないか。又是等の衰へ果てた兩腕は彼れを支へてくれたものではないか。彼れは眠りに……このやうな眠りにつかかなかつたか……私が彼れを見張つてゐた間に……お、私の子が？」……このや

うなことを言ひながら彼女は彼女の瘦せ衰へた體を、彼女の心配の對象物……無意識になつてゐるその死體の上に投げかけた。そして再び悲しみを訴へた……「私自身の可愛い息子、お前が死んで仕舞へば凡ての物が直ぐさま暗になつて見えるこの曇つた目の光……嗚呼何故お前はこのやうにしてくれたか、何故お前はそのやうに無慈悲であつたのか……お前は私達の泣くのを見てゐた……お前は私達の嘆きを聽いてゐた……それであつてお前は私達のためにその悲しみを慰めやうともしてくれなかつた。僕等はお前を嘲弄し、お前を害した。しかしお前はそれを辛棒してゐた……嗚呼それは餘りに辛棒が過ぎたといふもの……」。不運な母親は、幾度も幾度も我が子の死骸の上に身を投げた。そして一方では彼女の腕に彼れを抱きかへ、他方では彼れの天使の如き顔の上に彼女の手を慎み深い様子で走らせたのである。彼女は今彼女の涙でぬらしてゐるところの冷たい頬と眼瞼の上に接吻したかと思へば、忽ちして彼れの上に凭れかゝつて、何事かを低いそして殆ど聽くことの出来ぬ聲で囁くのであつた。彼女は突然見物人の方に向き直つて言つた……「皆の人、どうぞ泣いて下さい。子を失つた親の悲嘆を見てゐる者は、誰れも泣いてくれなくてはならぬ義理だ。私は十七年の間彼れと一緒に居つて、彼れを和らなかつたのです……彼れをですよ……私の可愛いそして美しいその子を……僕等は彼れを嘲弄して卑屈にも彼れの辛棒強いその頭に答の雨をそ、いだのです。お、誰れが再び私

の火のやうな眼瞼に涙を與へてくれるでせうか……誰れが、誰れが、私の悲しみに同情してくれるでせうか」

アレキジウスの妻となり、然かも結婚したその夕夫と別れて仕舞つた婦人は、この時同じ仲間の人々から是所へ伴はれて來てゐた。しかし、彼女は悲しみに胸も裂けるばかりであつたので、今迄一言も言はなかつた。だが、アベールが沈黙したので今度は彼女は前へ躍り出て泣き叫ぶのであつた。嗚呼貴郎、何といふ淺ましい有様で……私は……この私は何の……悲しい悲しい……私には最早やお待ち申す仁も無くなりました……假令お還へりにならぬともそれを心待ちにお待ち致すお方もなくなりました……私は何を見て悦ぶべきでせうか。私の悦びの鏡は碎かれて仕舞ひました。私の希望は消えて仕舞ひました。寡婦としての私の凡ての財産は悲嘆より外に何物もありません。群集はこのやうに種々の悲しい場面を見せつけられたので、何れも是等の不幸の人に同情して互ひに聲たて、泣いた。法王と二人の皇帝の命令に依りて死骸は美しい柩に載せられて、市の中央に運ばれた。人々が今迄尋ねあぐんでゐた眞の神の人……信仰の堅固な名僧が辛うじて見出されたことが布告された。人々は皆その柩の側へ群がつて來た。虚弱な者がその尊き死骸に觸れると忽然として強健の者となつた。盲目の人は直に視力を恢復した。惡魔に取りつかれてゐた者は惡魔から放れることが出來た。凡て病

人は、如何に身體の調子が悪くとも、一度その遺骸に觸れるや健康體となつた。皇帝も法王もこの奇蹟を見て非常に驚いた。彼等は自らこの柩を支へた。驚くべし、それと同時に彼等はその遺骸から蒸じ來たる神聖の氣に打たれてその五體が清められた。彼等はこれより山と積んだ金銀を街道に撒き散らした。これはかくすれば人々はその本然の貪慾に促されて、是等の財寶をかき集めようとするから、その隙に乗じて柩を教會堂へ運ぶことが出来るからであつた。ところが不思議なことには、人々は是等の金銀に目をくれることもなく、益々猛烈に押寄せて來て柩に觸れようとした。しかし、ともかく非常に骨折つた後、辛うじて柩が殉教者ボニフェース尊者の教會堂へと運ばれた。そして其所で七日間人々は柩の側を離れなかつた：皆熱心に供養して。人々は黄金や寶石等で飾りたてた一基の供養塔を建立した。そして其所へ彼等の聖者の遺骨を嚴に葬つた。清淨な芳香がその供養塔の中からすらたゞよつて來た。そしてそれが恰も最も芳しき香氣で全部充たされてゐるもの、やうであつた。彼れの遷化は基督紀元三百二十八年頃であつた。

〔解説〕

可憐なる者よ、ユウフイミアンとは現世の子を持つ親を指差したものである。子を持つ者は皆そ

の子の爲に日夜苦勞してゐる。親は子の爲に妻を迎へてやる……妻とは虚榮のことに外ならぬ。この虚榮物を息子が花嫁を弄ぶが如く悦んで弄ぶのである。否、俗界の虚榮物は最上の有徳の妻よりも重く見られることが屢々あつて、一命をこれに捧げて仕舞ふ者すらある。しかし、有徳の妻の爲に一生を捧げる夫は頗る稀である。母とはこの世界その物を指差したものであつて、この世界は俗的精神を持つた子供を非常に重く見てくれるのである。しかし、アレキジウスの如き善良の息子になると、己が兩親を満足させることよりも、神の御意に如何にしてすべきかを深く考へるものである。その譯はかういふ息子であると、かの神様が「我が爲に國をも家をも父をも母をも妻をも棄てる者は、百倍の報いを得、且永劫の生命を授けらるべし」と宣うたことを常に忘れないでゐるからである。次にアレキジウスが船に乗つたとあるが、船は我等の神聖な教會である。若し我等が永劫の祝福を得たいと思ふならば、其所から入らなくてはならぬのである。又我等は美しき衣を棄て、仕舞はなければならぬ美しき衣とは現世の虚飾を指差す。かくて我等は貧しき人々、即ち心の貧しき者と交はらなくてはならぬこと、なる。次にアレキジウスを教會堂へ尋き入れてくれた監督人があるが、これは萬事に意を配つてくれる懺悔聽聞僧のことである。この種の僧の仕事は罪を犯した者に聖書の教へを説いてやつて、その功德でその人の魂が無事に天國に行けるやうにしてやることである。しかし、時としては暴風が

起きて来て、その人を再び本國に忙しげに還へして仕舞ふこともある：：恰もそれはアレキジウスの場合に見られる如くである。悪魔の誘惑は是等の暴風で現はされてゐる譯である。即ち航海者はこの暴風の爲に一定の航路を離れて仕舞つて、彼れに行くべき信仰の生活路を塞がれたことになつてゐる。故に若し諸君が或種の誘惑に敗けたやうな感じが起つたら、神聖のアレキジウスを模範としてその例を學ぶべきである。即ち巡禮人の衣：：この人生を旅行する者に必要な物を體に着け、又諸君の肉身の、そして俗界の父の目を免れて、首尾能く神の人となるやうに工夫しなくてはならぬ。このやうにして懺悔の生活を送ることを心がけたならば、両親はこれを見て大に悲しむことであらう。又己が生みの子が、このやうに現世を輕んじ、且神を愛して自分勝手に貧乏を悦ぶのを見て、親心としてこれを非難することであらう。しかし、神の御意に背くよりは両親の不興を招く方がまだしも安全である。故に美しい紙の一片：：即ち良心といふものを先づ我がものとせよ。そしてその良心の白紙の上に諸君の傳記を書くがよい。さうなれば、最高の僧は皇帝と共に諸君の側に來るであらう：：換言すれば基督が多くの天使を伴つて諸君の傍に來たり、諸君の魂をボニフォース尊者の教會堂：：即ち一切の歡樂が満ちてゐるところの永劫の生命に導き給ふであらう。

〔考 證〕

この物語は英吉利中世紀末の宗教文學の一たる「名僧傳」にも出てゐるほどの有名な話である。但、話の筋は必ずしも全部一致してゐるとは斷言し難いものがある。基督教傳通の説教材料として實に理想的のものであつたと思はれる。

一六、模範生活

ローマの一皇帝は大きな宮殿の造營を企てたことがあつた。基礎工事の爲に土臺下を掘つてゆくと地下に一つの黄金の棺があつて、それには三つの小さな環が飾つてあつて、その環の上に次の文字が刻んであつた。

「私は費した。私は與へた。私はつゞけた。私は所有した。私は所有してゐる。私は失つた。私は罰せられてゐる」



前面にも次の如き文句が書いてあつた。

「私が費した物は私の掌中にある。私が與へた物は私に戻つて來てゐる」

これを見て皇帝は國內の貴族を呼び出した。そして彼等にこの文字の意味を考へよと命じた。貴族等は次のやうにお答へをした。

「陛下、これは陛下より以前にこの國を治めてをられた或る皇帝が、その後繼者に一つの模範を示して、それを代々の皇帝に守らせようとお考へになつたことに相違ありません。私が費したとあるは、私の生涯を費したといふことであります。それは結局、或は裁斷し、或は訓戒し、或は全力を傾けて、一生涯その國の政治を視たといふ意味に外ならぬと思ひます。次に私が與へたとあるは軍事上の準備品を與へ、或は貧乏者に衣食を與へたといふことであります。又凡ての人に、その人の功罪に應じて物を與へたといふことであります。次に私がつゞけたとあるは、公平な態度で萬事を嚴密に行つたといふことであります。……即ち貧窮者には慈悲を垂れ、苦役者には給料を與へることをつゞけたといふ意味であります。私が所有したとあるは、寛大にして然かも誠實のこもつた心を所有したといふことであります。……即ち私に對して奉仕してくれ者には、必ずその恩に報い、

又常に愛情の溢れた容貌を表はすことを力めたといふ意味であります。次に私が所有してゐるといふ意味は、他人に恩恵を授け、他人を保護し、他人を罰する手が私にあるといふことであります。次に私が失つたとあるは、私の馬鹿な心、私の敵の友情、私の淫亂な肉慾の快樂を失つたといふことであります。最後に私が罰せられてゐるとあるは、私が永久の唯一神を信することなく、又罪の贖ひといふことを疑つてゐる爲に、地獄で罰を受けてゐるといふことを指示したものであります」

皇帝はこの説明を聽いて以來、彼れ自身は固よりのこと、彼れの臣民を今迄よりは更に賢明に治めた。そして彼れの生涯を平和に送つた。

〔解説〕

可憐なる者よ、如何なる基督教徒でも、若しその人が一心不亂になつて美しき建物を造くることに即ち神様をお受けする爲に心の準備をなすならば、その人はこの物語中の皇帝と同一である。若し彼れが、過去の罪過に對する眞面目な悔恨の念に導かれて、深く深く地を掘つてゆくならば、彼れは黄

金の棺、即ち道德で飾られ、神聖な心で満されてゐる心を見出すであらう。三つの黄金の小環はこの棺即ち心を飾つてくれる。三つの小環とは信仰・希望・慈善のことである。しかし、何が其所に書いてあるか。先づ「私が費した」とある。可憐なる者よ、然らばその費した物は何か。信仰心の篤い基督教徒は答へるであらう……「それは神様に奉仕して肉體と靈を費したことである」と。諸君の中の誰れでもかういふ風にその人生を費すならば、それは臆て永劫の報酬を得るものである。次に第二の事柄に「私はつゞけた」とある。可憐なる者よ、何をつゞけたといふのであるか。信仰心の篤い基督教徒は答へるであらう……「それは破れたる、そして又悔ひ悲しめる心を持ちつゞけたといふことである」と。第三の文句は「私は與へた」であるが、私の可憐なる者よ、何物を與へたのであるか。信仰心の篤い基督教徒は答へるであらう……「私の全心を神様に與へたのである」と。(以下省略)

(一)から以下は教訓の言葉が簡約されて仕舞つた。そして、たゞ主要なる題目のみが與へられた)

## 一七、美しい生活

或る皇帝は誰れでも私に事へたいと思ふ者は、宮殿の門を三度叩いて、門内にゐる人々から、その求める所を了解して貰はなくにはならぬと命じた。當時ローマ帝國內にギドーと呼ぶ貧しい男があつた。彼れはこの命令を傳へ聞いて、この方法に依ると皇帝から職を與へて貰ふことが出来ると思つて悦んだ彼れはかう思つた……「私は生れの賤しい貧乏人だから、獨りだけになつて餓死するよりか、寧ろ皇帝に事へて金満家になる方が氣の利いた仕事だ」と。

さう思つたので、彼れは宮殿に赴いた。そして命令通りに門を三度叩いた。門衛は直ちに門を開けてくれた。そして彼れを門内に導き入れた。彼れは皇帝の面前に誘はれた。皇帝は「お前は何を求めようとするのか。」と訊ねた。ギドーは「陛下、私を陛下の下に使つて頂きたい。」と答へた。「如何なる職をと。」と皇帝は重ねて訊ねた。ギドーは次のやうに答へた……

「私は六つの仕事に堪能であります。先づ第一に私は陛下の玉體を護衛し、陛下の御褥を敷き、陛下の御食事を調べ、陛下の御足を洗ふことが出来ます。第二、私は他人が眠つてゐる間に私が夜警の役を勤め、他人が目をさまして警戒してゐる時に私が眠つてゐることが出来るのです。第三、善良なお酒を飲むことが出来るばかりでなく、酒の善悪を區別することも出来ます。第四、私は私の主人の爲めに客を饗應することが出来ます。第五、私は煙を少しもたてないで火を焚き、その側

に來る者を温めることが出來ます。第六私は人々に聖地に達する道を教へ、其所から人々が健康體になつて歸國することが出來得るやうにしてやれます」と。

皇帝は言つた……「實に是等は何れも善良な仕事である。多くの人々は之に依つて大に利益を得る譯だ。お前は私と一緒にゐてよろしい。そして先づ私の護衛者として事へてみるがよろしい。一つ々々の仕事に對して滿一ヶ年づゝ行つてみなくてはならぬのだから……」

ギドーはたゞ獨り悦に入つてゐた。彼れは毎夜皇帝のために褥を敷き、下着を洗濯し、又時々それを新たな品と換へた。彼れは次に皇帝の入口で臥した……勿論玉體を護衛する爲めに、自分の體に全部武装して……同様に彼れは一頭の犬を飼つた。それは何事か危険があつたら吠えさせる爲であつた。又彼れは毎夜皇帝の足を洗つた。その外少しでも皇帝から叱責されてはならぬといふ用意周到な心から、凡ての事にかけて忠實に、又健氣にたち働いた。故に皇帝は彼れを非常に愛した。そしてその年の終りに彼れを拔擢して、彼れ自身の執事とした。これは第二の條件を行はしめる爲の前提であつたのだ。新任の執事は第二の條件を悉く行はなくてはならぬことになつた。

ギドーはいよいよ第二の仕事にとりかゝつた。彼れは先づ夏の間但凡ゆる食品を準備し、非常な決心を以て好機會の來るのを期待してゐた。故に彼れは他の人々が好時節を無駄に費して、いよいよ冬を迎へてから、今更の如く貯蓄の爲に働き初めた時、彼れ自身は休息した。そしてその間に來るべき年の仕事を完全にしたのである。皇帝は彼れの勤勉振とその利口な遣り振とを見て、彼れの食事係長を呼び出してかう命じた……

「私の盃の中へ最良の酒を入れて……新酒と酔を混じた酒を入れるんだよ……それをギドーに與へて味はせてみよ。これがギドーの第三の仕事なのだ……良酒を味つてその品質を判斷するのが彼れの第三の役目なのだ……」

食事係長は皇帝の命の如くなした。

ギドーはこれを味つてから言つた……「この酒は以前は善つた、そして今も善い酒だ、今より後にも善い酒になるであらう。現在新しい酒は古くなれば善くなるであらう。古い酒は現在は善い。酔は以前は善い品であつたのだ」

皇帝はギドールの返答が實に當を得た考へ深い返事であると思つた。特にこの酒の混合物を前以て知ることなしに、かういふ的確な返答をしたのは感心だと思つた。そこで彼れは次の如きことを命じた……

「さあ、これから直ぐ國中を歩きめぐつて、私を識つてゐる限りの者を一名も残さず宴會に招いて來よ、クリスマスも近付いて來たことであるから……これがお前の第四の仕事だ」

ギドールは直に出發した。しかし彼れは皇帝の命令したこと、は全く反對の敵のみを招待した。クリスマスの前夜になると宮殿は是等の客で一つぱいになつた。皇帝は之を見て非常に驚いた。そして早速ギドールを呼出して、「これは又何といふことだ。お前は私の招待する客のことを充分承知してゐると言つたではないか」と訊ねた。ギドールは答へた……「お言葉の通り」。皇帝は大に憤つて叫んだ……「お前は私が私の友人だけを招待すると言つてゐたことを忘れた譯はあるまい。然るに私の敵だであるならば、何時でも御殿へ參上して、接待されることが出來ます。しかし、敵となつた者は左様參りますまい。かう考へましたので私は、この機會を利用して彼等に御馳走をふるまつて、深切な態度を見せたならば、彼等は必ずその恨みを棄て、陛下に温い心を寄せるに相違ないと思つたのであります。」

事實はその通りであつた。饗宴の終らぬ先きに來客は皆皇帝の無二の友となつた。そして、彼等は生涯彼れに對して忠良の臣となつた。

皇帝は大に満足して叫んだ……「有難いことだ。私の敵は今味方である。次にお前は第五番目の仕事を行はなくてはならぬ。彼等の爲にも、私の爲にも、煙を立てないで火を焚く方法を考へてくれ」

ギドールは答へた……「それは早速致しませう」。彼れは彼れの約束を實行した。即ちかうである。夏の暑い日に、彼れは緑の薪を澤山集めて日光に曝して充分に之を乾燥した後、これで火を焚いた。薪が善く燃えるので煙が少しも起らなからた。それが爲に皇帝も、皇帝の友人達も、煙に惱まされることなしに、彼等の身體を温めることが出來た。

彼れは今や彼れの最後の仕事を實行するやうに命令された。彼れが若し之を首尾よく遂行して、彼れの主君の満足を得るならば、大に面目をほどこすことが出来るのみならず、澤山の金錢を與へられ

ることになつてゐた。

ギドーは言つた……陛下、聖地に旅行しようと思ふ者は、私について海岸へ行かなくてはいけません」……

命令通りに人々は男女老幼の區別を問はず、悉く群をなして彼れの後について海岸に赴いた。彼等が指定の地點に到着した時、ギドーは言つた……「皆さんは海中に私の見た物と同じ物を見ましたか」

人々は答へた……「見ません」

彼れはつゞけた……「では、波の真中に一つの大きな岩のあるのが見えるでせう、目を開いて、よく御覽よ」

彼等は答へた……「よく見えます。しかし何故そのやうなことをお問ひになるのですか……」

ギドーは言つた……「皆さん、この岩に一羽の鳥がをります。そして、その鳥が己が巢を離れる

ことがありません。巢の中には七つの卵があるんです。この鳥が巢の中にある間は波が穏かでありませんが、若しその巢を去ると、直に暴風雨が起つてきます。ですから、さういふ日に船を乗り出す者があれば必ずその人は流れて仕舞ひます。しかしその鳥が卵を抱いて巢の中に留つてをる日に航海すれば無事に還へることが出来ます」

彼等は言つた……「しかし、その鳥が何時巢の中に居り、何時その巢を去るか、私共には分りません」

ギドーは答へは……「それは分りますよ、その鳥は何か特別の危険でもない限りは決してその巢を去りませんから。又そこには他の一羽の鳥がをりまして、それがこの鳥とは非常に仲が悪くて、その巢を襲つて、卵を破ることを日夜苦心してゐます。若しこの鳥が自分の卵が破られ、自分の巢が汚されるのを見るならば、非常に悲んで直に其所から逃げて去ります。さういふ時になると海が荒れ風がひどく吹き出します。さうなつたら船乗はどこかに避難しなくてはならぬことになります」

人々は更に問うた：「これを避ける方法はありませんか。どうしたならば敵鳥を巢から遠ざけ、そして私達が無事に航海することが出来ますか」

ギドーは答へた：「それは小羊の血を以てするに如くはありません。此の敵鳥の最も嫌ひな物は小羊の鮮血であります。ですから、巢の内外に小羊の血を撒いて置くに限りません。一滴でも残つて居れば、その悪鳥は巢に近寄りません。又巢の中の鳥は其儘に其所にとゞまつてをります。海上も静かで、航海者は安心して水の上を往復することになります」

彼等はこれを聽いてから、小羊の血を持つて来て、これをギドーの言葉のやうに撒布した。彼等は無事に聖地に赴いた。皇帝はギドーが賢くも凡ての仕事を首尾よく遂行したのを見て、彼れを拔擢して陸軍の大將軍に任じ、且つ彼れに與へるに大きな富を以てした。

〔解説〕

可憐なる者よ、この物語の中に出て来る皇帝とは我等の天の父を指差したものである。我等の神が宣うた御言葉に、門を三度叩いた者、即ち祈念し、斷食し、且つ施物を與へた物は、教會を守る軍人となり、終に永劫の生命を與へらるべしとある。ギドーは洗禮を受けて彼れの役目を始める者のことである。第一の役目は基督に奉仕し、有徳の心を造ることである。第二は警戒することである。その理由は「汝は何時人の子が来るかを知らぬからである」。第三は後悔を味ふことである。永久に天國に住む聖者にとりて、後悔ほど善いものはなかつた。後悔は又我等を導いて祝福の境涯に持ち來たすものであるが故に、それは今もなほ善いことである。最後に復活が我等に來り、我等が黄金の冠を與へられるために天國に喚ばれる時、それは善いこと、なるであらう。第四の仕事は基督の敵を招いて彼れの味方となし、且つ永劫の生命を彼等に與へることである。その理由は基督は「正しき者を呼ぶために來たのではなくして、却て罪人に懺悔させるために來たのであるからである」。第五は一切の不純不正の感情から免れて、自由に燃えるところの慈悲の光をかゞやかすことである。第六は聖地、即ち天國に通じてゐる道を教へることである。人類の渡る海とはこの世界のこと以外ならぬ。海中の岩とは人間の形、即ち人間の心を指差したものである。又その岩の上に潜んでゐる鳥とは聖靈のことである。次に七つの卵とはこの聖靈の七つの賜物を指差したものである。若し聖靈が我等を捨て、仕舞ふ

ならば、悪魔は巢を襲ひ、それ等の七つの卵を破つて仕舞ふ。小羊の血とは基督の血のことである。我等自身の救済のために、不斷に此の血をそぎかけられる必要がある。即ち永久にこれを記念として保つことが大切である。

## 一八、恕すべき罪

ジュリアンと呼べる軍人は、それとは知らずに、彼れの兩親を殺害したと言ふ話がある。

ジュリアンは貴族の生れであつて、特に若い人達の屢々するやうに、遊獵に耽つてゐたので、或日のこと、一頭の牡鹿は彼れのために追ひつめられて、俄に向きなほつて次のやうなことを彼れに言つた……

「お前は私をこのやうに猛烈に追ひまはすから、その報いとして、お前の兩親が、お前の手にかつて殺されることがあるぞ」

ジュリアンは此の言葉を聽いて大に恐れを抱いた。彼れはそのやうな不吉なことは決して起るものではないと口では斷言してゐたもの、その豫言の實現を氣に病んでゐた。故に彼れは遊獵の道樂を棄てて仕舞つて、私に遠い國に逃げてゆき、その國の王者に事へて軍人となつた。彼れの行動は戦争の時に於ても平和の時に於ても、著しくその君主の目を驚かすやうなものがあつたので、彼れは武士の稱號を授けられ、且つ城主の未亡人を妻として與へられ、同時にその婦人の持參金として其の城をすら贈られたのである。

このやうな事件の生じてゐる間に、ジュリアンの故郷では兩親は息子の失踪を甚く悲しみ、夫婦一緒に各地を旅行してその行衛を搜索した。終に彼等は偶然にも息子の住んでゐる城にたどりついた。ジュリアンの妻は夫が不在中であつたので、此の兩人夫婦に自ら面會して、其の何者であるかを訊ねた。彼等は腹藏なく此の旅行の理由を物語り、且つ彼等の獨り息子に對する悲しみの心を訴へた。彼女は以前から彼女の夫の口を通じて、彼れの兩親のことを聽かされてもゐたし、特に彼女の夫が不思議な縁からその本國を逃げ出して來たことまでも委く聽かれてゐたので、今この老夫婦の話に依つてこれが彼れの夫の兩親であることが明かになつたから、親切に彼等を取扱ふことにした。そうして彼女は彼女の夫に對する愛情の念から、この老夫婦を愛する心が一層強くなつて、彼等を彼女自身の臥

床に眠らせた。そして彼女自身は他に臥床を設けて、其所で眠ることにした。彼女は翌朝夙く起き出で、彼女の朝のお祈りに出掛けた。其の留守中に彼女の夫が帰宅した。彼れは彼れの日頃の習慣通りに、歸へるや否や妻の部屋に入つた。彼れは妻がなほ臥床の中にあるとのみ思つてゐた。彼れは彼女の眠りを破つてはならぬと思つたので靜に部屋の中に入つたのである。ところが彼れの驚いたことには、二人の者が同じ臥床に眠つてゐたではないか。彼れは直に彼れの妻の貞操を疑つた。一瞬間の猶豫もあらばこそ、彼れは帶劍の鞘を拂つて臥床の中の二人を殺害した。彼れは感情が大に激し、心が大に悲しみに打たれて、その部屋から走つて出た。そして偶然にも彼れの妻が少し前までお祈りをしつゝてゐた所の教會堂の方向へ駆けたのである。教會堂の入口で彼れは彼れの妻を認めた。彼れは餘りに意外なので非常に驚いた。さうして彼れの臥床に眠つてゐた者は誰れであつたかを訊ねた。彼女は彼れは彼れの兩親であつて、彼等が彼れの行衛を搜らんがために、長い間物憂き旅を重ねて、昨夜この城に到着したのであると答へた。ジュリアンの耳にはこれが恰も雷電の如くであつた。彼れは最早や悲しみを抑へることが出来なくなつた、彼れは悲痛の涙にむせんだ。

彼れは叫んだ……：「嗚呼、私のやうな世にも淺ましい淋しい人間は他にあるだらうか。この呪ふべき手は私の兩親を殺害したのだ。そして私が今日迄避けようとしてゐたところの、あの呪ふ

べき怖い豫言を實現させて仕舞つたのだ。嗚呼、私の可愛き妻よ、私のこの呪ふべき猜疑心を許してくれ、さうして私の最後の別離を受けてくれ。私は神様が私をお許しになつたことを知る迄は、決して決して心の休みを得ることが出来ぬのだ」

彼れの妻は答へた……：「では貴郎は私をお棄てにならうとするのですか……：私を寡婦にして仕舞ふお考へなのですか、いや、それは駄目であります。私は貴方の幸福の分配者であつたと同様に、これからは貴郎の悲しみの分配者であります」

ジュリアンは之に對して反對はしなかつた。二人は相携へて程遠からぬ所を流れてゐる大きな河の傍に赴いた。この川は水が深いのと、流れが速いのとで多くの人が死んだ川である。夫婦は是所に一つの救濟院を建て、心の奥から懺悔して是所に清き生活を初めた。この川を渡るほどの者は皆この家を訪づれた。多くの貧しき人々は皆是所に迎へられた。かくて多くの年は過ぎた。或る非常に寒い夜のこと、丁度それが眞夜中のことであつたが、ジュリアンが疲れはて、眠つてゐると、悲しさうな聲で彼れを呼ぶ者があつた。直に跳ね起きて見るとそれは寒さのために死にかゝつてゐる癩病患者で



あつた。ジュリアンはこの病者を家に導き入れた後、火を焚いて暖をとらせた。しかし到底暖くなりさうにも見えなかつた。彼れはこの癩病患者に出来る限りの慈悲を施してやらうと思つたから、病人を彼れ自身の臥床に入れてやつた。そして彼れの體温で彼れを温めてやつた。暫くすると今迄病人であつて、そして又寒さに苦しんでゐた筈の癩病患者が、俄に人間とは思へぬほどの美しい姿となり、然かもその軽い翼を動かし、今にもあれ天へ上らんとしてゐたのである。病人は驚き呆れてゐるところのジュリアンに、最も親しみのある顔に向けてかう言つた……「ジュリアンよ、神様は爾の悔恨の心を認めたといふことを爾にお傳へにならんがために私をお遣しになつたのだ」。さう言うて天の御使者はその姿を消して仕舞つた。ジュリアンと其の妻は、その後短い間に善事を遺憾なく行ひつくして大往生を遂げた。

### 〔解説〕

可憐なる者よ、苟も基督教徒であつて、悪魔、俗世間、肉慾に對して猛然と立つて勇闘し得るほどの者であるならば……又神に奉仕するために魂を得ようと志すほどの者であるならば、その人は皆武人ジュリアンである。さういふ人物は必ず俗世界から逃げ出すに相違ない。俗世界から逃げ出せ

ば、その報いとして城主婦人を妻として得ることになる……城主婦人とは神の御恵みのことである。次に世界の人々が常に追ひまはしてゐる所の此の世の生活上の虚榮は、本物語中に出てくる兩親その者である。是等の兩親は悔恨の劍を以て殺害された筈である。大河とは聖者のことである。又その大河の岸の救濟院とは祈禱、斷食、施物の三者を指差したものである。

### 〔考證〕

此の物語は英吉利中世末頃から文學的材料として非常に流行したものである。かの有名なカックストンの「Golden Legend」の中に出てゐる。宗教本位の教訓的物語の一典型とても評すべきものであらう。

## 一九、驕慢の罪

ローマ年代記を読むとボンペーと呼ばれた王があつた。この王者はシーザーと呼ぶ貴人の娘を妻として迎へた。シーザーとボンペーの兩人は全世界を征服することを約した。そしてボンペーはこの考

へから彼れの友に或る遠國の城砦を陥れるやうにと命じた。それは彼れの友たるシーザーは、この頃年齢も若く且非常に元氣者であつたから、ポンペーは彼れこそこの役目に最も適任者であると考へたからである。これと同時にポンペーはその間に國內に在りて、一國の首腦者として、國家の敵を如何に防ぐかといふことに苦心した。そして彼れはシーザーに遠征から凱旋すべき日を前以つて指定し、若しその期日迄に還へらぬならば、彼れの財産は悉くローマ帝國の爲に没收して仕舞ふことを宣告して置いた。この期限は五ケ年といふことであつた。シーザーは大軍を集めた。そして彼れ自身が攻撃すべき豫定になつてゐるところの國へと猛進した。然るにその國の住民は戦争に強つたのみならずシーザーの大軍が押寄せて來るのを前以つて警戒してゐたから、シーザーは到底その指定期間迄に彼等を征服することが出来なかつた。故に彼れはポンペーの怒を買ふことよりも、寧ろ彼れが折角征服した土地を放棄して仕舞ふことが惜しかつたので、識らず々々の間に五ケ年以上外國に滞在して仕舞つた。随つて彼れはローマ政府から追放され且つ彼れ自身の財産は悉く没收されたのである。シーザーは其後いよ／＼遠征を終へてローマへと軍を還へした。そして彼れはかの有名なルビコン川を彼れの軍を率ゐて渡ること、なつた。ルビコン川の中央に於て彼れは巨大な體軀をした一つの幽靈に會つた。幽靈はシーザーの進路を遮つて次のやうなことを叫んだ……

「シーザーよ、爾若しローマ國の安寧幸福を思ふ者ならば、この川を越へよ。しかし、若し他に志あるものならば、こゝを進むことは不利なるを知るべし」

シーザーは答へた……

「我はローマの爲に長い歳月の間戦つて來た者である。否、今後といへどもローマを保護する爲には如何なる困難をも厭はざる決心なり。我が日頃より禮拜してゐる神々もこのことを御照覽あれ」

シーザーはこれと言ひ終ると同時に、幽靈は消え失せた。

シーザーは少しく右に方向を轉じてこの川を横切つた。しかし、彼れはいよ／＼川を渡つて仕舞ふと對岸に立留つた。そして言つた……

「我は輕卒にも平和を誓言して仕舞つた。我は今我が正道を放棄しなくてはならぬ」

その時から彼れは最も猛烈に又最も兇惡にポンペーを追窮し、終に彼れをして死にさへ陥れた。そ

して彼れ自身も亦其後一團の反逆者の手にかゝつて殺害された。

〔解説〕

可憐なる者よ、ボンペーとは萬物創造の上帝を指先す。シーザーとは人間の先祖アダムのことである。又彼れの娘とあるは、神と結婚した聖靈のことである。アダムは樂園を耕し、樂園を保護する命を受けて、其所に置かれた者であつた。然るに彼れはその命を忠實に果すことがなかつた爲に、シーザーと同様に彼れの本國を追はれたのである。ルビコンとは人類が祝福を享樂する洗禮の謂である。

〔考證〕

この物語の骨子はシーザーとボンペーに關する歴史的材料に存してゐることは明かであるが、それは寧ろ中世期の荒唐無稽の傳説等を青史に加味したものである。

## 二〇、苦難と苦悶

皇帝コンラッドの朝にレオポルドと呼べる一人の貴族があつた。彼れは或る事件の爲に、彼れの君主の不興を虞れて妻と共に森林に逃亡して、憐れな小舎の中に隠れ住んだ。會々皇帝はこの森に遊獵を試みた。皇帝は餘りに獸を追うことに熱中してゐた爲に、いつとはなしに森の奥まで入りこんで仕舞つて、終に全く路を失つて仕舞つた。その間に夜となつた。彼方是方と彷徨つ後、この貴族の隠家にとどりついた。そして其家に一夜の宿を求めた。

宿の女主人はその頃妊娠してゐて、折も折、丁度分娩に臨んでゐた。しかし、その苦しい時をも忍耐して、この來客の爲に食物其他さまざまの要求された物を提供したのである。その夜彼女は男子を生んだ。

皇帝は睡眠つてゐると、「取れ、取れ、取れ」といふ不思議な聲が、彼れの耳にひびいて來た。皇帝は直に起きた。そして非常に驚いて獨語した……「一體、今の聲は何だらう。取れ、取れ、取れといふ聲が明かにこの耳に入つた。しかし、取れといはれても何を取つたらいいだらう」

彼れは暫時この不思議な事件を考へてゐたが、しかし、いつとはなしに再び熟睡して仕舞つた。然るに驚いたことには再び前同様の聲で、「取りもどせよ、取りもどせよ、取りもどせよ」と叫ぶ者があつた。

彼れは又かと思つて不興氣に起きた。彼れはつぶやいた……「一體、これはどうしたのだらう。最初耳に入つたのは、「取れ、取れ、取れ」といふ聲であつたが、私には今何物をも取るべきものは無い譯だ。然るに今度は、「取戻せ、取戻せ、取戻せ」とある。しかし、最初何物をも取らなかつた私が、何を取戻すべきであるか」

皇帝はこの理由を到底説明することが出来なかつたので、又々睡眠に陥つたのである。三度目に例の聲がきこえた……「逃げよ、逃げよ、逃げよ、兒が生れたぞ、その兒は汝の養子になるぞ」

皇帝は非常に恐れを抱いた。彼れは翌朝夙く起きてこの小舎を逃げ出した。彼れは彼れの従者の二人を捜し出した。そして彼等に、「その赤兒を母親から奪ひ取つて、體をまつ二つに割いて心臓を取出し、それを我が許に持來れ」と命じた。

従者は皇帝の命を奉じた。彼等は母親の胸に抱かれてゐた赤兒を奪ひ取つた。しかし、彼等は赤兒の美しい顔を見るや大に氣の毒になつて來たので、これを殺害する氣にはなれなくなつたので、樹木の枝に堅く縛りつけて野獸の害を防ぐこととし、それから一頭の野兎を殺してその心臓を取り、これを皇帝の前に持來つて赤兒の心臓であると欺いた。

この事ありてより間もなく、或る貴族は會々この森を通過した。彼れは赤兒の泣く聲を聞いたので

彼方は方とその實體を搜索した。そして幸福にもその居場所を見出したので、私ひそかに自分の衣に包んで家に持ち還つたのである。彼等夫婦の間に子供といふものが一人も無つたから、彼れはこの赤兒を妻に命じて、生みの兒の如く大切に養はしめた。妻も非常に悦んでこれを養ふことにした。彼女は大に愛着を感じた。そして彼れをヘンリーと呼んでゐた。

ヘンリーは成長するに従つて美しくもなり、且は非常に雄辯であつたので、多くの人々から寵愛された。特に皇帝はこの若者の人並勝れて伶俐なのに感心して仕舞つて、その父に命じて彼れに宮事へを勧めた。かういつた譯で少年は暫時皇帝の許に起臥することとなつた。しかし、彼れが餘りに各階級の人々から尊敬されるやうになつた爲に、皇帝は彼れ自身の行つたことを後悔するやうになつた。彼れはやゝもすればこの少年が、後日、皇帝の位に登らうと志す者ではなからうかと心配するやうになつたのである。特に彼れの最も慮れたことは、この若者がひよつとしたら、彼れがその昔、二人の従者に命じて殺害させやうとした、あの赤兒ではなからうかといふことであつた。そこで皇帝は如何なる事があつても大丈夫であるやうにといふ、用意周到な心から、一通の手紙を自筆で認めて、これを皇后の許に送ることとした。その手紙にはかう書いてあつた……

「この書面を見たら直すぐにこの若者を殺害すること、若し我が命に背かば御身の生命も危し」

皇帝はこの書状を書き終つてから何かの拍子に禮拜堂に入つ仕舞つた。そして、ベンチに腰掛けたまゝ、眠つたのである。書状は帯からぶら／＼垂れてゐたところの財布の中に入れてあつた。禮拜堂の僧は非常な好奇心にそゝられて、皇帝の財布を開けた。そしてこの書面を讀んで皇帝の腹黒き陰謀を知つた。彼れは恐怖と憤りの念に満たされたので、巧みにその書状の中から、特にこの若者を殺害せよといふ文句だけを削り取つて、その代りに、「彼れに朕が女を妻として與へよ」といふ文字を入れた。

皇帝の書面は皇后に渡された。皇后は皇帝自筆の文字や印璽の押ししてあるのを見て、すつかり安心して仕舞つた。そしてその命の如く國內の諸大名を集めて盛大な結婚式を擧げた。皇帝はこれより先き既に宮殿を棄て、過去の汚名を拭ひ去ることに力めてゐたが、今このことを傳へ聞くや大に苦悶を感じた。しかし、二人の従者、貴族及び僧侶等の不思議な盡力に依り、萬事が順調に進行するやうになつたことを知つて、最早や自分は位を棄て、神の御意に一身を委ねる時であることを悟つた、故に彼れはその少年を迎へる爲に使者を遣し、且つ彼れの結婚を正當のものとして認めたのみならず、彼れの領上を嗣ぐべき者として彼れを指定したのである。

## 〔解説〕

可憐なる者よ、皇帝とは上帝のことである。上帝は我等の祖先に對して憤りを抱き、我等の祖先を天の樂園から追放して、森林の中、人生の荒涼たる地に驅逐し給うたのである。次に新たに生れた赤兒とはキリストのことである。多くの人々はキリストを迫害した。しかし、キリストは終に凡ての敵を征服し給うた。二人の従者とは聖き力と恵みを指差したもので、これが心を支配する力である。赤兒が樹木に縛められたといふことは、教會堂に置かれたことを指差すものである。同様にこの赤兒を保護した貴族はこれ即ち僧侶のことに外ならぬ。又赤兒の代りに殺された野兎は、我等の肉慾のことである。肉慾は根絶されなくてはならぬものである。次に皇帝自筆の書面はこれ即ち人心を占領する一切の悪しき空想を指差すものに外ならぬ。かゝる場合には基督は殺害の危険があるものである。次に若者を保護した僧侶は思慮の深い僧侶のことである。かゝる僧侶は聖書を利用して人間の粗雑な心を緩和し、これを天國の心と結びつけるものである。

## 〔考證〕

この物語はカックストンの Golden Legend の中にも現れてゐるほどであるから、可成り古い時代から基督

教の僧侶等が説教の材料として引用してゐたものであらうと思はれる。皇帝の奸計が委しく書いてあつた書面が、神意に依りて途中で裏切られて仕舞つたといふ話の筋は、日本の徳川時代の繼子虐待物語に屢々出てくる趣向であつて、印度佛教傳説に由来してゐるものとも想像され得る餘地がある。

## 二二、反逆を防ぎしこと

ジャスティンの記録に依れば、ラセデモンの人民は彼等の王者に謀叛を企て、それが終に成功して、國王を追放するといふ結果に迄立ち至つた」とある。會々ペルシャ人はラセデモンを滅亡して仕舞はうといふ陰謀を企てた。そして彼等は大軍を以て一舉にラセデモンを包圍してこれを陥落させようとなつたのである。國外に追放されたラセデモンの王は、假令己れ自身は臣民の爲に苦しめられて、重なる怨を胸に抱いてはるたもの、本國の前途を心配せざるを得なかつたのである。特に眞實の愛國者として、故國を愛する誠實の念は、到底これを抑壓することが出来なかつたのである。故に彼れはペルシャ國王がラセデモンの國民に對して、いよく大軍を送らうとしてゐるその事實を確實にす

るや否や、この押し迫つて來た危険を確實に故郷の人々に報知する方法について、いろいろと考へてみた。そこで彼れは彼れの書板を取出して、この大事件の顛末を認め、且つこれに對して、ラセデモン軍が如何にせば彼等の敵を禦ぎ、且つこれを撃退することが出来るかを教へたのである。

國王はこれを書き終つた後、その全部を蠟で包んで仕舞つて、そしてこれを正直な使者に持たせてラセデモンの謀叛貴族等に送つた。さてラセデモンの貴族等はこの書板を受取つたもの、何所を見ても、文字らしい物が無く、蠟の表面には如何なる刻んだ痕も無かつたのである。これが爲に當然彼等の間にいろいろの議論が沸騰して來て、各自は各自の好む勝手な説を吐いたのである。特にこの書板を送つた者の眞意は何所にあるかといふことが大問題となつたのである。しかし、誰れ一人として、この眞相を解釋し得る者は無かつた。

會々ラセデモンの國王の妹と稱する者があつて、貴族等の迷つてゐる有様を見て、自分が試みにそれを檢べてみようと思つた彼女の申出は、直に許された。彼女は精密に檢査してみた結果、婦人がいざといつた時に屢々示すところの、あの特殊な智慧を働かせて、終に書板の蠟を揚げたのであるさうすると文字の一部分が明かになつて來た。彼女は今や一つの手掛りを得た。かくの如くにして次第次第に蠟を起してゆくと、終に文字が悉く明かになつて來たのである。貴族等はこの手紙に依りてべ

ルシヤ國王の陰謀を委しく知ることが出来て非常に悦んだ。そして彼等はそれに依りて敵に備へることが出来たのみならず、彼等を威壓し來たところの敵の包圍に對して、彼等自身を安全にするこゝとが出来たのである。

〔解説〕

可憐なる者よ、この國王は基督其人である。基督は墮落した人々の爲に、その正當な權利を奪はれて追放の憂き目に會はれた。然るに彼れは我等を愛する情が非常に強く、我等をして我等の敵たる惡魔の攻撃から免れるやうにさまざまに、工夫を凝されたのである。

## 二二、世俗的の心配

オーガスティンが我等に教へたことに依ると、埃及人が昔アイシスとセラピスを神として祀つた時、次の如き方法を以て徹底させたといふことである。即ち先づ彼等は一つの法令を設けて、若し何

んでもあれ、人間の生命が限りあるものだとか、或は人間のこの世に生まれて來るのは何の爲だとかいつた風のことを口にする者があれば、そのやうな者は必ず死刑の恥を受くべしといふことを命令した。次に彼等はアイシスとセラピスの二つの偶像を造り、これを見つての殿堂に祀つた。そして前記の法令を嚴格に遵奉せしめる精神から、この二つの偶像の側に、さらに小さな一つの偶像を置き、その偶像には沈黙の意を表示するつもりから、唇に食指を横へた意匠を加へたのである。言ふまでもなく殿堂に入つた者に必然的に沈黙を強請する精神であつた。

かくの如き手段に依りて埃及人には眞實の教へを普及させることに壓迫を加へたのである。

〔解説〕

可憐なる者よ、かくの如き埃及人は俗的精神にのみ動かされてゐる人々の代表者である。彼等は眞實の心を殺して、惡徳を崇めんと欲する者である。沈黙を表示した小さな偶像は、これ即ち眞實の心を壓迫する一つの道具たる世俗的の心配を象徴したものに外ならない。

## 二三、心の薬

オーガスティン聖者の御物語に依ると、往昔、皇帝が死去した。その時死骸を柩の上に横へ、これを火葬にして後、その遺骨を甕に納めるといふ風習になつてゐたといふことである。然るに會々一人の皇帝を火葬に付した時、その心臓が如何にしても焼けなかつたといふ話がある。人々はこれを見て大に驚いた。直に領内の學者や賢者が悉く一つの場所に呼び集められた。そしてその解答を求められた。彼等は次のやうに答へた……

「皇帝は酒に酔うて死亡されたのであるから、その心臓は酒毒の力強い影響を受けて火に燐えぬのである」

真相がかくの如くにして解決されたので、皇帝の心臓を火中から取出し、これに解毒薬を塗つた。不思議なことには酒毒は直に消え失つて仕舞つた。心臓は再び火中に入れられた。今度は直に焼けて灰になつた。

## 〔解説〕

可憐なる者よ、人間はこのやうにして正しい心を得るものである。心臓は毒にあつて仕舞へば、聖靈の火といへどもこれを如何ともすることが出来ぬ。解毒薬とは一切の罪を滅する後悔の念の謂である。

## 二四、悪魔の入れ智恵

或る所に一人の有名な魔術師があつた。彼れは一つの非常に美しい庭園を所有してゐた。其所には芳しい香の花や、風味の善き果實が澤山あつた。先づこの世界ではこれに勝れる庭園は何所にも無つたのである。しかし、この魔術師は愚人及び彼れに敵意を有してをる者以外は、何人をも是所に入れることを欲しなかつたのである。

この庭園に入つたほどの者は、皆その美に驚かされて、容易に是所を去ることを欲しなかつた。又この庭園で味つた快樂は心の奥迄深く泌み込んで、この魔術師の爲ならば何事でも拒むことなく、各



自の財産は一文も残さず、彼れの爲に提供するといふ有様であつた。随つて愚人等たちはこの庭園を天國の樂園と思ひ、其所に咲きこぼれてゐる花や、實つてゐる果實は、何れも永久につゞくものであると思ひこんで、如何に彼等自身が幸福な地主であつても、この目前の快樂に心を奪はれて仕舞つて未來のことは何も考へぬといふ有様であつた。彼等は淫逸に耽つた。そして全心を不純の快樂に捧げた。しかし、その結果は非常に悲しいことに終つた。即ち彼等が肉慾の満足に耽つてゐるその瞬間に、魔術師は彼等を殺すのである。かくの如くにして、天國の樂園エデンに似た物を餌として兇惡の大罪を永々ながかけたのである。

## 〔解説〕

可憐なる者よ、この魔術師は現世そのものを指差したものである。其所には富といふものが提供されてゐる。人間がこの富を掌中に入れて仕舞へば固くそれを握りしめて、自己の富裕であることを考へるものである。しかし、一旦その掌を開らば富は忽然として消滅する。

## 〔考證〕

この物語は英吉利中世散文祖マンガギルの『東洋記』(拙著マンガギル東洋旅行記全譯参照)中にも見えてゐる如く、その材料は明かに東洋傳來の物と思はる。後世サッセーはその東洋的詩篇『マラバ』(Southey; Thalaba.)の中で同様の材料を用ひてゐる。

## 二五、忘恩

或る一人の高貴の婦人は奸惡な一王者の爲にさまざまの害を受け、その領地を甚しく荒らされて仕舞つたこの事柄が委しく彼女の耳に入るや、彼女は非常に泣き悲しんで胸が張り裂けるやうであつた。會々一人の巡禮者が彼女を訪づれ、暫時その邸に滞在することになつた。巡禮者はこの婦人の貧困な有様を見、特に彼女が憐れむべき境遇に置かれてゐるのを目撃して甚しく同情した結果、大に義俠心を起して、彼女の爲に一つ争つてみようと思つた。そして彼れはその條件として、若し私がこの戦争に於て不幸にして死ぬやうなことがあつたならば、私の勇氣を記念し、且つ貴女のこれに對する感謝の念を示す記念として、私の杖と袋を貴女の私室に懸けて置いて下さいと依頼したのである。彼女

は固より衷心から彼れの希望を容れてやつた。巡禮者は奸悪な王者と闘ふ爲に急いで其所を去つた。そして首尾よく華々しき勝利を得たのである。しかし、その争ひの眞最中に、不幸にも彼れは流れ箭に中つて討死した。婦人はこのことを聴くや初めの約束通りに杖と袋を彼女の部屋に懸けた。

彼女は今や彼女の奪はれた財産を悉く取戻した、しかし、この報が一度世間に流布されるや、三人の王者は大きな贈物を彼女に贈つて、その夫とならうとした。彼女はこの真相を前以つて知つてゐたから、丹念に彼女の身邊を飾つて、この三人の王者を迎へた。彼等は彼等の身分相應に接待されたしかし、彼女は彼等を迎へてゐる間に何となく心の落付を缺いたのである。彼女は獨語した：「併し是等の三人の王者が私の部屋の中に入るやうになつたら、私の部屋に置いてあるこの巡禮者の杖と袋は、私の面目を汚すもと、なるであらう」。

彼女はこの三つの記念物を彼女の私室から取去つて仕舞つた。

彼女はこのやうにして彼女の誓約を反古にした。そして明かに彼女の忘恩の淺ましい心を實證することになつた。

〔解説〕

可憐なる者よ、貴婦人とは人間の靈を指差し、奸悪な王者とは我等から天國の富を奪つて仕舞つたところの悪魔の謂である。巡禮者とは我等の爲に勇闘し、我等の爲に罪を贖つて下さつた基督のことに外ならぬ。然るに我等は基督の恩を忘れて却つて悪魔を歓迎し、俗世間と肉慾とを優待して自分の部屋に入れようとする。そして、かくの如くにして我等は我等の救済の主の愛の記念物を棄て、仕舞ふのである。

二六、謙遜

昔、或る皇后があつて、己が奴僕と醜い關係を結んで、不面目にも男兒を生んだ。この生れた兒が成人するや、さまざまの悪事を行ひ、特に彼れの父たる評判の善い王に對して亂暴な振舞が多つた。王は我が子が何故このやうな曲つた根性を持つたのであるか到底自分には了解が出来なかつたから、皇后にこの子は彼女の正しい血統を承けた者ではあるまいと訊ねてみた。皇后は終に懺悔してこの子は王の血を分けた者では無いと申述べた。王は今になつてこの子を彼れの國內から追放することも出

來ぬから。こゝに一策を案じ出して、將來は必ず一枚の衣で然かもそれが異つた地質と、異つた色合ひのもので造つた衣を着なくてはならぬと嚴命した。この衣は一方は極めて平凡な材料であるが、他方は非常な高價の物から出來てゐた。故にこの子はその貧弱な方を見る毎に驕慢の鼻が挫かれ、且つ彼れが今日迄耽つて來たところの惡徳の行爲がこれに依りて根絶されて仕舞ふといふ便宜があつた。又他面ではその美しい部分を見て、前途の希望を起し、善事を行ふといふ勇氣が出たのである。彼れはこのやうにして、この用意周到な工夫の力に依りて謙遜の徳を養ひ、そのことにかけては有名な者となつた。そして彼れは其後永遠に惡行爲を棄て、仕舞つた。

〔解説〕

可憐なる者よ、大罪を犯す者は皆この皇后に似た人である。この衣の貧弱な部分は、我等の肉の部分を指差したものである。次にその美しい部分は我等の靈の部分である。我等が天上界の者と同一様になり、又不滅の生命を得ようと志すのは、この靈の力に依りてゐる。

## 二七、因果應報

或る非常に富んだ又非常に權力の強い皇帝が、たゞ一人の世にも珍しき美人の娘を持つてゐた。皇帝は彼女を護保する爲に、五人の軍人を武装させて日夜彼女の側に侍らした、そして彼れは彼等の爲に毎日その給料を、彼れ自身の財布から拂渡してゐた。

この皇帝が日頃から非常に寵愛してゐた侍従の中に一人の賢い男があつた。又皇帝の飼つてゐる犬に頗る兇猛な犬があつた。この犬はなかく、役に立つ立派な犬ではあつたが、餘りにその性質が猛烈であつた爲に、三本の鎖で縛めて置かなくてはならぬといふ有様であつた。會々皇帝が臥床に横つてゐた時に、ひよつとした思ひつきから、是非とも靈地パレスタインに參詣しようと思つた。そして翌朝起き出づるや否や、彼れの日頃から寵愛してゐた例の家扶を呼出し、次のことを命じた……

「私はこれからパレスタインに出掛けようと思ふ。娘のことはお前と、五人の軍人にその保護を委ねる。又私が特に愛してゐるあの犬のことは萬事お前に一任する。娘の一身上について萬一間違が生じたなら、お前の一命が無いのだから、萬事意を用ひてくれ。護衛兵には彼等の欲する物を悉くお前の手から與へてやつてくれ。犬には成るべく食物を與へぬやうにし、又鎖で縛めて置くことを

忘れてくれるな……若しそのやうにすることを忘れると、犬の兇猛な性質が倍々増長することになるから……」

家扶は皇帝から命令されたことを悉く引受けた。そして必ずそれを行ふべきことを誓つた。しかしそれは口ばかりであつて、彼れはそれを行ふどころか却つて全然約束とは反對の事柄を行つたのである。先づ彼れは犬には最も不適當な食物を與へたのみならず、鎖で縛めるとすら怠つたのである。次に彼れは王女に對して一切の慰安物を拒み、且つ生活に必要な物をすら與へなかつた。又軍人に對しては給料を一文たりとも與へなかつた。そこで軍人等は衣食の道を得ぬので、淺間しい有様で國中を流浪するといふ有様であつた。特に憐れなのは王女であつた。彼女は全く棄てられて仕舞つて、着る物も食べる物もなくなつたから、宮殿の奥座敷から廣間の庭に出て來て、礪石に坐して聲たて、泣くといふ有様であつた。次に犬は如何にと見れば、悪い食物ばかりを食べた結果、その兇猛の性質が倍増長して來て、終には突然狂ひ出して、その縛めの鎖を破つて飛び出し、王女の手といはず足といはず搔きむしつたのである。この悲しむべき事件が國內に知れわたるや、國民の凡ては非常に憤つた使者は皇帝の許に送られた。皇帝はこの飛報を得るや驚いて彼れの本國に還つた。

家令は皇帝の面前に呼び出された。そして彼れが何故に嚴命に背いて、王女に衣食を與へなかつたり、軍人に給料を拂はなかつたり、或は犬に食物を與へ過ぎたりしたのであるかと頗る直截的に訊ねられた。しかし、家扶は是等の問ひに對して何等の答辯も、何等の辯解も出來なかつた。是に於て獄卒は呼び出された。彼れは獄卒の爲に手足を縛められ、紅に燃えてゐる爐の中に投げ込まれた。

皇帝のこの處置さばきは國內の凡ての人民に大なる満足を與へた。

〔解説〕

可憐なる者よ、皇帝とは我等の主なる基督のことである。美しき王女とは人間の靈をいふ。五人の軍人は五感のこと、又犬は我等の心を騒がし、我等の心を殺すところの肉慾を指差すものである。三重の鎖とは神に對する愛、神を怒らす恐れ、神を怒らせた時の我等の恥等を現はしたものである。最後に家族とは、感覺の世話や、靈の保護等を委ねられた者の謂である。

## 二八、老婆の悪むべき奸計

或る皇后の君臨してゐた國に一人の軍人があつて、それから幸福にも、高尚な、貞節な、又美しい婦人から戀ひされて、兩人首尾よく結婚することが出来た。ところがその軍人は或る事情の爲に長い間旅行しなくてはならぬことになつた。そこで彼れはその出立の前に妻に對つてかう話したのである……

「私はお前に對してお前の良心以外に如何なる番人をも置かぬつもりだ。私はそれだけで十二分だと思つてゐる」

彼れはいよく、彼れの従者を引連れて故郷を後に船出した。

彼れの妻は夫から信用されたことを大に悦んで、日夜家にのみ籠り、貞節を重んじて正しい生活をつゞけてゐた。然るに其後久しからずして彼女は隣人の切なる勧誘を受けて或る祭禮の式に列した。

其所には多くの客があつたが、其の中に一人の若者があつて、その男は此の婦人の美貌を一目見るや非常に心が動いて仕舞つて、それ以來日夜彼女のことをのみ思ふと言ふ有様であつた。そして彼れは

彼れの切なる思をさまざまの手段を通じて彼女に寄せたのである。しかし、彼女は貞淑の婦人であつたから、彼れの言ひ寄つて來るのを却つて憤り、その無禮な態度を猛烈に非難した。若者は此のつれない返事を得て大に落膽し、それ以來彼れの健康は日一日と衰へてゆくばかりであつた。

會々或日のこと、彼れは思ひに沈みながら教會堂へと歩みを運んでゐた。途中一人の老婆に會つた。この老婆はこれ迄信仰に篤い様子を見せかけて、世間の人々から身分不相應の尊敬を受けてゐた。この老婆は若者の心配らしい様子を見てその理由を訊ねた。

若者は答へた。

「貴女にその理由をお話し致しても甲斐なきことであります」

老婆は言つた。

「それにしても何か貴殿のお爲になることがあるかも知れません。負傷したならば其の傷を先づもつて言はなくてははいけません。傷口を他人に見せることになれば、これを治療する方法が必ずしも絶無とは申されませんよ。神様の御加護でそれが易々と直るかも知れませんよ……ともかく私にその傷口をお見せなさいよ」



やらうと思ふ者も、この比類のない憐れな有様を見ては、たゞ泣くより外に途はありませんでせう」

此の家の女主人公はこれを聴くや非常に恐れを抱くやうになつた。そして、彼女は私に叫んだ……  
 ……「嗚呼、私もそれと同様に戀されてゐるのだ。私を戀してゐる男は、同様に死なうとしてゐるのだ」

彼女は彼女自身の胸中の恐を抑へることが出来なくなつて、事柄の全部をこの老婆に話して仕舞つた。老婆はこれを聴いて即坐に答へた。

「美しいお仁よ、その若い男の惱みを冷淡にお聴きになつては悪いですよ。私の不運な娘を見て下さい。ともかく充分御用心あれ。私の娘のやうな目に會ひますぞ」

輕卒にもこの貞節の固い婦人は終に心を動かして、かう言つたのである……

「あ、親切なお婆さん、何卒私に善い智慧を與へて下さい。私はこの場合何をやつたらよろしいでせう、私はどうしても貴女の娘さんのやうな目に會ひ度くありませんが」

奸智に長けた老婆は答へた。

「では直にその若いお仁をお迎へになつては如何ですか、そしてそのお仁の戀をお許しになるのですよ、さうすればそのお仁の命が助かるばかりでなく、貴女自身の救ふことの出来ない災厄も免れるといふ譯でせう」

婦人は赤面して言つた。

「では萬事貴女にお依頼申上げますから、そのお仁を是所へ御案内申して下さい。若し貴女以外の者がこの使者になつたなら、世間の惡評が立つこと、思はれますから」

老婆は答へた。

「よろしいですよ、それでは直に是所へ御案内申して参りませう」

彼女はそのやうになした。然るにその夜旅行先きから夫が歸宅した。そしてこの不義の仲間を悉く耻づべき死刑に處した。かういふ譯で老婆の奸計は多くの人々を破滅に導いた。

## 〔解説〕

可憐なる者よ、此の物語の中に軍人とあるは基督のことである。又妻とは神様が自由の心をお授けになつたところの魂の謂である。聖き魂は肉慾の快樂の宴に招かれ、その席上で、若き男、即ち現世の虚榮といふものから横戀慕を受けた。老婆は悪魔のことである。犬は長壽の慾望と神恵に對する鐵面皮な思想を象徴してゐるものであつて、是等の破廉耻な考へ方は、我等を誘惑して魂を欺かしめるものである。しかし、基督は夜間還へり來つて、罪人に死刑を宣告させる。

## 〔考證〕

此の物語はポツカシヨの『十日物語』の第五日目の條(獨逸譯十一月八日の條參照)に出てくる話と似通つてゐる點がある。同じくアルフォンサス(Alphonse)の Clericalis Disciplina の第十一章にも見えてゐる(一八二八年出版の獨逸語譯書第十四參照)そしてこれが一六五八年に『イソップ物語』の中に取入れられて英吉利文學を肥やしてゐる。古代英吉利文學の中にもこれに似た材料が出てゐる(例へば『シリズ夫人』 Dame Siriz)。是等の材料は其の出所は一元的であるが、又は多元的であるが、固より不明であるが、少なくとも印度の古い物語 Vrihat Katha 等も多少影響したものであらうと想像され得ると思ふ。ローマ古文學に見えてゐるやうな人間が動物又は草木に變じて仕舞ふ思想と同一のものであつて、所謂アリヤン民族の自然に對する元始的觀念と佛教の因果思想とが合一したものであらうと思はれる。

## 二九、判官の墮落

或る皇帝は一つの法令を設けて、今日以後苟も國家の判官たる者が、不公平な裁判を下した事實が明かになつたならば、その判官の如何なる身分の人たるを問はず嚴罰に處せらるべしといふことであつた。會々或る判官が巨額の贈賄に依りて、甚しき不正な裁判を下したことがあつた。この事が聽て皇帝の耳に達したので、皇帝はその判官の皮膚を剥ぐことを命じた。その宣告が時を移さず實行された。そして罪人としてのその判官の皮は法官椅子に釘づけにされて、以後裁判官たる者が同様の罪を犯さぬやうといふ一つの警告の記しとなつた。その後、皇帝はこの皮を剥がれた法官の一子に父と同じ榮職を授けた。そしてその就任の式の行はれた日に、皇帝自身の口から次のやうな警告が發せられた。

「汝は以後汝の父が職務を怠つた爲に殺されたところの、その皮の上に坐して裁判を行ふことに



なる。若し誰れか、汝を誘惑して不公平な判決を下させようとしたならば、汝は汝の亡父のことを思ひ出すがよい。即ち法官椅子の掩物を見れば、汝は汝の道德心の墮落してゆく事實を其所に見出すことが出来やう。そして不正な行爲を斷念する機縁ともなり得る譯である」

〔解説〕

可憐なる者よ、皇帝とは基督のことである。不正な行爲をした裁判官とはこれ即ち皮を剥かれるべき……換言すれば一切の悪性質を取除けられなくてはならぬところの凡ての悪人の謂である。法官椅子に釘づけにされた皮は基督の御心を指差したもので、我等はこれに依りて我等の行動の指針を得る譯である。

### 三〇、罪と裁斷

或る皇帝は戦勝を得た機會に、三つの特別の恩典と、丁度それに適應するところの三つの不名譽な

事柄の實行を決定した。名譽の三つの恩典中、その第一のものは、戦争から凱旋して來た者は當然その名譽の恩典として、國民から喝采と、その他の凡ゆる歡喜の表現とをもつて迎へられるべきであるといふことであつた。次に第二の條件は、捕虜は皆手と足を縛められて、その凱旋者の戦車に扈從しなくてはならぬといふことであつた。第三は凱旋者は名譽の陣羽織を着て、四頭の白馬に曳かせた凱旋車に乗つて政廳前迄行くことを許されるといふことであつた。しかし、これは名譽の恩典であつて、その反面に於ては、是等の特典の爲に勝利者が驕慢の心を生じては善くないといふところから……又一つには幸運の寵兒は、や、もすれば彼れの生れと、人間の生命の限りあることを忘れがちになるのを慮つて、三つの不名譽な事柄をこれに加へた。先づ第一はその凱旋者の軍車内の右側に一人の奴隸を倍乗させたことである。これは我々人間といふものは、如何に高位高官になつても、貧と零落を防ぐべきしがらみ柵しがらみが無いことを暗示したものである。次に第二は車上の凱旋者はその奴隸から幾度も幾度も猛烈に答打たれなくてはならぬといふことであつた。これはこの勝利者が彼れの同胞から受ける讚辭の爲に餘りに心が驕ることを抑へんが爲であつた。奴隸はこの時彼れを答打ちながら、ギリシア語で「汝自身を知れ」と叫ぶのである……これは有頂天になつて生意氣となるなといふ意味の言葉である。後を顧みよ、そして汝自身はいつかは死ぬる身であることを忘れるなと叫ぶ。最後に第三の事柄

は、その凱旋の日に、最も苦々しい非難の言葉や、或は骨を刺すやうな皮肉の言葉を發してもよろしいといふことであつた。

〔解説〕

可憐なる者よ、皇帝とは我等の天國の父なる神を指差し、凱旋者とは罪惡に對して華々しき勝利を得たところの我等の主基督を指差したものである。第一の名譽は、かのエルサレムの人々が「デヴィドの御子來ませり、願くは御祝福を」と叫んだ時の、その基督のエルサレム入りを表示したものである。第二即ち手足を縛められた捕虜とは、罪の報いで奴隸となつた者を表示し、第三は基督の神性を表示したものである。四頭の白馬とは四人の福音布教者のことである。次に車上の奴隸は我等の主基督を十字架に打付けたところの二人の盜人の中の、その最も惡き者を指差したのである。第二の事柄は基督がお受けになつたところの答傷である。第三は基督の御惱みになつた侮辱の行爲そのものである。

### 三一、死の嚴峻

古い書物に書いてあることだが、アレキサンダーが死んだといふことが傳はると、黄金の墓が一つ造られて、その墓の周圍に多くの哲人が集つたといふことである。

其時哲人の中の一人は言つた。

「昨日はアレキサンダーその人は黄金の庫であつたが、今はその反對に黄金その物がアレキサンダーの庫となつた」

第二の哲人は言つた。

「昨日は全世界をもつてするも彼れの名譽心は十分に満たされなかつた。然るに今日は布の三エルか、四エルあれば十二分である」

第三の哲人は言つた。

「昨日はアレキサンダーは人民を支配してをつたが、今日は人民が彼れを支配してをる」

第四の哲人は言つた。

「昨日はアレキサンダーは數千の人を解放することが出来たが、今日は彼れ自身をすら死の束縛から自由にすることが出来ぬ」

第五の哲人は言つた。

「昨日は彼れは大地を壓したが、今日は大地が彼れを壓してをる」

第六の哲人は言つた。

「昨日は凡ての人はアレキサンダーを恐れたが、今日は彼れを評判する者も無い」

第七の哲人は言つた。

「昨日はアレキサンダーは無數の友を持つてゐたが、今日は一人の友も無し」

第八の哲人は言つた。

「昨日はアレキサンダーは一軍を統率してゐたが、今日はその軍隊は彼れを墓に運んでゆく」

〔解説〕

可憐なる者よ。何人でも若しその人が富んでゐて、然かも世俗的な心の持主であるならば、それはアレキサンダーである。是等の哲人等が言つた事柄は、さういふ人々に善く適合する言葉である。

### 三三、格言

セネカの言に依ると毒に中つて死んだ人の肉體からは、その毒の悪性で且つ冷たい作用の爲に、一匹の蟲も生れて來ぬが、しかし若しその肉體が電光に打たれるならば、數日にして蟲で一ぱいになるといふことである。

〔解説〕

可憐なる者よ、人間は罪の爲に毒殺されるものである。さういふ死を遂げた者は一匹の蟲をも生み出すことが出来ぬ……即ち如何なる徳をも作り出さぬものである。しかし電火に打たれることがあれば……換言すれば神様の御恵みに浴すれば、かういふ人々は多くの善事業を爲すものである。

### 三三、縊死

ヴァレリアスの語るところに依れば、パレティヌスと呼べる男が、或日突然泣き出した。そして彼れの息子とその隣人の多くを彼れの側に呼び寄せて、次の如きことを言うたさうである。

「私は今私の庭園の不吉の樹木がだんだん生成して来るのを見て、悲しくて悲しくてどうすることも出来ぬ。この樹木こそは私の最初の妻が憐れにも、首をく、つて死んだ樹である。それから引續いて私の第二、第三の妻も、この樹で首をく、つて死んだのです。だから私が今悲觀するのも無理ではないでせう」

アリウスと呼べる者はかう答へた。

「左様な譯ですか。しかし、かういふ世にも珍しい幸福事を貴殿は何故そのやうに悲しまれるのですか、私には寧ろその理由がわかりません。何卒私にあの縁起の善い樹木の枝を二三本分けて下さい。私はそれを貰つて私の隣人にも分配してやつて、以後皆の者で、その妻に立派な考へを起させる機会をつくり度いと思ひます」

パレティヌスはこの請ひを許した。

この事があつてから後、永久に、この樹木が有名な物となつて、又それが彼れの財産の中で最も生産的な物となつたのである。

#### 〔解説〕

可憐なる者よ、この樹木は基督の十字架である。又この樹木で縊死した三人の妻は、驕慢、心の快樂、目の快樂等を指差したものであつて、是等の欲望はこのやうな方法で宙にぶら下つて（中止させて）、殺されて仕舞ふべき筈のものである。又この樹木の枝を分配して貰ひ度いと申出した男は、善良

なる基督教信者のことである。

### 三四、人生を慎重に思ふこと

古書に依ればアレキサンダー大王はアリストールの弟子となり、その教訓を受けて非常に利益するところが多つたといふことである。彼れは他のさまざまの重要な事柄の中で、特に彼れ自身を利益し、同時に亦他人の利益にもなるやうな事柄は、如何なる事でありますかとその先生に問うた。

アリストールは次の如く答へた。

「そだ、そだ、よく問うた、今教へてやるから注意して聽かれよ、若し御身が私の言うたことを守つてくれるならば、非常に成功する。先づ是非とも守らなくてはならぬ事柄に七つの異つた種類がある。第一は平衡器に重い物を載せぬこと。第二は劍を以て火力を強めぬこと、第三は王冠に對して誹謗せぬこと。第四は小禽の心臓を食べぬこと。第五は正しい考へを起したならばそれを變改せざること。第六は大道を歩まぬこと。第七はさわがしく囀る燕に檐を貸さぬこと」

アリストールのこの謎のやうな言葉の意味は、アレキサンダーの深く考へるところとなつたのである。そして彼れは是等の教訓を固く遵奉して後年の生活に非常に利益を齎すこととなつた。

#### 〔解説〕

可憐なる者よ、平衡器は人その物である。故に重い物を載せすぎてはよくない。載せる品物は一つ一つ検査してその目方を測ることが緊要である。即ち皆々は各自の行はんとする事柄を慎重に考慮することが大切である。これについて鷹の物語がある。一羽の鷹が獲物を見出したので、その上に舞ひ降りて来て爪でそれを捕へた。鷹は先づこの獲物を殺した後、その死骸を全部持ち去らうとした。しかし、その獲物の目方が非常に重くて持ち上げることが出来なかつたから、持ち去るに都合の善いやうに引裂いた。そしてその残物を後に棄てた。

「劍を以て火力を強めぬこと」とあるは、鋭利な言葉を以て怒りを買はぬことを教へたものである。「王冠に對して誹謗せぬこと」とは國法を守ることである。「小禽の心臓を食べぬこと」とあるは、これ即ち小禽は弱く且つ小心者であるが故に、基督教信者の状態には不都合であることを教へたもの以外ならぬ。「正しい考へを起したならばそれを變改せざること」とあるは、苟も一旦後悔の念を起した

ならば最後迄これをつまげよといふことである。毒蛇が鰻の一種なる八目鰻といふものを己が妻として貰ひ受けようと思つて、このことを八目鰻に申出すと、八目鰻はお前さんのやうな毒を持つてゐる男とは結婚が出来ぬと拒絶した。毒蛇は初一念を如何にもして貰かうと思つたから、八目鰻に知れぬやうに或所に身を隠してゐて、我が体内の毒を悉く吐き出して仕舞つた。しかし、結婚式が終つてから毒蛇は再びその毒の貯蓄してある所へ戻つた。そして以前の如くその毒を全部取戻した。これと同様のことが罪を犯した凡ゆる人に見られるのである。即ち罪を犯した人は暫時後悔してゐるが、直にその毒に還へるものである。即ち二度も三度も同じ罪を犯すのが世間の人の例である。「大道を歩かぬこと」とあるは、死の道を踏まぬことである。「さわがしく囀る燕に檐を貸さぬこと」とあるは心に罪を宿す勿れといふことである。

### 三五、平和、改善其他

ローマの年代記に依ると、貴族がお互に争ひをやつた後、仲直りをする場合に、先づお互に高い山

に登つて一頭の小羊を屠つて平和を誓ふことになつてゐたさうだ。勿論かういふ場合には次のやうなことを誓ふのである……「若しその關係者の何れの方でも、この厳格な約束を少しでも破ることがあれば、その破約者の血が、小羊の屠られる時のやうにそゝがれることになる」

#### 〔解説〕

可憐なる者よ、貴族とは神と人のことである。又小羊とは基督のことである。

### 三六、人生路

或る國王はさまざまの疑問の中で、特に人間の性質といふことに關して確實な知識を得ようとしてゐた。當時遠國に一人の有名な哲學者が住んでゐて、その人はさまざまの不思議な事柄を悉く解釋してゐたのである。國王はこのことを傳へ聞くや急使を彼れに遣はして、王城にと呼び出した。哲學者は直に王命を奉じて都への旅路に上つた。彼れが登城するのを待ちかねてゐたところの國王は、非常

に悦んで早速次の如き事を質問した。

「師よ、私は師の大學者であることや、又、師が天地間の現象について深く深く研究してをられることを屢々傳へ聞いてをりました。そこで今日私は私自身でこの世間の評判の間違つてをらぬことを知り度いと思つてゐる譯であります。先づ師にお訊ね致し度いことは「人間とは如何なるものか」といふ問題であります」

哲人は答へた。

「人間とは憐れむべき生物である。憐れむべき生を送ることが人間の最初の、又中頃の、又最終の目的である。これほど明かな事實は無い。故にシヨアの言に「婦人の腹から生れた人間は不幸のみで満たさる」とある。先づ生れた當時を御覽ぜよ。實に貧しく且つ無力な者である。次にその人生の中頃を御覽ぜよ、世間の人々は彼れを攻撃し、彼れの娛樂を狭くし、彼れの靈を永久に非難することを援助するのみである。次にその最終の目的地を御覽ぜよ、大地は口を開けて彼れを迎へ：：そして再び大地が閉ぢて仕舞ふ。同時に彼れも消えて仕舞ふ。然らば王者よ、王者自身の國法の誇り：：現世の光榮に對する王者その人の誇は如何になりますか」

王者は答へた。

「師よ、私は四つの問題をお訊ね致し度い。若し師がこれに對して賢明な解答を與へられるならば、私は師に富と名譽を贈らうと思つてゐる。先づ第一の問題は人とは何か、第二は人は何物に似てゐるか、第三は人は何所にありや、第四は人は何者と交るか、即ちこの四問である。」

哲人は答へた。

「第一問に對してはたゞ笑ひを以てお答へし得るのみであります。王様は人とは何かとお問ひになります、人とは死の奴隸、一日の客、遠國に急いで旅行する旅人にあらずして何者でありますか。人間は常に墓といふ束縛を受けるものであるが故に奴隸であります。死は彼れを縛め、彼れを舞臺の上から奪ひ去つて仕舞ひます：：彼れの名聲の記念をすら取去ります。そして秋の木葉の如く彼れの生命を凋落させて仕舞ひます。しかし彼れは彼れの功罪の如何によりて、賞與を受け又は刑罰を與へられます。次に人間は一日の客であると申したのは、人間の一生は餘りに短くして、忘却は彼れを衣の如く掩うて仕舞ふからであります。人間は又遠國に往く旅行者であります。眠りを得ることもなく、常に警戒又警戒の有様で旅行をつづけます：：彼れは與へられた僅少の時間で生

活の資を擱み取り、又その境遇に應じた責任を遂行しつゝ、先へ先へと歩んでゆきます。死は彼れを急がせます。この旅行を爲すに必要な準備は、これ即ち基督教徒たるに必要な徳からざる道徳であります。次に第二の間であるところの人は何物に似てゐるかといふお言葉に對しては、たゞ氷の如しと申すより外に言葉がありません……氷は白晝の熱に會へば直に溶解して仕舞ひます。人間は不純な分子で混合されてゐるものでありますから、その弱い性質の熱だけで忽にして腐敗してゆきます。又人間は親幹にぶらさがつてゐる林檎に似てをります。外部は美しく、如何にも豊かに成熟するやうに見えてをりますが、その内部には蟲が私かに食ひ込んでをります。随て程なく林檎が心まで腐つて終に地上に落ちます。かういつた風のものでありますから、人間の誇は果して何れの點にありますか。第三のお訊ねである人は何所にありやに對して私は次の如くお答へ申します……人間はいろいろの意味に於ての戰場に在りと。その意味は人間は世間に對し、肉に對し、又惡魔に對して鬪はなくてはならぬからであります。第四のお訊ねは人は何者と交はるかといふことであります。これに對して私はかうお答へ申します……我等は七人の厄介な友と交つてゐて、常に彼等の爲に苦しめられてゐると。七人の友とは飢餓、渴、暑、寒、疲勞、虛弱、死等である。故に惡魔、世間、肉慾等に反抗する爲に、魂を武裝しなくてはならぬ、是等の害物は種の誘惑を我等に對

して試みてゐる。随て是等と鬪つて勝利を得ようとする爲にはさまざまの準備が必要である。肉慾は我等を促して淫逸に誘惑し、俗界は我等に虚榮の満足を與へ、惡魔は驕慢の心を與へる。故に若し肉慾の爲に誘惑されたならば、常に忘れてならぬことは、我等の肉は假令その滅亡する時日は不明であるとしても、ともかく、早晚元の塵に還つて仕舞ふものであることを思ひ起し、又永久の神明がその背徳の罪を所罰することを待構へてゐることを忘れてはならぬ。「智慧の書」第二章に我等の肉體は塵と灰に成るべしとある。故に人生が終つて仕舞へば、我等の受くべき物はたゞ忘却あるのみである……我等も、我等の事業も等しく世の中から忘れられて仕舞ふ。以上の教訓を忘れることがなければ、誘惑に打勝ち、又誘惑の魔手に心を奪はれることが無くなる。若し又俗世界の虚榮なるものが誘惑しようとしたならば、虚榮その物の頼みにならぬことを思ひ出せば、それを求める念が薄らいでくる。虚榮の爲に一生を捧げてみても、その得るところは僅に罪惡といふことが残るのである。鷓鴣の物語がこの眞理を證明してゐる。話の筋は下の如くである。或日のこと親鷓鴣は一人の獵師が來たを見て、その子鷓鴣を救はうと思つて、恰も自身自身が傷を受けたもの、如く見せかけてその獵師の前を小走りに走つて、彼れを子鷓鴣の巢から遠ざけようと試みた。獵師はうまく欺かれて仕舞つて、親鷓鴣の後を熱心に追うた。親鷓鴣はだんだん遠く獵師を連れ出して終



に巢の見えなくなる地點迄誘つた後、俄に飛び上つた。そして巧に逃げて仕舞つた。獵師はこのやうにして終に鳥の爲に欺かれて仕舞つて、彼れの苦心に對して報いられたのはたゞ疲勞であつた。世界のことも亦此の如くである。鷓鴣の巢に近寄つた獵師は善良な基督教徒のことである。何故なら彼れは彼れの額に汗して衣食の途を得てゐるからである。俗世界は誘惑を呼出し且つこれを提供してゐるから、彼れの弱い心ではこれに對して抵抗することが出来ない。親鷓鴣は獵師に對して若し私の後にお前がついてさへくれば、望む獲物は手に入ると言つてゐる。獵師はこの言葉に欺かれて次第次第に神を愛する念慮を失ひ、終に善行爲から離れて仕舞つた。死の神は來る。そして、その青白い馬上に憐れむべき、かの欺かれた失敗者を載せてゆく。俗世間は其の渴仰者に對して報いるものは實に此の如しである。故に「ジエムズ傳」第二章に全世界は惡しき有様にあり、人生の驕慢より世界は成れり」とある。次に第三に、若し惡魔の爲に誘惑されるならば、基督の薄命と苦難を思ひ出すに如くはない。かくの如き追想は如何なる驕慢の心といへどもこれに抵抗することが出来るものである。即ち使徒の御言葉にも神の御武具にて身を固め、嚴然として立て」とある。ソリナスは世界の不思議といふことを書いた人であるが、その人の言葉に依ると、アレキサンダーはグセフェラスと呼べる一頭の馬を所有してゐたが、この馬が武装されていよく戰場へ出ることに

なると、アレキサンダー以外の者は如何なる者でも決してその脊に上せなかつた。若し會々乗らうとする者があれば、馬は直に跳ね出してその人を地上に落したといふ話である。併し平和の時の馬具を着せられるならば、何人がその背に乗つても決して抵抗することは無かつた。これと同様に我等の主なる神を愛するその信仰の念で武装されてゐる人は、神以外の如何なる者をも、己が心の中に受け入れることは無い。隨て惡魔の誘惑がその人の心の中に入り込まうとしても、猛烈な勢ひで追ひ出されて仕舞ふ。この武装無しでは凡ゆる誘惑に抵抗することは不可能である。故に我等は結局神の光榮に浴せんが爲には、先づ我等自身を徳をもつて武装することを學ばなくてはならぬ。

### 三七、心を天に高めしこと

プリニーは鷲の物語を書いてゐるが、それに依ると親鷲は高い岩上の上に巢を造つて、子鷲を其所に養つてゐた。然るに一匹の毒蛇はこの子鷲を害さうとした。しかし、巢が餘りに高い岩の上に在つたから到底近寄ることが出来なかつた。そこで毒蛇は一策を案じ出して、その巢の風上に來て毒氣を

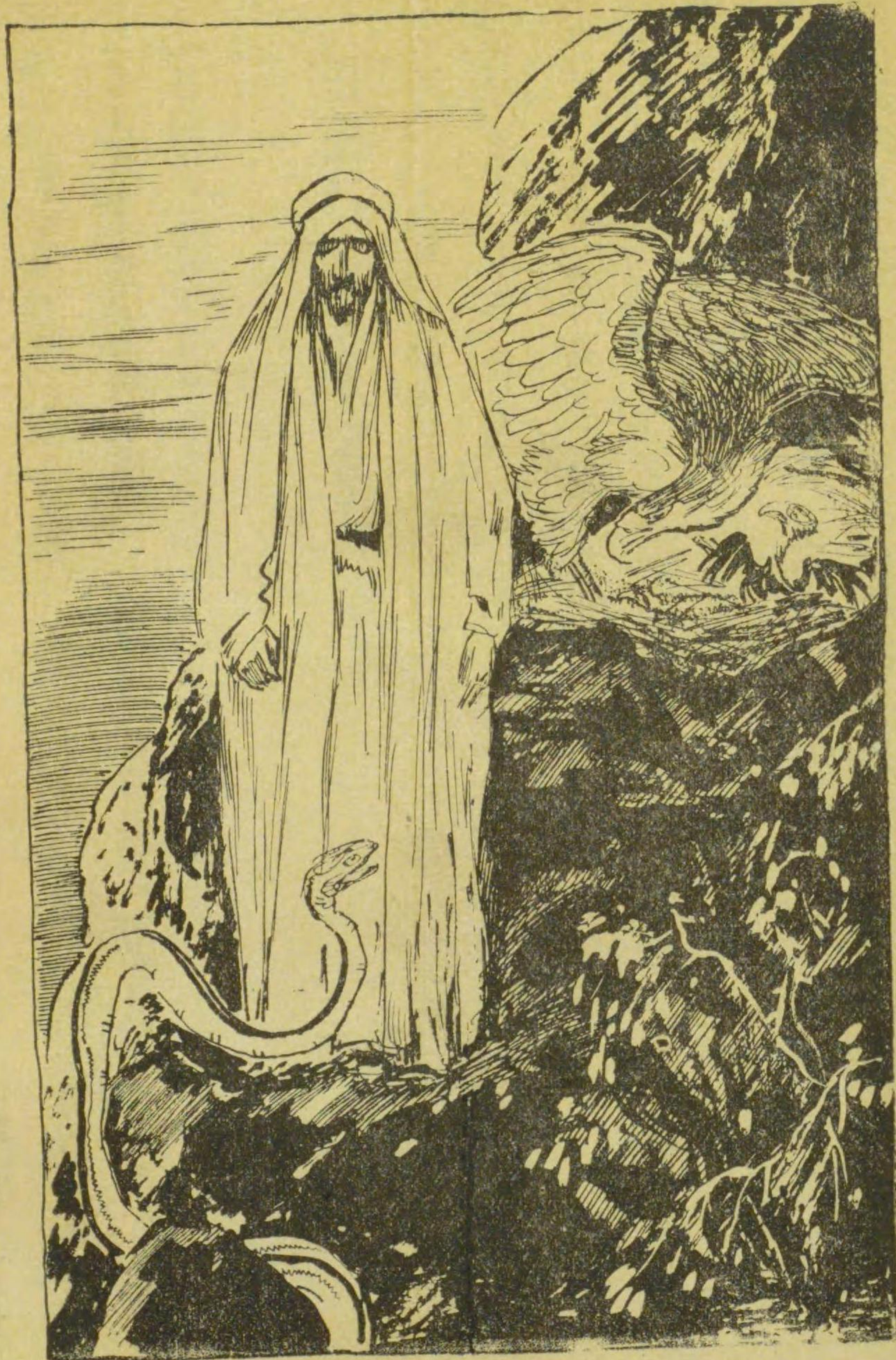
非常に多く吐き出して、それで空気を毒し、子鷲を毒さうとした。しかし、親鷲は誤らざる本能の力に依りてこのことを豫知した。そこで親鷲は一種の靈石を持つて來てこれを風防ぎの爲に巢の側に置いた。この石は或る不思議な效能を持つてゐたので、毒蛇の毒氣を防いで、その有毒な結果を恣にさせなかつた。

〔解説〕

可憐なる者よ、この鷲は鋭敏な心と向上的な精神を持つてゐる人間を指差したものである。子鷲は善事業を表はしものである。そしてこの善事業の象徴物たる子鷲を誘惑して殺さうとするのは悪魔、即ち毒蛇である。親鷲の巢を造つた岩はこれ即ち基督である。

三八、誤を防ぐに必要な用心

皇帝ヘンリー二世の治下、或る都市がその敵の爲に包圍された。敵の軍勢がその城壁に達しない先



に、頸に通の書面を結んだ一羽の鳩が降りて来た。その書面にはかう書いてあつた……「犬の時代が近づいて来た。世の中が騒がしくなる。援助を得よ。そして斷乎として防禦せよ」

〔解説〕

可憐なる者よ、鳩とは聖靈のことであつて、これこそは嘗つて基督の上に降臨し給うたものである。

### 三九、神と人との仲直り

ローマの年代記に書いてあることであるが、或る二人の兄弟は互に相争つたことがあつて、その二人の中の一人が、他の一人の領土を腹黒くも荒らしたのである。皇帝ジュリアスはこの事件を聞いて、その罪ある者の方を嚴罰に處せんと決心した。ところが罪を犯した方の者がこの事を傳へ聞かや己がこれ迄苦しめてゐたところの兄弟の方へわざわざ出馬して、その罪を謝した後、彼れの許を得、

さらに又、皇帝の己れに對する怒を和けて貰ふやうに努力してくれと依頼した。然るにこの會見の席に列席した人々は彼れを非難して、かくの如き人物は到底その罪を許さるべき者で無いと宣言した。これに對して彼れは次のやうに答へた。

「戦ひの時に小羊の如き溫和な態度をよそほひ、平和の時に獅子の如き兇猛な態度をよそほふ君主は、尊敬すべき人物ではありません。私の兄弟が假令私に對して好意を寄せてくれぬにしても、私は彼れの怒を和けることに渾身の力をそ、ぐつもりであります。私が彼れに加へた損害は、私の後悔したことに依りて又私が心の底から悲しんでゐることに依りて、既に十分復讐を受けてゐる譯であります」

皇帝はこの事件の顛末を聞いて大に満足した。そしてこれが爲に兩人の兄弟の間に和睦が芽出度く成立した。

#### 〔解説〕

可憐なる者よ、この二人の兄弟は神と人との子を指差したものである。彼等の間に不和のあるのは

恰も人間が大罪を犯すが如くである。皇帝は即ち神である。

#### 四〇、誘惑と貞節の診斷

マクロービウスの話したことであるが、或る一人の軍人がふとした事から、彼れの妻が他の男に對して、彼女の愛情をそ、いでゐることを感づいたのである。で、彼れは先づこのことを直接に妻に問うてみた。然るに彼女は非常に激昂して大聲を出してこれを否定するのであつた。彼れは彼女の確言だけでは満足することが出来なかつたから、或る賢い學者を訪つてこの問題を解決して貰はうと思つた。僥倖にも彼れの要求してゐるやうな人物が見つかつたので、彼れは直にその人を訪づれて、己が心の平和を亂されてゐる事件を委しく語つた。學者はこれを聞いてから次のやうに答へた。

「その御婦人と會つた上で親しく話してみないうちは、何れにも決定することは出来ません」

軍人は言つた。

「では今日、私と一緒に食事をして下さい。その折私は貴殿の御要求になるやうな機會を作りませう」

そこで、學者は軍人の家へ食事に招かれて往つた。食事が終つてから彼れはその怪しいと睨まれてゐる軍人の夫人と會話を始めた。そしてさまざまの事柄を話題として彼女に話しかけた。それが終つてから彼れは彼女の手を握つた。そして恰も偶然にやつたといふ風にして彼女の脈搏を指頭で觸れてみた。それから彼れは彼女が心を寄せてゐると噂されてゐる男のことをそれとなしに話してみた。さうすると彼女の脈搏が俄に著るしく上つて來てその熱さへ昂つて來たのである。彼れは其後直に彼女の夫のことを話し出して、前者に對する時と同様の仕方では試してみたのである。然るにこの時は彼女の脈搏が減じたのみならず、その熱は全く失せて仕舞つた。是に於て彼れは彼女の愛情が夫から既に離れてゐることを明かに知つた。即ち彼女の愛は既に豫てから怪しいと睨まれてゐるところの男の上にも、がれてゐたことが明かになつたのである。

かういふ譯からこの軍人は學者の賢明な手段を藉りて、彼れの怪しいと感じてゐたことが間違つてをらなかつたことを確實にした。

#### 〔解説〕

可憐なる者よ、この物語中の軍人は基督のことである。何故と申せば基督は我等の爲に悪魔と闘はれた後、洗禮に於て魂と結ばれたからである……魂と結んだといふことは、妻と結婚したといふことに外ならぬからである。然るにこの妻は餘りに他の男、即ち俗世界といふものを重く視たのである。脈搏がこの婦人の愛情を素破抜いたと同様に、心臓の鼓動、即ち俗世界に對する我等の愛好心も亦これで素破抜かれてゐる。

### 四一、我等の主基督の勝利とその慈悲

アゼンスの王コスドラスはドリアン人に對して、開戦の宣言をなした後兵を集めた。そしてアボロの神殿に使者を遣はしてこの度の戦争の勝敗を神の御託宣に依つて知らうとした。アボロ神は何れの軍でもその敵軍の劍に依りて主將を殲された方が勝ちになると託宣した。ドリアン軍も亦同様の神託を得たので、敵將コスドラスを殺してはならぬとお互に相警めてゐた。しかし、コスドラスは奴隸の

衣を着て雑兵に姿を貶し、敵軍の眞中央に突撃を試みた。敵軍は唯一人の兵が剣を振りかざして、かくも味方の軍勢を斬りまくつてゐるその大膽さに驚いた。そこで彼等はこのたゞ獨りだけの勇士に對して總攻撃をなし、やつとのことで彼れを殺すことが出来た。

コスドラスはこのやうにして愛國的戦死を遂げたので、その結果は首尾よく彼れの味方の大勝利となつた。彼れの陣歿したことはその結果に於て一面では大きな不運であつたが、しかし、彼れ自身の臣下がこれを悲しんだことにも劣らず、彼れの敵軍もこれを愁嘆したのである。

〔解説〕

可憐なる者よ、我等の主基督が神の御意に従つて、人類をその極惡な敵の掌中から救ひ出さうとして勇敢なる死を遂げられたことは、恰もこの物語中のコスドラスに似てゐる。コスドラスは國王の衣を棄て、卑賤な奴隷服を着たが、それと同様に基督は人間の姿に風をやつし、死をもつて我等の惡魔を克服し給うたのである。

## 四二、慈悲の缺乏

ヴァレリアスの書いてゐるところに依れば、ローマ市に嘗つて一つの非常に丈けの高い塔が建てられて、それに或人が四つの文字を三回づゝ繰返して刻んだといふことである。即ちPが三つ、Sが三つ、Rが三つ、Fが三つであつた。

是等の文字が注意を促したので、彼れは「嗚呼悲しいことがこの永劫の都に起きて來た」と叫んだ。貴族等はこれを聞いて彼れにその意味を問うた。彼れは是等の刻文の意味を次の如く解釋した。

「國家の父は死せり」……………*Pater patriae perditur.*

「彼れと共に知識は死せり」……………*Sapientia secum sustollitur.*

「ローマの王者等は死せり」……………*Ruunt reges Romae.*

「劍にて、火にて、饑饉にて」……………*Ferre, flamma, fame.*

その後この豫言が實際の出來事に依りて明かになつて來た。

〔解説〕

可憐なる者よ、精神的に言ふならば、彼れの國家の父とは慈悲の謂である。慈悲は神を愛する心の結果である。それが滅びて仕舞へば知識も亦滅びて仕舞ふ。故にこの道理で世界の王者等は噎れる。劍と火と饑饉は人間を貪り食べる。

四三、基督の御慈悲にて地獄から救濟された我等

昔、ローマ市の中央に大きな割れ目が地上に生じて、如何に人力をもつてこれを埋めようとしても到底無効であつた。この大事件に對して神々がいろ／＼その善後策を入々から問はれたので、かういふ答へをされたのである。即ち誰れにてもあれ自發的にこの大地の割れ目へ我れと我が身體を投げるものが現はれてくる迄は、永久にその穴がふさがることが無いといふことであつた。そこで國家の爲

にこの犠牲者となつてくれる者が無いかといふ意味のお觸れが國內隈なく發布された。しかし誰れ一人として私がそれをやりませうと申出る者は無かつた。然るにマークス・オーレリウスといふ人物が終に次の如きことを申出た：「若し私に滿一ケ年間だけ思ふまゝの生活することを許して下さい。ならば、ばその年の終りには必ずその穴に身を投げてみせますと」ローマの人々は悦んでこれを計した。そこでオーレリウスはその一ケ年間といふものは彼れの欲するまゝのことにして送つた。そして滿一ケ年の後に彼れは逞しい馬に跨つて、勇敢にその穴に飛び込んだ。大地は實にもものすごいやうな音を出して、直に彼れの上に閉ぢて仕舞つた。

〔解説〕

可憐なる者よ、ローマとはこの世界のことである。基督御降誕以前に、この世界の中央に地獄の穴があつた。そしてそれは我等の不滅の靈を呑み込む爲のものであつた。然るに基督はこの地獄の穴に身を投げ、それに依りて人類を救はれたのである。

## 四四、嫉妬

ティベリアスが皇帝の位に即く以前は賢明の人物として有名な者であつた。彼れの辯舌は人心を動すに大なる力を有つてゐた。又彼れの軍事的手腕は常に大なる成功を齎した。然るに彼れが一旦皇帝の位に即くや、その性質が全く豹變して仕舞つた。即ち彼れは皇帝となると共に兵事は悉く棄て、仕舞つたのである。そして國民は彼れの無慈悲にして然かも剛性强いその横暴振りに怨嗟の聲を放つたのである。彼れは彼れ自身の息子等を殺した。故に國民は何時自分等も殺害されるか安心が出来ぬと思つてゐた。貴族等は彼れを脅迫し、平民どもは彼れを呪詛してゐた。

彼れは以前は節酒家として評判者であつたが、今はその反對に放蕩者の第一人者として知られてゐた。そして終に酒天童子の名をすら與へられたのである。

偶々或る細工人が一枚のガラスの皿を製造して、これを皇帝の御目に供へた。皇帝はこの皿を破つてみようとした。しかし、それは無効であつた。だが、皇帝は何度も何度も破らうとした結果、皿は歪んだのである。細工人は槌を取出してそのガラスの皿を、恰も銅でも打つが如くかんかん叩いた。皿は忽にして平になつて仕舞つた。

ティベリアスは如何なる技術でさういつた不思議なことが出来るのかと訊ねた。しかし、細工人はこれはその秘密をお話し申すべき筋のことではありませんと答へた。こゝに於て彼れは直に死刑に處せられた。そして皇帝はその死刑宣告の理由を説明して言ふには、このやうな技術が實行されることになれば、金も銀も一文の價值もなくなつて仕舞ふからだ。

## 〔解説〕

可憐なる者よ、貧乏の時に謙遜で且つ有徳であつて、然かも一旦幸福の境遇に置かれるや、凡ゆる正しい考へを忘れて仕舞ふやうな人物は、皆ティベリアスの徒である。又富者に對して到底受取られる見込の無い贈物を提供する貧者は、皆これこの物語中の細工人の徒である。

## 四五、天國に入るべき善人

昔賢にして富める王があつた、その皇后は王から非常に愛されてゐたが、彼女自身は王を愛してを



らなかつた。彼女は不義の男兒を三人まで生んだ。三人の私生兒は長じて後、その名君たる父王に對して親不孝であつたのみならず、謀叛ばかりしてゐた。然るに或時、彼女は第四の王子を生んだ。これは正統の子であることは疑ふべからざる事實であつた。

王は可成りの老齡に達してから死去した。そしてその遺骸は彼れの父祖の廟に埋葬された。然るに王子等は父王の死後、王位繼承の問題について兄弟の間で大紛擾を起した。彼等の凡ては王位相續の要求を申出し、お互に相讓ることはなかつた。最初の三人は彼等の先取權を主張し、最後の者は彼れの正嫡なることを力説した。彼等はこの有様に於て到底一致することが不可能であつたから、止むなくこれを故王の忠節の軍人に訴へて、その人から判斷して貰ふことに相談を纏めた。そこでこの軍人は彼等の論争の要點を一通り聽取つた後で、「それなら私の忠告することを守つて下さい。必ず皆様の爲になりますから、先づ故王の墓を開いてその遺骸をお出さない。それから皆様は各一張の弓と一條の箭を準備することです。若し皆様の中で誰れでも故王の心臓を射通ほす者があれば、そのお仁はこの王國を所有することになります」と言つた。

皆の者はこの考を大に褒めた。そこで直に墓を開いて父王の遺骸を掘出し、これを裸體のまゝで樹木に縛しめた。先づ長男の射出した箭は父王の右手を傷つけた。彼等はこれで勝敗が決定したものの如く、彼れの王位繼承の正當なることを宣言した。然るに第二王子の箭はもつと心臓に近い所に落ちた。即ちそれは父王の口中に入つたのである。故に彼れも亦この王國を全部貰ふべき理由がある者だと考へた。然るに第三王子の箭は心臓そのものに命中した。隨て彼れは彼れ自身の權利が確定的のものとなり、且つ王位に即くことが明かであるときへ信じたのである。

第四王子即ち最後の王子の順番が來た。然るにこの王子は茲に箭を取付けて、最後の試みに取りかゝるこゝとをしないで、却て聲たて、泣き出した。そして彼れは兩眼に涙を一つばいに泛めながら次のやうに言つた。

「嗚呼、お氣の毒な父上よ、私は何の因果で今日迄生き存へてゐて、このやうに父上が不孝者の喧嘩の犠牲者になれるのを見なくてはならぬのでせうか。父上の血を貰つた者が、父上のその感覺の無い御遺骸を苦しめることが出来るものですか。私は父上のその貴い御身體に對して、それが生死何れにしたところで、到底箭を射ることは出来るものでありません」

第四王子が是等の言葉を發してから間もないことであるが、國內の貴族等は全國民と一緒になつて

皆異口同音で、彼れを選んで王位に即かせた。そして三人の野蠻な王子からは、その位や富を剥ぎ取つて永久に國外へ追放した。

〔解説〕

可憐なる者よ、賢にして富める王とは王者中の王者、君主中の君主を指差した者である。その譯は王者中の王者たる我等の主基督は、恰も彼れの愛してゐる妻に對するが如く、我等の肉に對して彼れ自身結びつかれたからである。然るに我等の肉は他の神々の後を追うて走り、終に基督に寄せなくてはならぬ愛好の念をすら忘却して、不義な行爲を敢てして三人の私生兒、即ち偶像信者、猶太人、邪教徒等を生んだ。第一王子が右手に傷を與へたとあるは、基督を虐待してその教を冒瀆したといふことに相當する。次に第二王子が父王の口中に箭を射たといふことは、邪教徒等が基督に酔や苦汁を飲ませたことである。第三王子は父王の心臓を射てそれに傷を與へたのみならず、なほ永久に傷を與へようとしてゐる。又その一面に於ては彼等は皆、それらの屁理窟を述べて、正しい者を欺かうとしてゐる。第四王子は善良なる基督教徒の凡てを指差すものである。

〔考證〕

この物語はその全體の調子が東洋的である。王位繼承問題、否寧ろ家督相續の問題を中心として、これに配するに父子の愛をもつてしたあたりは、頗る東洋式である。特にヘロドタスの第一卷に昔ヘルシア國に於て、親に背く者があれば、それは不義の子即ち私生兒であると考へられてゐたやうであるから、この物語中の三王子の如きも、或は不孝の子であつたといふ事實からこれを皇后の私生兒として書いたのでは無からうかと思はれる。かくの如き材料は東洋式のものとしてなくては、その出所なり、その使用上の目的なりが容易に理解することが出来ぬ。

## 四六、大罪惡

ジュリアスの語るところに依れば、我る男が五月森の中に入つたところが、七本の美しい樹木が青葉をこんもりと出してゐて心地がよかつた。それで彼れはこの青葉に非常にひきつけられて仕舞つて自分だけでは到底自宅迄運ぶことが出来ぬほど澤山の葉を集めたのである。折柄三人の男が彼れの援助に來て、彼れと彼れが苦しんでゐたところのその重荷とを持運んでくれた。然るに彼れが森を出るや

否や深い穴に落ちた。そして彼れの肩の上の重荷は彼れをその穴の底迄ひき落して仕舞つた。

ジュリアスは又動物物語の中で面白い事柄を書いてゐる。それに依ると鳥が巢を造つた後、卵を産まうとするものであるから、若し諸君がその場合に鳥に卵を産ませ度くなかつたならば、その巢を造つた樹木とその樹木の皮の間に、ガラスの灰を澤山詰めこんで置くに限る。ガラスの灰が其所に在る間は、鳥は決して卵を孵化させることは無い。

〔解説〕

可憐なる者よ、森とはこの世界のことであつて、其所には多くの樹木が繁茂してゐて、實に見るからに心地がよいものである。しかし、其所はたゞ大罪のみが芽を出す所である。人間は是等の罪惡の重荷を背に負ふ。次に救助に現れて來た三人の男はこれ即ち惡魔、俗世界、肉慾等である。穴とは地獄のことである。亦鳥も惡魔のことである。次に鳥の造つた巢は惡魔の餘りに多く宿る心そのものである。ガラスの灰とは我等の近時の終末を追憶する記念物のことである。樹木とは魂のことであり樹皮とは人間の肉體のことである。

四七、三人の王者

デンマルク國王は、かの基督降誕の日に星によりてジェルサレムに導かれたといはれる、東方の國の三人の君主に對して非常な尊敬の念を拂つてゐた。彼れは何事に依らず、己れ自身の力で到底決定することの出來ぬ事件が起こる毎に、この三人の聖者の神力を加護として仰ぐことに習慣づけられてゐた。信仰心の強いこの國王は多くの従者を引具して、是等の聖者達が華かに祀られてゐる殿堂に參詣し、それと同時に國王の使用に適するやうに作られた黄金の王冠を三つ持參した。國王は彼れ自身の領地に還つて熟睡してゐると、夢に三人の王者が最近寄進して貰つて黄金の冠を被り、金光燦然たる光を放つてゐる姿が明かに現れたのである。そして三人の王は代々國王に言葉をかけた。先づ三人の中の最も年長者である王が言葉をかけた……「我が兄弟よ、爾は幸福にも是所へ到着した。これより爾は幸福に還へることであらう」。第二の者は言つた……「爾は多くの物を提供した。しかし、爾はそれよりもつと多くの物を持還へるであらう」。第三の者は言つた……「我が兄弟よ、爾は正直者である。故に爾は我等と共に三十三ヶ年間、天國を治めることであらう」。それが終ると年長者は黄金の満ちてゐる箱を彼れに捧げて言つた……「これは知識の入つてゐる金庫である。これを持つてをれば爾は

爾の國民を公平に判断することが出来る」。第二の者は没藥の入つた箱を彼れに提供して、さうして言つた：「これは謹慎といふ没藥の入つた箱である。これを持つてをれば偽り多き肉慾の行爲を抑制することが出来る。己れ自身を支配し得る者は他人を支配すること最も巧みな者である」。第三者は乳香の満ちてゐる箱を持つて來て言つた：「これは信仰と慈善の乳香箱である。これを所有してゐる者は憐れな人を慰めることが出来る。露が牧草を露し、地を肥やすと同様に、王者の慈善は王者自身を星の世界にまで高めてゆくものである」

睡つてゐた王は、夢が餘りに鮮かですつ不思議であつたので、我れながら驚いて目を覺した。目を開らくと寶物の澤山入つてゐる箱が彼れの側に置いてあるのを見出した。彼れは彼れ自身の國に還つてから、夢の中にあつた事柄を熱心に實行した。その功德で彼れはこの假りの世を終るや否や、その當然の報酬として、永久の玉座を天國で與へられることになつた。

#### 〔解説〕

可憐なる者よ、三人の神聖な國王、即ち父と子と聖靈に、三つの王冠を齎す善良な基督教徒は、皆これこの物語中のデンマルクの國王である。是等の王冠は信仰、希望、慈善の三つの道德である。黄

金の箱は道德で満ちてゐる心である。没藥の箱は後悔を指差し、乳香の箱は神の御恵みを指差してゐる。

### 四八、罪人の末路

ダイオニシアスの記録に依ると、ペリルスと呼べる男がファラリス王の宮廷に事へて技師とならうとしたことがある。ファラリス王は有名な残酷な王者であつて、國內の人民を絶やし且つさまざまの亂暴な行爲を敢てして随分罪なことをやつた人物である。ペリルスも亦豫てから残酷なことにかけては普通の人に勝れてゐたので、一つの眞鍮製の牡牛を造つてこれを王に献上した。この牡牛の一方の腹に祕密の戸があつて、死刑宣告を受けた者は、この戸を通つてその腹部に投げこまれ、其所で焼き殺されることになつてゐた。そして、この細工の長所は、この牡牛の腹に押しこめられた罪人の發する苦悶の唸聲が、恰も牡牛の唸るのに似てゐるといふ點にあつた。随つてこれを聽く人の心は、人間の唸聲を耳にしないのだから、慈悲の感が起らぬといふ所に、奇抜な點があつたのである。ファラ